



教会学校教案誌

2007.7.8.9月号

日本キリスト改革派教会
中部中会教育委員会

No.26

2007年7～9月カリキュラム（第26号）

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句	対 応 表
	単 元 の 目 標			
7月1日	王国の分裂	列王記上11～12章	ヨハネ15:5a	63, 64 31
	王たちの罪ゆえ王国は分裂するに至った。なお民を憐れまれる神の愛を知ろう			
7月8日	バアルとの対決	列王記上18章	申命6:566	66 33
	バアルとたたかうエリヤ。主こそまことの神であることを知ろう			
7月15日	残りの者	列王記上19:1－18	使徒18:9b－10a	66
	主は共におられ、残りの者を残しておられる。主の励ましに耳を傾けよう			
7月22日	裁きの預言	エゼキエル6章	エゼキエル6:14b	
	バビロン捕囚は偶像礼拝に対する主なる神の裁きである。罪の大きさを知ろう			
7月29日	回復の預言	エゼキエル34章	エゼキエル34:14a	
	主ご自身がまことの羊飼いとて民を導かれる。救いの御業を待ち望もう			
8月5日	燃え盛る炉	ダニエル3:1－30	ダニエル3:18b	72 39
	神はご自身を礼拝する者を守ってくださる。まことの神にのみひれ伏そう			
8月12日 平和主日	ライオンの洞窟	ダニエル6章	ダニエル6:28	74 42
	異教の王さえ主なる神をほめたたえるに至る。主に従うことの力を知ろう			
8月19日	城壁再建	ネヘミヤ2章	マルコ9:23	77
	主は人の心に志を起こし、知恵と力を与えられる。主に仕えることを喜ぼう			
8月26日	主を喜び祝う	ネヘミヤ8:1－12	ネヘミヤ8:10c	78
	主を喜び祝うことこそ、力の源である。礼拝をささげる喜びを味わおう			
9月2日	役人の息子のいやし	ヨハネ4:43－54	イザヤ55:11	
	主イエスの言葉は力である。神の言葉を信じる者に与えられる幸いを知ろう			
9月9日	ベトザタの池でのいやし	ヨハネ5:1－18	ヨハネ5:17b	12
	「起きよ」と命じられる主イエス。主イエスにいやされて生きる幸いを知ろう			
9月16日 (17敬老の日)	生まれつきの盲人のいやし	ヨハネ9:1－12	ヨハネ9:3b	
	主は人を用いて神の御業を現してくださる。神の器とされていることを喜ぼう			
9月23日	ラザロを生き返らせる	ヨハネ11:1－44	ヨハネ11:25	33 49
	ラザロの生き返りは主イエスの十字架と復活を指し示す。命の主を仰ごう			
9月30日	キリストの十字架	ヨハネ19:28－30	ヨハネ19:30	46 66
	十字架は神の御業の成就。くすしき御業を成し遂げられた神をほめたたえよう			

※「対応表」欄の上段は、『教会学校教師指導書（旧約編・新約編）』（日本基督改革派教会大会教育委員会発行）の該当する単元を示しています。「対応表」欄の下段は、『神の救いの歴史』（日本基督改革派教会教育委員会発行、1999年）の該当する単元を示しています。

も く じ

2007年7・8・9月カリキュラム

まえがき	長田詠喜	4
巻頭説教	山下朋彦	5
日曜学校・教会学校訪問		
湖北台教会日曜学校の紹介	岡本 恵	9
特別寄稿		
西部中会合同夏期学校の沿革と活動内容	吉田 謙	13
自由募金のお願い		18

聖書研究・説教展開例・分級展開例

7月 1日	20
7月 8日	27
7月15日	34
7月22日	41
7月29日	48
8月 5日	56
8月12日	64
8月19日	72
8月26日	80
9月 2日	87
9月 9日	94
9月16日	101
9月23日	108
9月30日	115
成人科	122

教案誌会計報告

いのちのパン（こども聖書日課）	128
	129

2007年10・11・12月カリキュラム

2007年度年間カリキュラム	143
執筆者よりひとこと・あとがき	144
	146

まえがき

長田詠喜（高松東教会牧師）

この教案誌は発刊当時『日曜学校教案誌』という名前だったことを覚えています。ある時から「日曜学校」から「教会学校」へと名前が変わりました。改革派教会全体でも、ある時期から日曜学校という名前から教会学校へと切替えて参りました。しかし、今でも「日曜学校」と呼ぶ方もいますし、大会の統計表にも「日曜学校」の名前が残っています。

キチンとしたことを調べればよいのですが、ちょうど手もとに、松田輝一先生が恵泉教会で1976年に書かれた文章が記念文集に掲載されていましたので、それを参照します。それによると、そもそも日曜学校は1780年に英国グロスターでロバート・レークスによって始められた「マナーの躰、基本的知識を教え、信仰教育を施した」ものでした。

その日曜学校が、教会学校へと解消された理由として、松田先生は、(1)信仰教育を日曜一時間だけに限定してはならない。(2)その起源から、有志の単なる躰け教育に留まりかねない。(3)家庭そのものが世俗化核家族化していることを教会が配慮しなければならない。ということ挙げておられます。

つまり、教会学校という名称は、(1)全日的全生涯的全機会的な信仰教育を視野に入れる。(2)教会全体の業として信仰教育に関わる。(3)子どもを育てる家庭全体に配慮することを目指しているということです。前述の大会統計表でも「教会学校」の項目に家長会、婦人会、青年会が含まれているのはこの一項目や三項目を意識したものとと言えるでしょう。

贅沢を言えば、この教案誌が、成人科を更に充実させ、信徒の全生涯を通しての学びの手引きとなればと願います。

以前、教案誌の編集をされている先生に、この教案誌は難解ではないか、もっと簡単にマニュアルのようにしたらどうかと話したことがあります。その時その先生は、この教案誌が、単にCS教師が手を抜くための助けではなく、むしろCS教師がきちんと準備をするための助けになることを目指している。従って、ある程度難しいものを提供しているということをおっしゃいました。この教案誌は、実際大人が読んでも学びになる教案誌です。子どものためではなく、CS教師自身のために、更にはCS教師でない大人の方の学びのために、この教案誌が用いられればと願います。

「日曜学校」から「教会学校」と名前が変わってきましたが、更に最近「子どもの礼拝」という名前が増えることになりました。これは、教会学校が、単に「教育」の場に留まらず、むしろ教会の持っている全ての要素、礼拝の持っている全ての要素を持っていることを意味しています。

これについても、この教案誌の編集に関わる別の先生の講演で良い示唆を受けたことがあります。詳細は省きますが、要は「子どもの礼拝」というのは、子どものために大人が礼拝をしてあげるのではなく、子どもと大人と一緒に礼拝するということが本質的な要素であるということでした。教会学校というどうしても大人は子どもをお世話したり叱ったり教えてあげたりという意識になるでしょう。そうではなくて、まず大人が礼拝する。そこに子どもも一緒にいる。共に礼拝する「子どもの礼拝」の実現を強く願います。

「キリストによる深い配慮」

—マルコによる福音書6章30～44節による説教—

山下朋彦（平和の君伝道所宣教教師）

さて、使徒たちはイエスのところに集まって来て、自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した。イエスは、「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と言われた。出入りする人が多くて、食事をする暇もなかったからである。そこで、一同は舟に乗って、自分たちだけで人里離れた所へ行った。ところが、多くの人々は彼らが出かけて行くのを見て、それと気づき、すべての町からそこへ一斉に駆けつけ、彼らより先に着いた。イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。そのうち、時もだいぶたったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、時間もだいぶたちました。人々を解散させてください。そうすれば、自分で周りの里や村へ、何か食べる物を買に行きましょう。」これに対してイエスは、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」とお答えになった。弟子たちは、「わたしたちが二百デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか」と言った。イエスは言われた。「パンは幾つあるのか。見て来なさい。」弟子たちは確かめて来て、言った。「五つあります。それに魚が二匹です。」そこで、イエスは弟子たちに、皆を組に分けて、青草の上に座らせるようにお命じになった。人々は、百人、五十人ずつまとまって腰を下ろした。イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された。すべての人が食べて満腹した。そして、パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった。パンを食べた人は男が五千人であった。

（マルコによる福音書6章30～44節）

この出来事は「パンの奇跡」又「五千人養いの奇跡」と呼ばれて、主イエス・キリストがパン五つと魚二匹をもって五千人もの大勢の人々の空腹を満たした出来事が述べられています。この大いなる奇跡の注目点は、私たちに対する主イエス・キリストの憐れみの深さ・広さ・大きさであり、主を慕い求める人々・主のみ言葉に聞き従おうとする者への実に行き届いた主の深い配慮・おもんばかりをこの奇跡を通して強く覚えさせられます。

ところで、今日のお話のすぐ直前にガリラヤ国守ヘロデ・アンティパスによるバプテスマのヨハネ殺害事件の回想が語られています（6：

14～29）が、そのところは途中の挿入であって時間的なつながりからすると、今日の出来事はその前の6章7節からの十二弟子の伝道派遣に続いています。主は弟子達をみ言葉の権威と共に、病いをいやすという愛のわざをもって伝道実習へと派遣されます。そして弟子達はその実習を終えて再び主の元に戻ってきました。初めてのことであり彼らにとってわくわくする、そして実り豊かな働きであったに違いありません。6章30節に「自分たちが行ったことや教えたことを残らず報告した」とあるところに、弟子達のこの時の思いをくみ取ることが出来ます。その結果ますます主を求める人々がガリラ

ヤ地方のあちらこちらからもやってきて、弟子達は全く休む暇も無くなってしまいます。それで主は、魂の養いのために仕える者があまりに疲れすぎてしまってそれが出来なくなってしまうことを深く配慮されて、彼らを休ませようと湖を船で渡って人里離れたところに差し向けられました。けれどもそのことを知った群衆は陸伝いに先回りして弟子達を再び捉えようとします。この群衆が移動した距離は、およそ14～15km程とのこと。歩いておよそ3時間強の道のりでしょうか。それは当時としても決して近い距離ではなかったと思います。それで主御自身も、6章34節にありますように「飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた」のです。それ程に人々の慕い求めや飢え乾きを痛いほどに主はご存知でいらっしやいました。ここには直接に記されていませんが、自分の利益にのみ奔走する祭司達、又自分だけ清くあらうとして人々を排除し閉め出すファリサイ人等の当時の宗教的指導者たちへの非難が一方にあり、だからこそ群衆は自己犠牲的なバプテスマのヨハネの出現を喜び、彼のまっすぐな教えに心を向けようとしました。それを無惨にもヘロデは殺害し、人々の拠り所・望みを奪い取ってしまいます。そうしてバプテスマのヨハネから洗礼を受けられたイエス様が伝道の働きを開始なさるやいなや、この方こそという強い期待とみ言葉への飢え乾きで群衆は主のところに来てきたのです。そうした状況・背景の中でこの五千人養いという主の驚くべき奇跡がなされることとなります。主の、人々への大いなる憐れみが最初から全体を支配している中での奇跡でした。

群衆は本当に飢え乾き、み言葉を求めて時間のたつのも忘れてイエス様の語られる神のみ言葉・福音・神の国の祝福に心を傾け聞き入りました。ところがその途中で主の弟子達が割り込み、群衆を主から引き裂こうとします。そのこ

とが6章35～36節に語られています。「ここは大変へんぴなところで食料を手に入れることが出来ない。しかも時間もたって日も傾き初めてしまった。このままだと食事がとれない。だからここで食料の得られるところに人々を買に行かせては」と、集会の中断と解散の提案を弟子たちは出したのです。するとすかさず主は、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」、つまり解散させるべきではない、とおっしゃたのです。主も弟子達も共に双方、それぞれ人々への愛・配慮からそのように異なった判断と対処とを出しました。この両者の提案だけを並べてみると、私たちは弟子達の側の考えの方に軍配を上げるのではないかと思います。第一にへんぴなところであること、二つめに日も傾きかけたこと、更に十分な食事を人々も自分たちも用意することが出来ないこと等、冷静で客観的な状況把握が弟子達にはあります。むしろイエス様の命令の方が現実的でなく無理難題ではないかと言えます。私たちが聖書を読んでいきますと、しばしば主イエス・キリストの受け止め方と弟子達の受け止め方の相違、又主の思いと人々の思いの大きな違いに出くわします。同じ状況をとらえ、それぞれに深い配慮がありながら、そこで出てくる結論や対処が異なるのです。それはどうしてなのか。土台が違う、前提が違うためなのです。弟子達は霊の糧であるみ言葉は神様に求めますが、肉の糧はこの世に求めるという二元化・切り離しがあります。しかし主はどちらも神様に求めるものであり、そして神様はどちらをも満たすことのお出来になるお方である、それが双方の違いとなって現れたのです。つまり神の主権に制約を設けるのが弟子達であり、他方神の主権は全ての領域に及び、そして全ての善きものの源は神様からである、そこに主は立ち続けようとされたのです。

確かに主イエスの思いと弟子達の思いとは大きな隔たりがありました。主は群衆を解散させるべきでないとおっしゃり、加えて弟子達に

「あなたがたが人々に食べ物を与えなさい」と6章37節でお命じになられます。この主のお言葉は、弟子達にその実力があるとか、まして弟子達に全てをお任せになられたのではありません。そうではなく、むしろ逆で彼らの持っているものがどんなにわずかなものであるのか。だからこそ何よりも主に信頼を置くように、そしてたとえそれがどれ程わずかのものであっても、それを主におささげしていくときに、それらを主は何倍にも増やして下さる方、豊かに用いて下さるお方であることを弟子達に学ばさせる為にお命じになられたのです。私たちは、自分が無力であると知る・認めることは大変大事なことです。自分の力に寄り頼む人は、その実力やおごりにいつかは裏切られることになるでしょう。確かに私たちは無力さを認めざるを得ない状況にしばしば立たされることがあります。しかし、この私が無力であることと、だからもう私は何も出来ない、と失望してしまうこととは全く違います。何も出来ないときらめるだけなら、それは単なる挫折であり、又失望に過ぎません。まさに、そこで信仰が生きて働くのです。「この私は無力です。その通りです。けれども私たちの信じるお方は、決して無力でも微力でもありません」と。弟子達の状況観察は、まことに冷静沈着なものでした。正しく現実を把握しているものでした。しかし、その見える現実だけが全てではない、主が共にいて下さるといふ霊的な現実、いや信仰における現実、それが完全に欠落したものだだったのです。それに気づかせ、そして主にあって望みを持つことの幸い、信仰によるどころの勇気を私たちはここから明白に示されるのです。ともすると、こんなに貧しく弱い私に何がとか、こんな小さい群れで何が出来ようと、主の深く大きな御心を自分勝手に先取りして、何も出来ない、いや何もしようとしなさいということとは果たしてないだろうか。主イエスは、それとは異なっていました。「あなたがたのそのわずかのもので十分で

はないか。いや十分どころか人々の必要をみたしてあまりある程なのだ」と。いやこの私自身は全く無力であってさえ良いと言えます。なぜならそこに主のみわざが生きて力強く働き始めるからです。

ところで一体どこで主の奇跡が起こったのでしょうか。弟子達が自分たちの持っている食べ物を主に差し出した時なのでしょう。又主がそれを受けとられて祈りをもって祝福された時なのでしょう。いやそれを再び弟子達が受けとって人々に配った時だったのでしょうか。更にそれを受けとった人々の手の中で起こったことなのでしょう。いつ、どこで、どのようにしてわずか五つのパンと二匹の魚が大勢の人々のお腹を一杯に満たしたかは、はっきり記されていません。もちろん決定的なのは、主が受けとってそれを祝福された時である、聖別の祈りをささげられたことにある、それは確かに言えます。しかし、その他の時には全く何も起こらなかったのでしょうか。いやそうではありません。弟子達がささげた時にも、そして再び主から受けとって人々に配った時にも、更に配るのを信仰をもって受けとった人々の手の中でもなされていたのです。主なるお方は、私たちを神御自身の持つておられる豊かな祝福に預らせて下さること、又そのみわざのためにこの私自身を用られることを切に願っておられます。私たちが私たち自身の手の内に置いている限り、それはそのままです。もしかしたら腐って無くなってしまいかもしれません。けれどもそれを主にお渡し、そしてその為私共が主にお仕えていく時に、それらは確かに配っても配っても決して無くならないものとして下さるのです。シドンのサレプタのやもめに預言者エリヤが遣わされた時、彼は彼女にこう言いました。「壺の粉は尽きることなく、瓶の油はなくならない」(列王記上17:14)。神様のみわざは本来そうした性質のもので。主の愛、聖霊によ

る喜び、信仰の望み、み言葉の力は、これは配っても配ってもなくならないもの、いやそうすればするほどにますます増えていく性質のものなのです。主とそのみ言葉による命の交わり、主にある兄弟姉妹との祈りの支えと恵み、伝道のみわざの大いなる祝福と実りを示すこと、それがこの給食の奇跡の狙いではなかったでしょうか。

まさにこの主のみこころに立ちただかろうとした弟子達の姿は、地上の教会や教会学校に例えることができます。地上の教会（教会学校）はいつもいつも頭である主イエス・キリストのみ心を正しくくみ取り、それに従っているのでは残念ながらありません。それとは逆のむしろ主のみ心に背き、逆らおうとさえいたします。けれどもたとえ地上の教会がそのような有様、

姿勢であっても、主の明白なみ心とみ業とは、それでも実現されていきます。誰もそれを阻むことは出来ません。最近つくづくと思わせられていることは、植物の花には一年ですぐ咲くものもあれば、何年もかかってようやく咲く花もあるということです。五年目では未だ咲かないかも知れません。でも六年目で咲く場合だってあります。教会の小ささ、貧しさ、卑しさにだけ目を向けずに、主ご自身に、主の約束にこそ心をしっかりと向けていきたいと願います。また私たち自身も教会の小ささ・貧しさに押しつぶされず、又決してひがまないうでじっとその重圧に耐えつつ喜びながら忠実に主に仕える幸いを主から与えられたいものです。そうする時に主は必ず、私たちへの深い憐れみと配慮とをもって顧みて下さいます。主に望みと信頼とを置いてみ言葉が結ぶ実りを祈り求めましょう。

湖北台教会日曜学校の紹介

岡本 恵（湖北台教会牧師）

1. はじめに

湖北台教会は、すでに皆さんをご存知のように、2007年3月21日に銚子栄光伝道所の献堂式を行いました。湖北台教会の群れとは別の地域で、主の日に、新しい会堂で、銚子栄光伝道所の群れが礼拝を守り始めました。

その意味では、湖北台教会と銚子栄光伝道所の日曜学校の報告をさせていただくことがふさわしいのですが、紙面が限られていますので今回は湖北台教会の日曜学校について紹介させていただきます。機会をいただきましたら、銚子栄光伝道所の日曜学校の活動についても報告させていただける、と思います。

2. 湖北台教会の簡単な紹介

湖北台教会は、1972年に伝道が開始され、教会設立は1983年です。現在の現住陪餐会員は、銚子栄光伝道所の会員（現住陪餐会員23名）と合わせて72名です。未成年の契約の子供たちも、8名ほどおりますから、教会の中だけに限っても、日曜学校の働きは大切なものがあります。

3. 日曜学校の礼拝と分級の様子

さて、日曜学校の礼拝のことですが、主の日の午前9:00から始まり、9:30には終わります。礼拝のお話の時間によって左右されることもありますが、ほとんど9:30には終わるようにしています。次の分級の時間も大切にしたい、との思いからです。

礼拝の持ち方は、オルガンによる奏楽と共に、心の準備を整えます。それから、共に最初の讃美歌を歌います。幼稚科の子供たちや小学生も

おりますので、小さい子供たちが分かりやすく、歌いやすく、覚えやすいこともあり『こどもさんびか』（日本基督教団出版局）を用いています。

その後、主の祈りを共にささげますが、主の祈りをささげる前には、「主の祈り」という司会者の言葉の後で一緒にささげます。この言葉があると、子供たちもほとんど同時に主の祈りに入ることができるようです。主の祈りの後に聖書を朗読します。朗読の聖書は、当日のお話のところで、朗読の箇所は、それぞれの教師に任せられています。『成長』（CS成長センター）の聖書箇所にはかなり長い部分を取り上げられることがあるのですが、その部分をほとんど読む場合もありますし、お話のポイントとなる箇所だけを読む、という場合もあります。

『成長』には副教材として、その日のお話に関係のある絵がコピーできる形で別冊になっているのですが、時に応じて、紙芝居を用いながら話しをされたり、ご自分で絵を描いてこれたり、あるいは、白板に絵や文字を書きながら、説明を加え、子供たちに質問を投げかけながら、アドリブを織り交ぜます。一人の一人の先生方の個性が一番現れる所です。それでも、子供たちが10分の集中を持って礼拝時間を過ごすことは、大変なことです。いかに、神様に思いを向けてもらえるか、そのための工夫は、これからもますます求められると思っています。週日のテレビやゲームは、飽きさせないための努力が日夜なされているのですから。

お話が終わると、教師のお祈りの後、一緒に讃美歌を歌います。三か月分の予定表に従って讃美歌を歌うのですが、この讃美歌の選択に、

一番時間がかかります。それほど多くない讃美歌の中から、主題にふさわしい讃美歌を選ぶことは、一番苦心が必要とされることです。

その後、『こどもカテキズム』（中部中会教育委員会発行）を用いて、教理問答を行います。問答のみでは内容を十分に理解することは困難ですので、契約の子クラスにおいて、その解説を行います。

問答が終わりますと、献金をささげます。献金は、毎週異なった子供たちに、奉仕をしていただいています。高校生から幼稚園児まで幅広いのですが、神様のために奉仕する喜びを感じていただきたい、ということが目的です。

礼拝が終わると、第一週には、その月に誕生日を迎える子供たちに、一人一人誕生日カードを渡して、皆で拍手をして誕生日をお祝いします。

その後、分級に分かれます。分級は、幼稚科、小学科低学年、高学年、そして、中高生科と分かれます。幼稚科と小学科は、その日の礼拝の

お話と関係している『成長』のワークブックを用いています。それぞれ、ワークブックの内容に、教師方の工夫を重ねているようです。

中高生科は、信仰告白のための準備ということも含まれているために、小教理問答書を用いています。担当は牧師です。ほとんどが中学生という場合には、具体的な例などを盛り込んだ説明を、牧師作成のプリントを用いて行っています。しかし、学年が進み、中学生と高校生が一つのクラスにおられる場合には、プリントも工夫し、できるだけ口頭で、具体例を入れ、質問をしながら、一人一人が自分のこととして学んでいただけるように心がけています。

先に申しあげました契約の子クラスは、『こどもカテキズム』を用いています。このクラスは、一ヶ月に一度ですが、対象に応じて、幼稚科、小学科、中高生科と分かれます。昨年は、契約の子クラスで学んでいた二名の契約の子が信仰告白に導かれました。



礼拝の様子

4. 年間行事や活動の紹介

1) 日曜学校の年間行事には、大きく分けて二つの行事があります。約二か月に一度持たれる子供会と、教会の行事と同時に持たれるイースターやクリスマスの行事です。

子供会は、案内のチラシを近くの幼稚園や二つの小学校の子供たちに配布し、それぞれの季節に合わせた内容を考えます。春は野外に出かけて、礼拝を守り、青年会や男子会、婦人会の方々の参加もいただいて、バーベ

キューや焼きそば作り、そしてゲームなども行います。野外で神様の恵みを覚えます。

夏の夏季学校は、以前一泊したときもありますが、今は、朝10時くらいから夕方5時頃までの時間をとって、子供たちの手作り昼食(カレーが多いのですが)を楽しみながら、聖書のお話、そして、工作、ゲーム、スイカ割、花火などで過ごします。工作が一番盛り上がります。これまでペットボトルの水ロケットやタイルのモザイク画、ウチワ作り、染物などを行いました。秋は、収穫を覚えて、お餅やお団子、たこ焼き、お好み焼き、素朴などころではおにぎり、などを作り、食べ物を与えてくださる神様に感謝をささげます。

2) もう一つの行事は、教会行事と重なりますが、イースターに進級式を行い、プレゼントを渡します。子供たちが、今年は何かなど期待する時でもあります。また、イースターの時には、分級をお休みして、神様を賛美し、卵探しを行います。子供たちも見つけるのが大変ですが、それでも見つけると素直な叫びが上がります。その後、実際の卵でイースターエッグを作ります。最近、カラフルで、色々な聖書物語を印刷したエッグ用のフィルムもありますので、それらを利用しています。今年は、卵を、大きな巣のように飾られたお皿の上に置いたことが、とても好評でした。

クリスマスは、共同の礼拝の行事と重なるのですが、一年で一番楽しい準備の時かもしれません。降誕劇を行ったり、クリスマスに関係したスライドに合わせて、子供たちも教師たちも、セリフの練習をします。工夫した衣装が決まったときは、皆が大喜びです。大人も子供も一つになって、イエス様のお話を聞き、ゲームや時にはマジックも披露され、サンタクロースの登場に子供たちも大喜びです。フランス語で語るサンタクロースに、子供たちは目をぱちくり、びっくりしたことも

ありました。子供さん方の保護者の方々も見えられて、楽しい時となります。

教会が出来るまでの10年くらいまでは、日曜学校出席平均が87名の時もあり、クリスマスの出席者が150名にもなった時があるなど、今から考えるとびっくりします。

今は、本当に集まる子供たちが少なくなりました。ほとんど契約の子供たちです。銚子からの子供たちが加えられると8名くらいになるのですが、だいたい4~5名の子供たちと礼拝が守られています。しかし、イエス様が子供たちの魂を愛しておられることを覚えて、礼拝を守り続けさせていただきたい、と祈り求めています。

5. 教師会の持ち方

1) 教師会は、日曜学校委員会の形で、月に一度、第四主の日の礼拝の後で開かれています。色々な具体的な行事などについて、青年の委員方から新しいアイデアが提案されるなど、活発に意見が交換されています。

委員全体で考えなければならない行事などの予定を決める場と、教育の実際・予定表などについて考える教師の協議の場を分けて行うようにしています。

しかし、色々な工夫をして礼拝や行事が計画・予定され、実行されますが、実際の礼拝に出席して下さる子供さんたちは、ほとんどありません。魅力ある礼拝と、礼拝につながる日曜学校の行事と活動のあり方を探り求めて行きたい、と思います。以前、日曜学校だよりが作成されていましたが、最近、日曜学校の様子を、教会の内外に知らせるためにも、日曜学校だよりを発行することが話題になっています。

色々な形での日曜学校の働きがありますが、それぞれの働きを主が御心に適って用いてくださることを祈り求めています。

西部中会合同夏期学校の沿革と活動内容

吉田 謙 (西部中会教育委員会委員長)

1. 西部中会：合同夏期学校の働きの目的

この合同夏期学校の働きの始まりは、1997年、西部中会教育委員会の教会学校小委員会が中心となり、合同夏期学校準備委員会(《委員長》山中雄一郎、《書記》安田直人、《会計》加門勝郎、《会計・渉外》鳥井一夫、松村道雄、高島潤)が組織されて、第1回合同夏期学校が開催されました。

この働きの目的は、教会における次世代への信仰の継承の課題と教会学校の生徒の減少の問題に、中会的に取り組むことにあったと聞いております。

すでに、中会レベルでは、中高生会、学生会、青年会の働きはあったのですが、小学生を対象とした教会学校の中会的働きははまだ十分ではありませんでした。そこで、教育委員会では、次世代への信仰の継承の課題に取り組むに当たり、小学生時代からの取り組み抜きにしては、始まらないと考えました。信仰教育を考えるに当たって、小学生から中高生へ、中高生から大学生へ、大学生から青年へ、それぞれの成長段階に応じた信仰教育に取り組むことにより、教会の子供たちの継続して一貫した信仰的成長を促すことが可能になると考えました。

しかも、諸教会における教会学校の生徒の減少の中で、いつもは数少ない人数で教会学校生活をしている子供たちです。その子供たちが、年に一度の機会であっても、ちがう教会の様々な多くの子供たちと出会い、一つの教会の枠を超えて、交わりを広げ、中会内の大きな広がり共有し、共に励ましながら成長できる機会を提供することが必要であると考えました。

以上のような目的をもって始められたのが、

この西部中会：合同夏期学校の働きです。

2. 合同夏期学校のこれまでの活動 (1997年から2006年/計10回)

(1) 各回の活動内容 (6年を1サイクルとする)

《一巡目》

・第1回 (1997年) 校長：山中雄一郎 生徒：55名、教師：19名

テーマ：「イエスキリストに！」(主と共に)

分級：①マタイ8：23-27 (嵐を静めるキリスト)

②ルカ19：1-10 (ザアカイ)

③マタイ25：31-46 (羊と山羊のたとえ)

・第2回 (1998年) 校長：山中雄一郎 生徒：45名 教師：19名

テーマ：「神さまありがとう！」(神への感謝)

分級：①ルカ17：11-19 (重い皮膚病の10人を癒す)

②出エジプト記16章 (天からのマナ)

③マタイ25：31-46 (羊と山羊のたとえ)

・第3回 (1999年) 校長：山中雄一郎 生徒：48名 教師：19名

テーマ：「光の子どもたち！」(みんなと共に)

分級：①ルカ15：11-32 (放蕩息子)

②ダニエル書3章 (三人の信仰仲間と金の像)

③ヨハネ13：1-17 (洗足)

- ・第4回 (2000年) 校長：安田直人 生徒：44名 教師：22名
 テーマ：「神さま、あのね！」(神への祈り)
 分級：①マタイ6：5-8 (隠れたことを見ておられる神様)
 ②創世記18：16-33 (アブラハムの執り成し)
 ③マタイ26：36-46 (ゲッセマネの祈り)
- ・第5回 (2001年) 校長：鳥井一夫 生徒：44名 教師：17名
 テーマ：「イエスさまと歩こう！」(キリストに従う)
 分級：①ルカ5：1-11 (ペトロの召命)
 ②ルカ22：31-34 (ペトロが信仰を失わないように祈るイエス)
 ③ヨハネ21：15-19 (私を愛するか、私に従いなさい)
- ・第6回 (2002年) 校長：吉田謙 生徒：52名 教師：19名
 テーマ：「イエスさま、だいすき！」(キリストの愛)
 分級：①ルカ2：1-20 (クリスマスに表されたキリストの愛)
 ②マルコ15：6-41 (十字架に表わされたキリストの愛)
 ③ルカ24：36-53、コリントー15：19-20 (復活に表わされたキリストの愛)

《二巡目》

- ・第7回 (2003年) 校長：吉田謙 生徒：49名 教師：21名
 テーマ：「いつもいっしょのイエスさま！」(主と共に)
 分級：①マタイ8：23-27 (嵐を静めるイエスさま)
 ②ルカ19：1-10 (ザアカイ)
 ③使徒9：1-22 (サウロの回心)
- ・第8回 (2004年) 校長：吉田謙 生徒：

- 44名 教師：18名
 テーマ：「主にハレルヤーすばらしい世界—」(創造と贖いと完成の神への感謝)
 分級：①創世記1：1-2：9 (善き創造)
 ②創世記3：1-24、ヨハネ3：16 (人間の墮落と神の救いのご計画)
 ③ルカ24：44-53 (伝道命令と世界の完成)

- ・第9回 (2005年) 校長：吉田謙 生徒：39名 教師：20名
 テーマ：「わたしたちの教会—キリストのからだ—」(みんなと共に：教会論)
 分級：①ダニエル書3：1-30 (三人の信仰の仲間と金の像)
 ②ルカ15：11-32 (放蕩息子)
 ③コリントー12：12-27 (キリストのからだ)
- ・第10回 (2006年) 校長：吉田謙 生徒：61名 教師：22名
 テーマ：「主のいのり」(神への祈り)
 分級：①マタイ6：9a (主の祈りの序言と結び)
 ②マタイ6：9-10 (神様の栄光を求め祈り)
 ③マタイ9：11-15 (私たちの必要を求め祈り)

(2) 信仰教育の内容

合同夏期学校では、6年間を1サイクルと捉え、各回のテーマを設定しています。そのテーマは、ウエストミンスター小教理問答の主要点を網羅して、6年間合同夏期学校に参加すれば、ウエストミンスター小教理問答の主な内容を学ぶことが出来るようにと考えています。

さらに、現代の世界状況との関係の中で、子供たちの置かれた生活環境から来る問題点をも考慮に入れながら、聖書と教理と信仰生活を学

ぶことに留意しています。

テーマを提示する開会礼拝で始まり、次に各学年の分級では、担当教師の指導の下、テーマに沿った聖書箇所が学ばれ、最後には三日間の学びの総括として、子供たち自身による学びの発表がなされます。

(3) 自然と野外活動

いつもは人工的環境の中で生活し、自然に触れる機会が少なくなっている子供たちです。そのような子供たちに、合同夏期学校では、両親や家族から完全に離れ、電話やテレビ、ゲームボーイや自動販売機から完全に離れ、自然に自分で直接触れ、考え、行動し、五感全身を使って生活し遊ぶ喜びを大事にしています。

その中で、子供たちは、自然の不思議さや怖さや面白さを味わい、自分の手や体を使って野外で遊び、飯盒炊飯などを通して食べることの苦勞と喜びを味わっています。このことは、文明の利器に取り囲まれた便利な日常生活を、今一度見直し、生かされていることの喜びと、生きることの苦勞の一端をも味わい知る機会ともなっています。

(4) 交わりの広がり

一年に一度の合同夏期学校ですが、一つの教会の枠を超えて、色々なちがう教会の各年代の多くの子供たちがお互いに出会い、この三日間の時間を同じ場所で生活し共有できることは、子供たち自身が一個教会を超えた中会的な交わりを肌で実感し、その視野を広げる機会となります。

いつもは、一つの教会の数少ない人数で教会学校生活している子供たちですが、この合同夏期学校の機会を通して、同じ信仰の仲間たちに出会い、交わり、友情を育み、離れていても一緒に歩んでいる仲間がいるという大きな励ましと希望が与えられています。

(5) これまでの合同夏期学校の働きの実り

一番大きな実りは、これまでの合同夏期学校を経験した子供たちが、中学生、高校生、大学生になっても、合同夏期学校で得た自分たちの信仰の交わりを、各会で積極的に継続し、育み、展開し、信仰告白や洗礼への道を励ましあいながら歩んでいるということです。ここには、小学生、中学生、高校生、大学生という信仰の成長段階に応じた道筋が、中会的な一つの連続した流れとなつて開かれつつあることが示されていると思われまふ。

この中会的な実りは、各個教会の子供たちの教会学校生活にも、孤立感ではなく、大きな交わりの中にいるという、大きな励ましと希望をもたらしています。

3. 新しい試み

第9回から、障碍（自閉症）を持った子供に専任の教師（二人）をつけ、その子供に合ったペースで団体行動と個別行動ができる体制を試みています。現在、その対象の子供の参加は1名ですが、その子は前回に体験した喜びを覚えているようで、今回の合同夏期学校では、大きな安心感に包まれた様子で、表現（絵を描く）やコミュニケーション（お祈りなど）などに取り組む姿勢を見せてくれました。また、彼を取り巻く子どもたちも、自然に彼の存在を受け入れており、優しく見守ってくれているようにも思えます。まだまだ手探りの状態ですが、この取り組みを通して、共に生きることの豊かさを、子どもたちも教師も肌で学びつつあることは確かです。それだけに、委員会では、中会的な広がりの中で、このような取り組みの体制を恒常的に整え、充実させていく課題を覚えています。

4. 子どもたちの反応

合同夏期学校では、毎年、合同夏期学校の最後の分級の中で、感想文を書いてもらい、それ

を後で編集し、文集として発行しています。最後に、その文集の中から、一人の子供の感想文を紹介したいと思います。

(千里摂理教会牧師)

「夏期学校最高!!」(抜粋) 6年 日野史輝

ぼくはこの合同夏期学校に6年間続けてきました。6年前の小さい1年生の時から今に至るまで続けてきたのです。今年の題は『主のいのり』です。6年間も来たとなると六甲YMCAにもかなり慣れました。六甲山の良い環境で楽しく勉強ができたというわけです。一番勉強になったのが、主のいのりは最高のおいのりだということ。礼拝や分級を通してイエス・キリストのすごさがわかったし、父なる神とよべる喜

びが伝わってきました。神様のおかげで友達二人をよべることができたのが、すごくすごうれしかったです。最初は来ないって言ってたけど天のお父さんが招いてくれました。今年の夏期学校はたくさん学べたし、とても楽しかったです。やっぱりイエス様が教えてくれた主のいのりは、すごいです。父なる神様とお話できることもすごいです。三位一体の神様は最高です!! 何をいっても今年が最後。6年間の思い出はきっと心にしまわれているでしょう。ここで知り合った友達もとても貴重です。中高生会で会えたらいいけど……。『この6年間の夏期学校どれもが最高。』このことがぼく自身、自信をもって言えることです。

(合同夏期学校、6年間しめくり作文)

< プログラム >

8月1日(火)	8月2日(水)	8月3日(木)
	6:30 おはよう	6:30 おはよう
	7:00 あさのれいはい	7:00 あさのれいはい
	7:30 たいそう	7:30 たいそう
	8:00 ちょうしよく(あとかたづけ)	8:00 ちょうしよく(あとかたづけ)
	9:00 ぶんきゆう(Ⅱ)	9:00 にもつせいり
	10:00 グループ発表の練習(Ⅰ)	9:30 ぶんきゆう(Ⅲ)(かんそうぶん)
	10:45 やがいかつどう	10:45 グループあそび(グラウンド)
	12:30 神港教会に集合・受付	12:00 ちゅうしよく(あとかたづけ)
1:00 しゅっぱつ	おべんとう	1:00 ぜんたいかい
2:00 かいこうれいはい	やがいかつどう	1:15 へいこうれいはい
2:45 オリエンテーション	グループ発表の練習(Ⅱ)	2:15 しゅっぱつ
3:30 ぶんきゆう(Ⅰ)	お楽しみタイム(下級生お昼ね)	3:00 神港教会にて解散
4:30 グループあそび(分級単位)	じ す い	
5:15 じゆうじかん		
6:00 ゆうしよく(あとかたづけ)	ゆうしよく(あとかたづけ)	
7:10 キャンプファイヤー	グループ発表	
8:40 にゆうよく	にゆうよく	
9:30 おいのり・おやすみ(スタッフミーティング)	9:30 おいのり・おやすみ(スタッフミーティング)	
10:00	10:00	

2006年プログラム



2006年しおり表紙



集合写真



グループ発表



食事（自炊・カレーライス）



キャンプファイアー



全体礼拝



分級（2年生）

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会教育委員会は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに満6年となり、第26号まで発行して参りました。中部中会では7割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ60教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会教育委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています（2007年4月中部中会第一回定期会にて自由募金願いを可決承認）。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円
送金先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・説教展開例・分級展開例

(1) 賢すぎる王たち

王国の分裂は、三人の賢すぎる王たちを通してもたらされました。彼らは、神よりも「賢い」選択をし、悲惨な結果をもたらしました。

(2) ソロモン

ソロモンは、その結婚において主の戒めを無視しました。おそらく政略的な意図があったことでしょう。外国の女たちを妻に迎えたのです。そのようなことをすれば、「彼らは必ずあなたたちの心を迷わせ、彼らの神々に向かわせる」と、主ははっきりと警告しておられました。(11:2) それなのに、自分だけは大丈夫であるかのように、主の戒めを無視したソロモンは、賢すぎました。すなわち、傲慢でした。結果は、主の御言葉のとおりになりました。(11:3-8) そのようなソロモンに、二度までも現れて戒めてくださったのは、主の憐れみです。しかし、その時のソロモンはもはや、主の御言葉に恐れおののくことができなくなっていました。(11:9-10、参考イザヤ66:2) そこで、主は王国の分裂を宣言されました。(11:11-13)

(3) レハブアム

ソロモン王の後を継いで王となったレハブアムは、未熟な王でした。存命中のソロモンに仕えていた長老たちの知恵をまったく無視しました。あれほど見事に王国を運営していた王の側近たちの意見を最初からいとも簡単に無視するとは、考えられないことです。そして、「自分と共に育ち、自分に仕えている若者たち」の勧めに従って、重大な政治的決断を下しました。(12:1-14) そんな若者たちがレハブアムに取り入れることはあっても、反対をするはずありません。レハブアムの思い上がった「賢さ」は滑稽なほどです。しかし、聖書は、このことについて「こうなったのは主の計らいによる」と告げます。(12:15) 主は若者を支配者にし、気ままな者が国を治めるよう

になさったのです。(参考イザヤ3:4) 王国の分裂を告げる主の御言葉は、ますます現実味を帯びることとなりました。

(4) ヤロブアム

ヤロブアムは、ソロモン王にも認められた有能な人物でした。(11:28) 主は、このヤロブアムをイスラエルの王として選ばれました。預言者アヒヤを通して次のように告げられました。「わたしはあなたを選ぶ。自分の望みどおりに支配し、イスラエルの王となれ。」(11:37) そして、ヤロブアムは、その御言葉どおりにユダ族とベニヤミン族を除くイスラエル十部族の王として立てられました。(12:20-21) しかし、彼にとって神殿がユダの側にあることが不安材料でした。(12:26-27) そこで、「彼はよく考えたうえで、金の子牛を二体造り」、神をないがしろにした自分の知恵に従ってうまくやろうとしました。彼もまた賢すぎました。彼がどんなに「よく考えた」ところで、その統治が確立するわけではありません。主にことごとく聞き従ってこそ、主が共におられて、その王国を確立してくださるのです。(11:37-38)

(5) 賢すぎてはならない

イスラエルは、「わたし(主)の宝」、「祭司の王国、聖なる国民」となるために、救い出された民です。(出エジプト19:5-6) このことは、主の契約に忠実に聞き従う以外の仕方では成就されません。王たちもこの大きな目的に仕えるために召されたのです。しかし、王たちはその使命を見失い、その道を誤りました。彼らの愚かな反逆によって分裂しながらも、イスラエルが存続し続けたことは、主の計り知れない憐れみです。しかし、その憐れみが軽んじられ、王国の分裂にとどまらず、滅びにまで至ったことは、その後の歴史が示す通りです。神より賢すぎてはなりません。

(貫洞賢次)

テキスト 列王記上11章1～13節（～12章）
参照カテキズム 子どもカテキズム 問43, 44, 84

〔単元のねらい〕

カリキュラム表の聖書箇所は長いので、王国分裂の原因となったソロモンの背信に絞ります。王国分裂はその結果にすぎないからです。若いときには、表向きは神に熱心で忠実だったソロモンも、晩年には心が神から離れてしまいました。それは神以外のものを見るようになっていったからでした。神への背信と王国分裂は、その実りにすぎません。そこでカテキズムは、まことの神への礼拝へと促し、偶像礼拝を禁じる第一戒、第二戒、それに主の祈りの中の、誘惑からの守りの祈りを選びました。それが、この箇所の主題です。

「神さまから心が離れたソロモン」

みなさんは、これまでとても興味を持っていて、楽しみにしていたのに、急に関心をなくして、別のことに心が向けられてしまうということはないですか。例えば、これまではシルバニアの人形やスーパーマリオのゲームが楽しくて、そればかりやっていたのに、あるときから急に面白くなって、別のことを始めるようになるといったことです。これまで大好きだったことから心が離れてしまい、興味も関心もなくなってしまうことはよくあることです。けれどもそれが、とても大切な人との関係だったらどうでしょう。これまではその子とばかり遊んでいたのに、飽きてしまったので、別の子と遊ぶようになると、もうその子のことは見向きもしなくなってしまうとしたら、それはその子にとってどんなに悲しいことでしょうか。このように、これまでは仲良くしてもらっていたお友だちから見捨てられ、仲間外れになってしまった人のことを覚えながら、その子の悲しみを考えて聞いてください。

先週は、ソロモン王が神さまのために立派な神殿を建てた話を聞きましたね。それは立派な神殿で、そのうわさをききつけた外国の王たちが、わざわざ見に来るほどのものでした。ソロモンは、神さまに立派な神殿を建ててあげたことで、とても満足しましたが、しかし神さまがそれを心から喜ばれたかどうかは別でした。神さまがソロモン

に願ったことは、立派な神殿を建てることではなくて、ソロモンが心から神さまを愛し、喜んで神さまの戒めに従って生きていくことでした。そしてソロモンもイスラエル王国も、みんなが神さまを愛し、喜んで神さまに従って生きるとき、神さまからの祝福をいただいて、繁栄していくことができたのでした。そうして初めのうちは、ソロモンもダビデに倣って、神さまに従っていたので、神さまからとても祝福され、豊かで強い国になっていきました。けれどもそうして金銀財宝が世界中から集められるようになって豊かなり、戦争もなくなって多くの国々がソロモンの前に膝をかかめるようになっていくと、次第にソロモンの心は、神さまから離れていくようになってしまいます。このような祝福と平和をくださったのは神さまなのに、神さまから祝福していただいたとき、それを感謝して、いよいよ神さまを愛するよりは、むしろ神さまに興味をなくして、神さまが与えてくださったものの方に関心を持つようになってしまったのでした。

ソロモンは、周りの国々と平和を保つために、多くの国々からお姫様をもらい、自分のお妃に迎えていきました。そしてソロモンが外国から招いたお姫様たちは、それぞれ自分たちが拝んでいた偶像の神々も一緒に持ってきました。自分のお妃に弱かったソロモンは、お妃たちが偶像の神々を

持ち込んでくることを許してしまったばかりか、そのうちに自分もそのような偶像を拝むようになっていってしまったのです。その中には、子供を殺して犠牲にささげることを要求する、モレクという悪い偶像もありましたが、そのような偶像の神々のために、ソロモンは祭壇を築いたり、おおっぴらに偶像礼拝することさえ許してしまったのです。王さまが率先して偶像礼拝をするのですから、家臣たちもイスラエルの人々も、「右にならえ」とばかりに、ソロモンに倣って国中で偶像礼拝をするようになってしまいました。初めはまことの神さまを愛し、その神さまに真実に尽くしていくことを願ったソロモンも、お妃たちからの誘惑に負けると、自分から罪を犯すようになってしまったのです。そして罪を続ける内に、それを罪とさえ考えなくなり、ついにはもうすっかりまことの神さまのことを忘れ、無視するようになってしまいました。神さまはソロモンに二回も現れて、神さまに立ち帰るようにと語りましたが、ソロモンは聞く耳を持っていませんでした。神さまはソロモンとイスラエルの人々を心から愛しておられました。それなのに彼らは神さまから心がすっかり離れてしまい、神さまのことを忘れてしまいました。自分から心が離れてしまい、自分のことを忘れられてしまった神さまは、どんなに悲しかったのでしょうか。

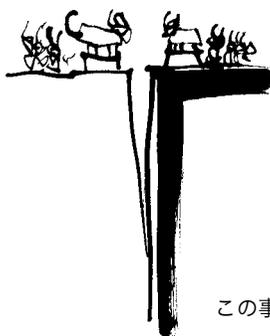
こうしてソロモンとイスラエルの人々が、自分たちを愛し、守り、祝福してくださった神さまから離れてしまった結果が、繁栄し、栄華を誇った

王国が分裂し、国の力が弱っていくということでした。それはソロモンの次の王レハブアムの時代に実現していきます。しかしそれさえも、このままだと王国が分裂し弱くなるという、神さまからの警告を受け入れて、神さまに立ち帰っていったなら、そのようにはならなかったはずでした。しかし神さまに立ち帰ろうとしないイスラエルは、国が分裂して弱くなるということによって、もう一度、自分たちの祝福の源である神さまへと立ち帰っていくことが求められたのでした。こうしてかつてはソロモン帝国と言えるほど繁栄した王国は、北イスラエル王国と南ユダ王国という小さくて弱い国に分裂してしまいます。それは、ソロモンの裏切りと、イスラエルの人々の罪がもたらした結果でした。果物は、木の枝から採られると、しばらくはおいしそうですが、そのうち腐ってしまいます。それは命の源である木から採られて、命を得ることができなくなったからです。わたしたちも同じで、命の源である神さまから離れていくとき、死んでしまうのです。イスラエルが分裂して弱り、やがて滅びてしまうのは、そのためでした。それは自分たちの方から神さまを捨て、神さまから離れてしまった結果にすぎません。わたしたちは、祝福の源である神さまに、しっかりとつながりつづけていきたいと思います。そして神さまから心の目をそらさせていく、さまざまな誘惑からお守りくださいと祈っていきたいと思います。(三川栄二)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 15章5節前半

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。

人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。



この事は罪の源となった。

〈ねらい〉

幼いときも大人になったときも、まことの神様を礼拝し、イエス様にしっかりとつながっていくことを学ぼう。

〈展開例〉

Q1 主の神殿を建てたソロモンとイスラエル王国はどのようにになりましたか？

A1 そうだね、ソロモンは父ダビデにならい、神様に従ったのでとても祝福されました。イスラエル王国も豊かで強い国になりました。

Q2 その後、人々に崇められるようになったソロモンとイスラエル王国は、どのようにになりましたか？

A2 ソロモンもイスラエルの人々も皆まことの神様から離れ、異教の偶像を礼拝するようになったので、神様は大変悲しまれました。

Q3 まことの神様以外の神様に従ってはならな

いと、二度も神様はソロモンに現れましたが、ソロモンはどうしたでしょう？

A3 ソロモンは神様の声を聞くことができず、戒めを守りませんでした。

Q4 主の戒めを守れないソロモンとイスラエル王国はどのようにになりましたか？

A4 神様はイスラエル王国を二つに分けて国を弱くし、主に立ち帰る時を与えられました。

Q5 わたしたちはどうしたらいいと思いますか？

A5 日曜日は教会に来て、イエス様の御言葉を聞きましょう。

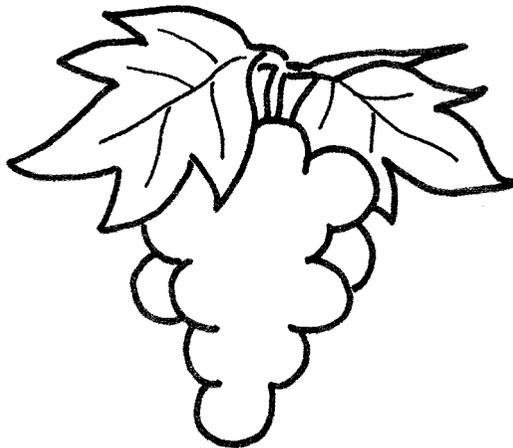
〈おいのり〉

今日も教会に来れたことを感謝します。大人になっても、豊かになっても、イエス様にしっかりと繋がっていただけますようにお守り下さい。

〈やってみよう〉

ぶどうのワッペンを作ろう

【用意する物】 厚紙、はさみ、のり、クレヨンかマジック、安全ピン、セロテープ
クレヨンなどで塗り絵をしたら、実のところに名前を書き入れましょう。
ふちを切って厚紙に貼り、裏に安全ピンをつけてワッペンにします。



〈ねらい〉

神の御前にへりくだり、自らが神のしもべであることを知る謙遜な王として即位したソロモンが、やがて富と権力の誘惑の前に、めぐみとして与えられた豊かさをむさぼるようになる。衣食にぜいたくを極め、多くの外国の女性を妻として迎え、彼女たちの手によって異教の神々が持ち込まれた。神以外のものに心を奪われ、救いの民に仕えるものとしての使命を見失った王の元に王国の分裂と滅びがあることを知ると共に、そのことを通しても示されるまことの神の哀れみに満ちた救済の歴史を覚える。

〈展開例〉

1. 若い頃には「正しく聞き分ける知恵」を求めた謙虚な王であったソロモンが、どうして神さまの言葉に聞き従わなくなってしまったのだろうか。

⇒神さまがめぐみとして与えてくださった多くの富と財産、それが名誉と知恵で満たされるようになると、ソロモンは次第に高慢になり、まるで自分の力と知恵でそれを得たかのように思うようになり、心が神さまから離れた。

2. ソロモンが偶像礼拝をするようになったきっかけは何だったのだろうか。

⇒ソロモンは、周りの国々と平和を保つために政略結婚で多くの国々の女性をおきさきとして迎え入れた。その女性たちが自分の国で拝んでいた偶像の神々を一緒に持ってきた。最初はそれを許していただけだったが、やがて自分も拝むようになっていった。

3. 神さまはソロモンの心が離れていったとき、ほうっておかれたのだろうか。

⇒神さまは、最初から警告をし、ソロモンに二度までも現れてくださり、立ち返るように語ってくださいました。それにもかかわらずソロモンは神さまを無視し続け、神さまに立ち返ろうとはしませんでした。そこで神さまは王国の分裂を宣言されたのです。その時ソロモンはもはや主のみ言葉を恐れなくなっていたのです。

4. 王国はどのようにして分裂したのですか。

⇒王国の分裂にかかわった王は、ソロモン、レハブアム、ヤロブアムの三人です。もはや主を恐れなくなったソロモンに続き、未熟な王レハブアムは思い上がった気ままな政治を行い、有能とされたヤロブアムは、自分の考えで金の子牛を二体造り、神をないがしろにしました。いずれも主を恐れ、神さま聞き従うことがなく神さまはご自分の計らいによって王国を分裂されたのです。

5. わたしたちに何が求められていますか。

⇒どのような時にも、命の源である神さまにしっかりとつながり続けることです。そのために神さまは、偶像礼拝を禁じた十戒の第一戒と第二戒を、様々な誘惑からの守りの祈りを主の祈りの中で、それぞれ恵みとして与えてくださっています。

〈おいのり〉

神さま、王たちの罪のためにあなたは王国を分裂させられましたが、その時にもイスラエルの人々を憐れんで救ってくださいました。どうか私たちが、あなたといつもしっかりとつながることが出来るようにしてください。そしてあなたから目をそらせようとする全ての誘惑から私たちをお守りください。

☆聖書箇所が長いので、分級では全体をふまえて、列王記上11章1～13節に絞って学ぶことにします。

〈ねらい〉

偉大な王であったソロモンの罪から、神に忠実であることの難しさと大切さを学ぶ。

〈聖書のことば〉

以下の言葉に必要なに応じて解説を加えつつ聖書を読んでいくとよいでしょう。○は重要語です。なお、新共同訳聖書を使っています。

背信、仰せになる、とりこ、側室、老境、高台、○契約、家臣など

〈展開例〉

①ソロモン王は大勢の周囲の国々のお姫様たちと結婚しました。その結果、どういう悪いことが起こりましたか（4節）。

→戦いの人であったダビデ王に対して、ソロモン王は平和の人でした。ソロモンは神さまに知恵を求め、実際にとても豊かな知恵を与えられていたことが5章9～14節に記されています。しかし、そのようなソロモンもその生涯の中で神さまに大きな罪を犯すことになりました。合計1000人に達したという王妃、側室たちが外国から持ち込んだ神々を許容し、自らもそれらに従ってしまったのです。ここには、自分の知恵を過信したときにいかに人間は弱く愚かであるかという例が示されています。

②神さまは、そのことに対してソロモン王にどうされましたか（9～10節）。

→王であるソロモンの背信は神さまにとっても重大な事でした。聖書には神さまは二回直接彼に現れて戒めたと記されています。神さまの怒りと悲しみがいかに深かったかということが端的に示されています。しかし、複雑なしがらみからめとられ、老境に達していたソロモンが、

素直に方針を変えることはできませんでした。

③それでも言うことを聞かないソロモン王に、神さまは何を約束されましたか（11節）。

→神さまは公正の神であり、罪に対して厳正な裁きをなさいます。王であるソロモンの罪の刑罰は王国の分裂ということでした。イスラエルの平和と繁栄を願っていたソロモンにとって、何とも皮肉な結果と言わざるを得ません。しかし、神さまは同時に憐れみ深く契約に忠実な方でもありますので、ダビデのゆえにその実行は遅らされ、また完全な滅びには至らせられませんでした。

子どもたちの力に応じてこの後どのようにこの約束が実現していったかを聖書に基づき解説するのもいいでしょう。たとえば26～40節のヤロブアムと預言者アヒヤのやり取りには神さまが一貫したことを別々の人たちに告げて歴史を動かしていった様子が書かれています。

④ソロモン王はどうすればよかったですでしょうか。

→聖書が伝えるメッセージは明確です。人間は二人の主人に仕えることはできないのです（マタイ6章24節）。むしろ、十戒の第一戒にあるようにほかに神があってはなりません。この意味でキリスト教の信仰は排他的です。また、第二戒にあるように偶像を作り、それを拝むことも許されません。神さまは「熱情の神」（出エジプト記20章5節）です。これらのことをする者を激しく怒り、悲しまれるのです。

ソロモンが守るべきことは、まさに教会学校で教わるような基本的なことでした。現実の人間関係の中で神さまに従い通すという基本を守ることが、いかに難しく、かつ重要なことであるかを強調したいと思います。子どもたちをとりまく日本の環境も、複数の神々の共存に寛容であり、この基本を守ろうとするときに多くの誘惑があるからです。

〈ねらい〉

神様の愛にとどまる。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

※教師、生徒という以前に、まず教師自身が神の御前に一人の御言葉の聴衆として、教えられたこと、感動したこと、心を導かれていることを、率直に生徒達に話すことが大切だと思います。自分の心に響いたメッセージが一番生徒の心に届くからです。分級では何かを新たに教えようと無理に導くのではなく、生徒達と御言葉を巡って語り合ったり、共に祈る時間を重視してくださいと思います。

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしていただき、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. 王国分裂の原因は何でしたか？

→王であるソロモンの主への背信

Q. 何故ソロモンはそのような罪を犯したのでしょうか？

→異教を信じる外国からの妻達によって心迷わされたため。

Q. 神様は御自分から離れて行くソロモンにどのようなお取り扱いをなさったのでしょうか？

→それでもなお彼を愛して、父が子に対して為すように戒められた(9、10節)。神様はソロモンの父ダビデと結んだ契約に真実を尽くされた。

Q. 神様がそれ程に真実を尽くして説得なさっ

たのに、どうしてソロモンは耳を貸さず、行いを改めなかったのでしょうか？そもそも彼は神様の警告(2節)を知らなかったのでしょうか。知っていたなら何故それを軽んじたのですか？

→既に主から離れ、傲慢になっていたため。ソロモンは神様の警告を知っていたが、神様の御言葉に聞き従うよりも「多くの外国の女」(1節)にひかれた。神様から知恵を賜ったソロモン程の賢人すら堕落させた罪の恐ろしさを見せつけられる。御言葉に反する罪を警戒し過ぎるということはない。自分は大丈夫という安易な自己過信は、容易に抜け出せない罪の泥沼へ私達を踏み込ませてしまう。

Q. 神様から離れたイスラエルの王国は段々と滅亡に向かってゆきました。ここからどのような教訓を学ぶことができますか？イエス様は「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。……わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」(ヨハネ15:5)とおっしゃいました。残れる罪と弱さを持って生きる私達が神様から離れる危険から守られるために必要なのは何でしょうか？

→イスラエルの繁栄は神様の選びと祝福によること。神様から離れることは私達の身を滅ぼすことになること。祝福と命の源であるイエス様から私達を引き離す一切の誘惑から守られるためには、自己過信することなく、「わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。」(マタイ6:13)と主に寄り頼むことが肝要である。

4. お祈り

祝福と命の源である主にとどまれるように。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

テキスト 列王記上18章

(1) ただ一人、主の預言者として残った

エリヤの時代、王妃イゼベルは主の預言者を切り殺す一方で、偶像の預言者たちを自分の食卓に着かせていました。(18:4,19) そのような中で、エリヤの目には、自分が生き残った最後の預言者のように見えました。「わたしはただ一人、主の預言者として残った。」(18:22) もし、状況によって判断するなら、主が生きて働いておられるようには見えなかったでしょう。しかし、エリヤが迷うことはありませんでした。

(2) どっちつかずに迷って

「もし主が神であるなら神に従え。もしバアルが神であるなら、バアルに従え。」このように問いかけるエリヤに対して、民はひと言も答えませんでした。民は「どっちつかずに迷って」いたのです。(18:21) とはいえ、迷いつつも実際の生活では、信仰を捨てたかのような状態になっていたことでしょう。まさに「神に逆らう者が興ると人は身を隠す」という状態になっていたのです。(箴言28:12) 主よりもバアルに味方する者のように歩んでいました。(19:10, 14)

主がイスラエルの歴史を導かれたことは否定することができません。しかし今は、神に逆らう者が世を治めています。そして、主の預言者は次々と殺されていました。状況は、主が生きて働いておられるとは思えないようなものでした。民は迷っていました。そこで、エリヤは提案しました。ささげられた犠牲の雄牛に「火をもって答える神こそ神であるはずだ。」しるしによって確かめてみようというのです。この言葉を聞いた民は皆「それがいい」と答えました。(18:24)

(3) 大声で呼ぶがいい

バアルの預言者は大勢で、熱心に「朝から真昼までバアルの名を呼び」続けました。(18:26) そして、ついには狂ったようになって祈りました。しかし、エリヤはバアルの預言者たちの熱心に

対してまったく冷淡でした。「大声で呼ぶがいい。バアルは神なのだから。神は不満なのか、それとも人目を避けているのか、旅にでも出ているのか。恐らく眠っていて、起こしてもらわなければならないのだろう。」(18:27) バアルがまるで生きていたかのように、バアルに対して祈ることを嘲ったのです。すなわち、偶像がいかにも勢いよく仕えられようとも、「耳があっても聞こえず、……手があってもつかめず、足があっても歩けず」死んだものにすぎないことを決して見失わなかったのです。(参考・詩編115:6-7)

(4) 主の祭壇を修復した

エリヤは、迷っているすべての民を自分の近くに来させました。そして、壊された主の祭壇を修復しました。(18:30) その祭壇は、民によって破壊されたものだったでしょう。(19:10, 14) エリヤは、時が良くても悪くても主を礼拝していましたが、民はそうではなかったのです。彼は、主への礼拝を、その時、その場で立て直しました。そして、律法の規定どおりに雄牛を切り裂き、薪の上に乗せました。さらに、四つの瓶に水を満たして三度にわたって、その雄牛と薪の上にかけてさせました。あたかも、どんなに水をかけられても、主への礼拝は妨げられないことを示すかのようでした。そして、これまた律法の規定どおり、「献げ物をささげる時刻に」エリヤは祈って言いました。「これらすべてのことをあなたの御言葉によって行ったことが、今日明らかになりますように。」(18:30-37) 「すると、主の火が降って、焼き尽くす献げ物と薪、石、塵を焼き、溝にあった水をもなめ尽くした。」(18:38) これを見た民は、バアルへの迷いを捨てて、主のみを礼拝して言いました。「主こそ神です。主こそ神です。」(18:39)

時が良くても悪くても、変わることなく主を礼拝し続けた一人の人を通して、主がご自身への礼拝を立て直してくださったのです。(貫洞賢次)

テキスト 列王記上18章(16~39節)
参照カテキズム 子どもカテキズム 問1, 43, 44, 84

〔単元のねらい〕

カリキュラム表の聖書箇所は長すぎるので、エリヤとバアルの預言者との対決の場面に絞りました。ここの主題は、「あなたたちは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。もし主が神であるなら、主に従え」とのエリヤの言葉に要約できます。まことの神のみを自分の神、主としていくことがわたしたちにも求められています。今日のわたしたちにとって、バアルとは何かを考えさせる必要があります。わたしたちを神から引き離していくもの、それがバアルです。

「どちらが本当の神なのか」

北イスラエル王国はアハブが王さまとなると、今まで以上に神さまから離れ、ひどい国になっていきました。それはアハブが、イゼベルというお妃を迎えたことによります。イゼベルは、バアルという男神と、その妻であるアシェラという女神をイスラエルに持ち込み、それをおおびらに礼拝するようにさせていったからでした。お妃に弱かったアハブは、首都サマリアにバアルの神殿を築いて、国中の人々にバアルとアシェラを拝ませ、イスラエルのまことの神さまを拝む人たちを迫害して苦しめました。神さまの預言者たちは、みんな殺されてしまい、残ったのはエリヤただ一人だけでした。たった一人だけになったエリヤは、殺されないようにどこそこを隠れて、逃げ回ったでしょうか。いいえ！たとえ殺されることになったとしても、まことの神さまがどなたであるかを、明らかにしようとするのでした。イスラエルの神さまを拝むと、王妃イゼベルに目をつけられて出世することもできず、命の危険すらありましたから、多くの人たちがバアルを拝むようになっていました。バアルを拝めば安全ですし、出世することもでき、高い位を得て、お金持ちになることができましたからです。そこでバアルの預言者もたくさん出てきて、アシェラと合わせると850人もいました。しかしまことの神さまの預言者は、エリヤ一人になってしまっていました。けれどもエリヤは、アハブ王とイスラエルの人々を集めて、カル

メル山で、どちらが本当の神か、神さま比べをしようともちかけます。イスラエルにはもう三年も雨が降らず、飢饉になって苦しんでいましたから、本当の生ける神さまなら雨を降らせることができるはずだと言ったのです。ここでエリヤは、天から火を降した方がまことの神さまだともちかけますが、この天からの火とは雷のことで、日本でも雷と共に夕立がおきて雨が降るように、それは雨を降らせる雷のことでした。実はバアルとは、この雷と雨をもたらし、それによって豊作を与え、富を与える神さまと信じられていました。そこでバアルなら雷と雨をもたらすことができるはずではないかと、エリヤは勝負を申し出たのです。「火をもって答える神こそ神であるはずだ」と。

人々は、「それがいい」と答え、さっそく神さま比べの準備がされました。バアルは雷を降し雨を降らせることが専門の神さまでしたから、預言者たちは得意になって祈り始めます。ところがいつまでも天から火は降らず雨も降ってきません。あせり始めた預言者たちは、大声で叫び出し、祭壇の周りを踊り始めます。それでもだめなので、からだを傷つけて、血だらけになりながら、それによってバアルに答えてもらおうとし始める始末でした。バアルは、毎年冬に死に、陰府の国まで行って、再び春になると復活すると信じられていました。そこでエリヤは、バアルは「人目を避けているのか、旅にでも出ているのか。おそら

く眠っていて、起こしてもらわなければならないのだらう」と、皮肉を言います。しかしいつまでたっても、天からの火は降らず、答えるものもありませんでした。当たり前です。バアルなど、そもそも存在しない、ただの偶像なのですから。今度はエリヤの番です。エリヤは崩されてしまっていた、神さまへの祭壇を築きなおすと、犠牲と祭壇に何度も水をかけるように求めます。ここでの出来事が、うそ偽りではなく、本当に起こったものであることを人々に見せるためでした。そしてエリヤが祈ると、ただちに天からの火が降って、祭壇の犠牲が燃え尽くされ、しばらくするうちに雨が降ってきます。それは今までにないほどのどしゃぶりの雨でした。自然を支配するまことの神は、バアルではなく、イスラエルの神であることが証明されたのでした。

エリヤは、たった一人で、偶像を拝むことを強制し、命さえ奪う悪王アハブと妃イゼベル、そして850人もの偽預言者と戦いました。そしてバアルに心を引かれて、どっちつかずの態度をしているイスラエルの人々に迫りました。「あなたたちは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。もし主が神であるなら、主に従え」と。実はバアルは今日もいたるところにあり、様々な形で拝まれています。みなさんはそれに気づいていますか。バアルとは、この世の繁栄をもたらし、成功を保証する偶像でした。そうやってわたしたちの心を、心からまことの神さまに従って生きていくことから引き離して、この世のすばらしさや安楽さ、祝福や恵みへと心を向けさせていくものです。みなさんもよく考えてください。わたしたちの周りにはたくさんバアルがあるのです。そしてそれは一人一人違うし、その時その時で違ったものとなっていきます。だからよく考えてほしいのです。今、自分の心を神さまから、イエス様から離

していくものはありませんか。日曜日に教会学校に行くことよりも、もっと楽しくて、そっちの方をやってみたいと思うようなことはありませんか。ある人は面白いテレビ番組やゲームかもしれない。ある人は入ってみたいスポーツクラブや趣味のサークルかもしれません。聖書を読んだり、神さまについて考えることよりも、もっと楽しくて心を奪われてしまうような何か、それがあなたのバアルです。イスラエルの人にとっても、バアルを礼拝するほうが安全で、楽しく、この世で出世でき、成功してお金儲けができました。けれどもそれによって、一番大切な「永遠の命」をなくしてしまったのです。先生にも、バアルがあります。それは楽しくて仕方がない趣味のことであったり、やりがいのある仕事であったりします。どうしても見てみたいテレビ番組や、お友だちからのメールもあります。日曜日に教会に行くことよりも楽しいことや、それを妨げていく色々なものがあります。だからわたしたちみんなに呼びかけられているのです。「あなたたちは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。もし主が神であるなら、主に従え」と。そしてこのことは、一生涯考えていかなければならないことでもあります。自分で気がつかないうちに、ソロモンのように神さまから心が離れて、別のことに心が奪われてしまうことがあるからです。バアルは色々な形をとります。わたしたちの心を、神さまから離していくもの、それはすべてバアルなのです。だからわたしたちは、ソロモンやアハブのように、神さまから離れてしまうことなく、バアルに心を引かれていくことがないように、これからも熱心に教会学校に通い続けていきたいと思えます。そして様々な誘惑から守られるように、祈っていきたいと思えます。(三川栄二)

[今週の暗唱聖句] 申命記 6章5節

あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。

〈ねらい〉

バアルと闘うエリヤの姿を通して、まことの神様であることを知ろう。

〈展開例〉

昔、北イスラエルという国にアハブという王様がいました。この王様は、バアルとアシェラという偽物の神様を拝み、自分の国の人たちにも拝ませていました。それで、まことの神様はエリヤという預言者を遣わされました。エリヤはイスラエルの人々の前で闘うことになりました。まことの預言者エリヤ対バアルとアシェラの偽預言者850人の対決です。

闘い方は、祭壇を一つずつ作って祈り、神様に

天から火をつけてもらう、という方法です。火がついた方が勝ち、つまり、本当の神様だということになります。はじめに、大勢のバアルの預言者たちが、祈ったり、踊ったり、大騒ぎをしてバアルの名前を呼びましたが、何も起きませんでした。次に、エリヤがまことの神様に祈ると、すぐに天から火が降りてきて、エリヤが作った祭壇を焼き尽くしてしまいました。そして、みんなが、エリヤの神様こそ本当の神様、まことの神様であることを知りました。

〈おいのり〉

私たちがエリヤさんと同じ真の神様を信じていることができるようにして下さい。

〈やってみよう〉**ぬり絵をしよう**

〈ねらい〉

子どもたちの日々の歩みにおいても、バアル(私たちが神さまから引き離すもの)がある。そのバアルとは何なのかということを考えながら、真の神さまを主として信じ従っていくことを学びたい。

〈展開例〉

1. みなさんは、誰かと対決したことがありますか。主の預言者エリヤとバアルの預言者との対決から、真の神さまを信じて歩むことを学びましょう。

2. 北イスラエル王国のアハブ王と王妃イゼベルは、真の神さまから離れバアルとアシュラという偶像を民に拝ませていた。もし、拝まなかったらどうなりましたか。

⇒イスラエルの真の神さまを拝むと、命の危険があり、高い地位につくこともできず、お金持ちにもなれなかった。主の預言者は迫害され、みな殺されてしまった。残ったのはエリヤひとりであった。

3. バアルとアシュラの預言者は850人、主の預言者はエリヤひとり。恐くて逃げることをしなかったエリヤはどうしたでしょう。

⇒カルメル山に、アハブ王や預言者、イスラエルの人々を集めて、どちらが本当の神さまかを比べようとした。飢饉であったので、天から火を降らせる方(火=雷→雨)こそ、真の神さまである。

4. エリヤ対バアルの預言者を対比させながら、偶像に祈る虚しさと真の神さまを信じる幸いを学ぶ。

⇒バアルの預言者：いくら祈っても、ついには体を傷つけ大声で叫んで踊っても火は降らなかった。

エリヤ：崩されていた祭壇を築き、犠牲の雄牛と祭壇に水をかけて祈ると、ただちに天から火

が降ってきた。

⇒バアル=偶像

エリヤの神=自然を支配される力ある真の神さま

5. 人々を熱狂に向かわせる偶像の恐ろしさや虚しさを知り、真の神さまに祈り求めるために、現在の私たちにとって、バアルとは何なのかを考えてみましょう。

⇒バアル=この世のすばらしさや安楽さに私たちの心を向けさせ、神さまから引き離すもの。

6. みんなにとって、神さまから心を離していくものは何ですか。

⇒Ex. テレビ、ゲームなど

どっちつかずではなく、主なる神さまを信じて従っていきたい。

〈おいのり〉

神さま、私たちが神さまから離れそうになるとき、そばにいて離れないように助けてください。そしてどんな時でも、まことの神さまを信じて従って歩むことができますようにお守りください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン。



水は祭壇の周りに流れ出し、溝にも満ちた。

☆今回も聖書箇所を18章20～40節に絞って学ぶことにします。

〈ねらい〉

聖書の神こそが唯一の真実なる神であることを知る。

〈聖書のことば〉

○預言者、嘲る、ならわし、兆候、○祭壇、修復

〈展開例〉

①21節で預言者エリヤがすべての民に「あなたたちは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。」と言ったとき、どうして民はひと言も答えなかったのでしょうか。

→まず子供たちに、この時の緊迫した状況を理解させたいと思います。ソロモンの後分裂した王国の一つであるイスラエルの王の中でアハブ王は特に主の目に悪い王でした(16章30節)。王妃イゼベルが持ち込んだバアルなどの神々に仕え、民にもそれを強制し主に従う預言者たちを迫害しました。イスラエルの民はこの王の権力の前に自由な信仰を妨げられていたのです。バアル信仰が正しくないとは知りながらも、本意ながら、あるいは積極的にその道へと促されていました。それが出世にもつながったのでしょう。ここには、今に通じるこの世の力と神の力との対立が描かれています。民には多勢に無勢でこの世の力が上だと思われたのです。

②はっきりしない民を前にして、エリヤはどうすることを提案しましたか(22～24節)。

→エリヤは大胆な提案をします。それぞれの神に犠牲の雄牛を献げ、それに火をもって答えるかどうかを試そうというのです。このすじは子供たちにもわかりやすいところです。ドラマチックに語りたいたいものです。

③エリヤは主なる神に呼びかける前に、まず何を

しましたか(31～32節)。

→子供たちの中には結末を知っている場合があるでしょう。そういうときは、このような細部に少し注目させてみるのも効果的と思われます。まず、イスラエルの元々の十二部族の数に従い、十二個の石を使って祭壇を築いたというところから。これに神が応えられたということが、イスラエル全体の神として契約に忠実であり続ける神ということを表しています。また、大量の水を雄牛と薪にかけたことです。これが焼き尽くされたことにより、神の絶大なる力が示されます。

④このお話のような出来事は聖書に何回も記されています。神さまは私たちに何を示そうとされているのでしょうか。

→今回のお話は、主なる神が真実の神であり圧倒的な力を持っている方であるということをも雄弁に語る物語です。しかし、子供たちの中にはこのときたまたまそのようなことをされただけだと神の力を過小に解釈する子がいると思います。そのような場合には、聖書に何回もこのようなことが記されているのに注意させるといいと思われます。レビ記9章24節(モーセとアロン)、歴代誌上21章26節(ダビデ)、歴代誌下7章1節(ソロモン)などです(実際に聖書箇所を見るかどうかは子供たちの実態に合わせて判断してください)。御言葉にはこのような出来事が珍しくなく、神さまはここ一番という肝心なときにこれによってご自身の臨在を示されるのだということを確認したいと思います。カルメル山のこのエリヤの場面は、まさに神さまがご自身の臨在を示すべき大切な場面であったのです。

〈ヒント〉

教師自身の個人的体験において、この世の力との対決で神さまに守られた出来事などあれば子供たちと分かち合うといいでしょう。迷いの中にある子供たちには大きな励ましとなります。

〈ねらい〉

まことの神様だけを礼拝する。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの实情に合わせてアレンジしてください、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいかと思います。

Q. エリヤは、イスラエルの人々をバアルとアシェラの預言者と共にカルメル山に集めるように、アハブに要請しました。どういう意図があったのでしょうか？

→エリヤのねらいは異教の預言者に勝利することによって、「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。」(17:1) ことを知らしめ、民が主に従うように決断させることにあった。

Q. エリヤはカルメル山上に集結したイスラエルの民に仕える神を決めるよう呼びかけました。人々はどう反応し、それは何故だったのでしょうか？

→「民はひと言も答えなかった。」(21節)。彼らはエリヤが言ったように、主かバアルかどっちつかずに迷っていたのであった。

Q. これは現代の私達には何の関係もない昔話と言ってしまふことは出来ない深刻な問題です。私達にとってのバアルとは一体何なのでしょう？ 考えてみてください。

→バアルとは私達をまことの神様を礼拝することから離す全てである。部活動や塾、テレビ番組、そして友達との楽しい遊びの誘いや異

性との交際がそうなるかもしれない。神様以上に私達の心を奪い、のめりこませてゆくものがあるなら、それがバアルとなる。神様を信じていない友達が何のためらいもなくして、同じようにしないから私達をバカにすることがあっても、神様を礼拝するより楽しそうに見えて、もっといい人生が歩めるように思えたとしても、まことの神様に仕える人生にこそ本当の喜びがある。

Q. バアルの預言者の礼拝には何の応えもなく、エリヤの祈りには天からの火が降りました。これはイスラエルの民に何を教えましたか？

→主こそがまことの神様であり、祈りに応えたもうこと。

Q. 私達が礼拝を捧げるべきただ一人のお方はどなたですか？

→唯一の生けるまことの神様である主。このお方だけが、私達が全身全霊をかけて礼拝するのにふさわしい神様である。

Q. 大多数の人々がまことの神様を信じていない環境で生きている私達にも、信仰の戦いと決断を避けることは出来ません。時として、エリヤのようにたった一人で、多くの人達の前で神様を証しする場面もあります。そんな時、神様が勝利させてくださると確信しているのでしょうか？

※正直な分かち合いの中で、教師自身が神様に従う決断をすることで主に助けられた経験を話すこと、生徒達が遭遇するであろう場面を想定して、対処の仕方をアドバイスすることが、励ましとなると思います。

4. お祈り

まことの神様だけを礼拝し続ける者とされるように。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

テキスト 列王記上19章1～18節

(1) 主よ、もう十分です

エリヤは、たった一人で450人のバアルの預言者と400人のアシェラの預言者を相手にして戦うことのできた人でした。しかし、そのようなエリヤにも、限界がありました。彼への復讐を誓った王妃イゼベルの言葉を聞いた時、もう耐えられませんでした。「それを聞いたエリヤは恐れ、直ちに逃げた。」(19:3)そして、神に向かってこう祈りました。「主よ、もう十分です。わたしの命を取ってください。」(19:4)

(2) わたし一人だけが

エリヤは、主のために働けば働くほど孤独になっていきました。「わたしは万軍の神、主に情熱を傾けて仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺したのです。わたし一人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうとねらっています。」(19:10,14)悪い時代でした。当時のイスラエル王であったアハブは、シドン人の王の娘イゼベルを妻に迎えて以来、進んでバアルに仕え、これにひれ伏しました。(16:31)このような時代に人々はどのように行動するでしょうか。「教えを捨てる者は神に逆らう者を賛美し、教えを守る者は彼らと闘う。」(箴言28:4)そして、闘った者たちは、次々と殺されていったのです。エリヤは孤独に耐えかねて訴えます。「わたし一人だけが残り……」(19:10,14)

(3) 静かにささやく声が聞こえた

神は、そんなエリヤを神の山ホレブへと導いて、御自身の御前に立たせました。「そこを出て、山の中で主の前に立ちなさい。」(19:11)そして、山を裂き、岩を砕く「非常に激しい風」が起こったのです。エリヤは驚くべき神の力を見ました。さらに続けて、地震が起こり、火が起こりました。しかし、風の中にも、地震の中にも、火の中にも、疲れ果てたエリヤを力づける神を見ることはでき

ませんでした。「風の中にも主はおられなかった。地震の中にも主はおられなかった。」(19:11)「火の中にも主はおられなかった。」(19:12)そして、その後「静かにささやく声が聞こえた。」(19:12)ここにエリヤを力づける主がおられました。すなわち、「静かにささやく声」が聞こえるほど近くに主がおられたのです。「わたし一人だけが」と悩むエリヤを力づけるのに必要なのは、驚くべき神の力ではなく、主の「静かにささやく声」を聞くことでした。

「主よ、もう十分です」と言い出した時、彼は主の御声が聞けなくなっていたのです。しかし、主の御声を聞けるようになった時、彼は新たな使命を与えられて、働き場へと戻って行きました。「行け、あなたの来た道を引き返し、ダマスコの荒れ野に向かえ。」(19:15)

(4) 七千人を残す

「わたしはイスラエルに七千人を残す。これは皆、バアルにひざまずかず、これに口づけしなかった者である。」(19:18)この七千人は、エリヤがまだ会ったことのない人々です。しかし、確かに「残す」と主は約束なさいました。まだ仲間がいるのです。

エリヤが「わたし一人だけが残り」と感じたのは、ある意味でやむをえないことでした。次々と仲間が失われていったからです。しかし、それは不信仰によるものでもありません。なぜなら、「わたし一人だけが残り」とは、あくまでエリヤ自身の判断だからです。主がそのように言われたわけではありませんでした。主の「静かにささやく声」が聞けなくなっていたのです。そして、自分の暗い思いや判断が心を満たしていました。

しかし、主の「静かにささやく声」を聞いた時、エリヤはもはや一人ぼっちではありませんでした。確かにいまだに一人で歩まなければならないでしたが、七千人の真実な仲間を持つ者となったのです。(貫洞賢次)

テキスト 列王記上19章1～18節

参照カテキズム 子どもカテキズム 問11～14, 27, 80, 84

〔単元のねらい〕

偽預言者の前では勇敢に戦うことができたエリヤでしたが、イゼベルの前では勇気を失い、敵前逃亡してしまいます。情けないとは思いますが、それがわたしたちの姿でもあります。しかしこのように弱いエリヤを、神はどのように取り扱われたのか、そこに示された神の憐れみ深さを学んでいきたいと思えます。弱り果てたわたしたちを、神はどのようにして立ち上がらせ、元気づけてくださるか、その神の恵み深さに思いを向けていきましょう。

「小さい者を憐れみ、励ます神」

850人ものバアルとアシェラの預言者を相手に、エリヤはたった一人で勇敢に戦いました。ところが、それほど勇敢だったエリヤも、イゼベルの一言で意気消沈してしまうと、イゼベルに殺されると考え、あわてて南の荒れ野へと逃げ出します。逃げられるところまで逃げてきたエリヤは、力尽きて、えにしだの木の下に座り込んでしまいました。そして神さまに向かって、これまでの預言者と違って、自分は弱くてだめだから、もう死なせてくださいと、泣き言を言うのでした。つい昨日までは、「あなたたちは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。もし主が神であるなら、主に従え」と勇敢に語る事ができたエリヤとは大違いです。一体どうしてしまったのでしょうか。バアルとの対決という大役を果たし終えた後、エリヤは力が抜けてしまったのかもしれません。そこに、お前を必ず殺すというイゼベルの脅しが語られたので、エリヤはもうそれに抵抗する勇氣も力も元氣もなくなっていたのかもしれません。情けないことですね。しかしそれもわたしたちの持つ弱さです。エリヤ一人が弱くて、情けないのではなくて、わたしたちもみんなエリヤと同じ弱さを持っているのではないのでしょうか。すっかり落胆し、元氣を失ったエリヤには、もうイゼベルに立ち向かい、戦う勇氣はありませんでした。

けれどもそこで神さまはエリヤをどうされたのでしょうか。せっかく一人生かしてあげたのに、そ

してバアルとの対決では大勝利をさせてあげたのに、自分が弱くてだめな人間だから、死なせてくださいなどと、今頃になって弱音を吐くとは何事かど、神さまは弱くなったエリヤを叱りつけ、お怒りになったのでしょうか。いいえ！神さまはまず疲れたエリヤを休ませてあげたのです。疲れ果てた体と心に休養を与え、休息を与えられたのでした。そうして起き上がったエリヤに、今度は食べ物と飲み物を与えられます。エリヤは言われたとおりになりました。そして「カづけられた」のでした。これが、弱いわたしたちに、神さまがくださることなのです。弱くてだめな者は、使い物にならないからと捨ててしまわれる方ではありません。弱々しいことばかり言って、だめな奴だ、もっとしっかりしなさいと叱りつけ、お怒りになる方でもありません。わたしたちが弱くて、いつまでもめそめそしているときには、お父さんやお母さんでもいつまでも優しくしてくれるわけではないかもしれません。学校の先生も、いつまでも優しく接してくれるわけではないかもしれません。けれども神さまは、わたしたちがどんなに弱くて、情けなくて、小さい者でしかないかをよくご存知で、どこまでも優しくくださるのです。

こうして休息を与えられ、食べ物・飲み物を与えられて元氣になったエリヤは、次にすることを教えられます。それは神さまと出会うことでした。そのためにエリヤは、神の山ホレブまで行くこと

を求められます。そこで神さまと出会ったエリヤは、しかしまず最初に言い訳をしました。わたし一人しか生き残っていませんから、もうこれ以上何もできませんと。しかしこのとき神さまはエリヤに、二回も同じことを聞きます。「エリヤよ、ここで何をしているのか」と(9, 13節)。それは文句や不平ばかりを言い、言い訳で心をふくらませていたエリヤに、自分がこれから何をなすべきかを、自分でもう一度よく考えるようにさせる問いかけでした。エリヤよ、ここで何をしているのか、文句ばかりを言い、自分は弱いから何もできないと、自分の働きから目を背けて、逃げようとするのが、あなたのすることなのか、カルメル山では、お前がたった一人で戦ったとき、わたしはお前と一緒にいて、勝利することができたではないか。ここで神さまは、心が弱り果てたエリヤに、このように語りかけ、考えさせていかれたのでした。わたしはお前といつも一緒だと。そして神さまが共にいてくださるなら、何も恐れるものはないし、恐がる必要もない、だから勇気を出して、もう一度自分の働きに戻りなさいと励ましてくださるのでした。そしてそれでもなお恐れるエリヤに、神さまは約束してくださったのです。お前は決して一人ではない。お前と同じように、バアルと戦い、それに屈しなかった他の人たちがまだたくさんいる。その人たちと共に戦いなさいと。

一人ではない、それはわたしたちをどんなに勇気づけることでしょうか。わたしたちは、自分が一人だけで悩んでいると思うから、心が弱くなっていくのです。この問題はだれにも分かってもらえない、理解してくれる人は一人もいないと考えるから、元気がなくなっていくのです。けれども同じように悩み、同じように悲しみ、しかしその

中で同じ神さまを見上げて、同じ神さまに助けられながら、共に戦っている他の友だちがいるのです。ほら今、あなたの隣に、あなたの前に、後ろに、周りにいっぱいいるではないですか。こうして神さまは、わたしたちが弱いことを知っておられるので、一緒に助け合い、励まし合い、共に祈り合っていくことができるようにと、教会学校のお友だちを与えてくださったのです。みんなあなたと同じ悩みを持っています。みんなあなたと同じことで苦しみ、悲しみ、問題にぶつかっています。悩んだり苦しんだりしているのは、あなた一人だけではありません。だから同じ神さまを信じ、同じ教会学校に通うお友だちみんなと一緒に、祈り合いながら、励まし合いながら、これからも神さまを信じ、従っていきましょう。一人では弱いわたしたちだから、神さまは共に助け合う友だちを与えてくださいました。

昔、使徒パウロも、伝道の仕事もうまくできずに悩み、大失敗した後、とても苦しんだことがありました。アテネという町でした話は、成果を得ることができず、みんなから笑われただけで終わってしまい、パウロはひどくがっかりして、コリントという町にやってきます。しかしそこでパウロは、これからどのように話したらよいか、もう分からなくなってしまうていました。どうやったらうまくできるのか、分からなくなってしまう、お話しする勇気も元気もなくしてしまったのです。そのときイエスさまがパウロに現れて、励ましてくださったのでした。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。……この町には、わたしの民が大勢いるからだ」と。わたしたちにも同じ約束してくださいませ。「恐れるな。わたしがあなたと共にいる」と。
(三川栄二)

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録18章9節後半～10節前半

恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。

〈ねらい〉

悲しい時や苦しい時、弱り果てた私たちを、神様がどのように立ち上がらせ、元気づけて下さるかを知らう。

〈展開例〉

- ① エリヤさんはとても疲れています。それも、ただの疲れ方ではありません。心も体もくたくたで、「いっそ死んで神様のもとへ行きたい」と願うほどでした。なぜこんなに疲れてしまったのでしょうか？（礼拝の話を読み出させます）
- ② エリヤさんの時代、神様を信じない悪い王様とお妃がイスラエルにいました。間違った神の偶像を作って拝み、いけにえをささげ、そして、本当の神様に仕える預言者たちを次々と殺してしまっただけです。つまり、仲間の預言者が殺されて、エリヤさんはひとりぼっちになってしまいました。だから、たった一人で、神様を信じない大勢の人たちを相手に闘ったのです。そしてエリヤさんは、「イスラエルの主こそ本当の神様だ！」と立派に証明してみせたのです。エリヤさんはすごいね。（子どもたちの共感を確認します）
- ③ さあ、思い通りにならず怒ったお妃が、今度はエリヤさんの命をねらいます。エリヤさんは必死になって逃げました。荒れ野の中をずっと歩き続け、とうとう疲れ果てて一本の木の下に座りました。そして、神様に言いました。「主

よ、もう十分です。わたしの命をとってください。」そんなエリヤさんに、神様はどうなさったでしょう？（考えさせます）

- ④ 木の下で、エリヤさんは横になって眠りました。目を覚ますと、枕元にパン菓子と水がありました。神様はエリヤさんの身体を休ませてやり、栄養をつけて下さったんだね。
- ⑤ 次に、神様はエリヤさんの元に現れてくださいました。最初に強い風、次に地震、その後には火が燃え上がり、神様は大いなる力を示されました。そして最後に神様は、エリヤさんに静かにささやきました。「恐れず、来た道を引き返さなさい。お前は決して一人じゃない。お前と同じようにバアルと闘い、それに跪かなかった人たちをわたしは残す。だから、その人たちと一緒に闘いなさい。」
- ⑥ 自分は一人ではないとわかって、エリヤさんはどんなにうれしかったでしょう。そして何より、ささやき声が聞こえるほど近くに、神様が一緒にいて下さるとわかって、どんなに元気が出たことでしょう。私たちも、このことをいつも覚えて感謝しましょう。

〈おいのり〉

いつも一緒にいてくださることを感謝します。神様のささやく声がよく聞こえるように、信じる心をいつまでももっていられるようにして下さい。

〈やってみよう〉

静かにささやく声ゲーム

【用意するもの】 B4画用紙（4枚）、テープ、マジック

- ① 画用紙を丸めて筒型にし、テープで留めます。（4個）
 - ② それぞれの筒の表面に、「おそれるな」、「かたりつづけよ」、「だまっているな」、「わたしがあなたとともにいる」と書きます。（暗唱聖句）
 - ③ 一人がエリヤ役をし、他の子がそれぞれの筒を手にし、エリヤの耳に当てて、筒に書かれたセリフをささやきます。（勇気がわいてくるかな？）
- ★ 耳元で大声を出さないように注意して下さい。

〈ねらい〉

孤独な戦いと恐怖の中で疲れ果ててしまったエリヤに、神は休息と食事を与えられたばかりではなく、静かに語りかけて下さったことを覚え、子どもたちが辛さや困難にある時に、神様は共にいて下さり、御言葉によって語りかけて下さること、顔を上げれば、共に悩む仲間がいることを伝え、励ます。

〈展開例〉

1. 先週のお話して、エリヤは一人で何人の預言者と戦ったのですか？

バアルの預言者450人

アシェラの預言者400人

2. 同じエリヤが、一人の王妃イゼベルに殺される危険が迫ったと知った時、どうしましたか？

①恐れて逃げた。

②命を奪って欲しいと神様に願った。

★大役を果たした後、疲れて身も心も弱くなり、イゼベルの言葉の前に恐れおのくエリヤの弱さと同じ弱さを私たちも持っています。

3. 疲れ果て、生きているのが辛くなってしまったエリヤに、神様は何をして下さいましたか？

①休息を与えられた。

②食べ物、飲み物を与えられた。

4. 休息を与えられ、食べ物、飲み物を与えられて元気になったエリヤを、神様はホレブの山に連れて行かれます。そこで神様はエリヤに出会って下さいます。どのようにご自身の姿をあらわされましたか？

①激しい風によって？

②地震によって？

③火によって？

④静かにささやく声によって

★エリヤをカフげる為に神様は、驚くような仕方であらわれて下さるのではなく、ささやく

声が聞こえる程、近くで語られました。私たちが辛い時、悲しい時、神様は目の前の状況を大きく変えて下さるとは限りません。でも、いつも聖書の御言葉によって語りかけて下さるのです。

5. 神様は、「残っているのは私一人だけ」と言うエリヤの不満に耳を傾けた上で、エリヤに仲間がいることを伝えます。→19:18

エリヤが一人ではないこと、同じようにバアルを拜まなかった人たちがいることを伝えられ、どんなに勇気づけられたことでしょう。

★私たちは、辛いと思う時、だれも自分のことを分かってくれない、悩んでいるのは一人だけだと思って心が弱くなってしまふことがあります。そんな時、私たちは一人ではないこと、神様が近くにおられること、同じ神様に守られ、助けられて歩んでいる友だちがいることを思い出しましょう。

〈ワーク〉

1. 神様に支えられ、慰められ、励まされた経験がある人(先生、お友達)に分かち合ってもらおう。
2. 悩んでいることがある人や、最近嫌なこと、辛いことがあったお友だちに、分かち合ってもらおう。
3. 子ども同士、または先生がその子どものために祈る。

〈おいのり〉

愛する神様、私たちが疲れてしまう時も、苦しみ、悲しみの中にある時も、いつもそばにいて必要なものを与え、御言葉によって語りかけ、励まして下さることを感謝します。お友だちの中に、苦しんでいる人、悲しんでいる人がいたら、助けて下さい。そのお友だちが、神様が近くにいることを知ることができるようにして下さい。

〈ねらい〉

私たちがぐじけそうになるときも、父なる神さまはしっかりと支えてくださることを知る。

〈聖書の言葉〉

従者、えにしだ、外套、○油を注ぐ

〈展開例〉

① 真実の神はどなたかをはっきりさせたエリヤに對して、イスラエルの王とお妃はどうしようとなりましたか(1～2節)。

→ 前回の話で、エリヤは大勢のバアルの預言者たちに勇敢に立ち向かい、主こそ唯一の真実の神であることを証明しました。しかし、王アハブと妃であったイゼベルの心は頑なでした。エリヤに使者を送り、24時間後までに必ずお前を殺すと脅してきたのです。これにはエリヤも驚き、信仰に堅く立っていた心もすっかり萎えてしまいます。その後のエリヤの恐れおののく様子は情けなく、哀れなほどです。それまでの神さまへの信頼はどこへやら、すっかり力を失ってしまったのです。人間としてのエリヤの弱さが現れています。このような人間的な弱さがモーセやヨナにもあったことを思い出させます。

② 荒れ野に逃れたエリヤに、主の御使いは何をしてくれましたか(5～7節)。

→ エリヤは遠く南方に逃げ、従者からも離れて一人きりになりました。心身ともに疲れきり、死を願って祈りつつ眠り込むと、主の御使いが現れて「パン菓子」と水とを食べさせてくれました。このところは子供たちにもよくわかるのではないのでしょうか。絶望してふさぎ込んでしまうようなときに、ふてくされながらも何かおいしいものを食べる中で力を取り戻すのはよくあることです。風邪など病気になることも、

何か食べることから元気を回復しますね。けれどもまた、「人はパンだけで生きるものではない(マタイ4章4節)」のも真実です。体の必要が満たされると、次は霊の必要を満たすために、エリヤは旅を続けます。

③ 神の山ホレブにきたエリヤは主なる神との言葉のやり取りのほかに、何を見聞きしましたか(11～12節)。

→ ホレブ山(シナイ山)はかつて主なる神がモーセにご自身を示された場所でした。弱ってしまったエリヤがここへと導かれたのは偶然ではありませんでした。エリヤ自身が神さまに直接会おうことを切望していたし、神さまにとってもその必要があったわけでしょう。神さまは、エリヤに語りかけた上、激しい風、地震、火といった奇跡を起こしてご自身の臨在を表されます。しかし、エリヤに神の存在を確信させたのは、それらのドラマチックな出来事ではなく、「静かにささやく声」でした。このホレブ山の洞穴での主なる神との出会いを通して、エリヤは再び力を得、預言者としての困難な働きに戻っていく勇気を与えられます。

④ これらの親しい交わりの後、主なる神さまはエリヤに何を約束して励ましてくれましたか(18節)。

→ 神さまは預言者や王を新たに立てることを示すと共に、神に忠実なエリヤの仲間を7000人も残してあると約束します。ここで残されているというのは、「選ばれている」というのと同じことだと考えていいでしょう。神さまの選びです。孤独な戦いを続けているつもりになっていたエリヤには大きな喜びであったことでしょう。それは、私たちに語られている言葉でもあります。

〈ねらい〉

御自分に仕える者を見捨てない神様の励ましを受ける。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

Q. カルメル山ではたった一人でバアルの預言者に立ち向かったエリヤでしたが、イゼベルの脅迫の前にうってかわったような情けない状態を見せてしまいました。しかし私達もいつでも強く雄々しくあれる時ばかりではありませんね。神様はそんな疲れ果てたエリヤをどうお取り扱いくださったのでしょうか？

→御使いを遣わしてエリヤを養い、休息を与えてくださった。それは鳥とサレプタのやもめによって彼を養ったのと同じであった。御自分に仕える者に対する神様の憐れみは変わらない。

Q. エリヤは神の山ホレブに向かい、神様にこそ嘆きを訴えました。これは私達が試練に遭う際に何を教えますか？

→試練や困難に直面した時に神様から離れてしまうことがあるが、むしろ「民よ、どのような時にも神に信頼し 御前に心を注ぎ出せ。神はわたしたちの避けどころ。」(詩62:9)ということ教える。

Q. 神の山ホレブに来たエリヤに神様は何とおっしゃったのでしょうか？

→「エリヤよ、ここで何をしているのか。」と二度(9、13節)尋ねられた。それはエリヤに自分の召された預言者としての働きを考えさせ、復帰させるためであった。

Q. 神様はエリヤを再び遣わされましたが、そ

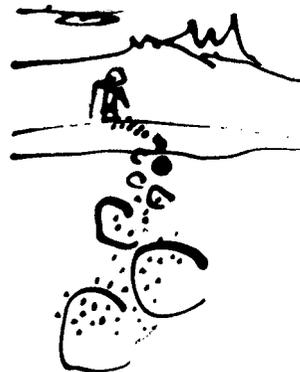
れにあたり、彼の嘆きにどのように応えてくださったのでしょうか？

→1. 「静かにささやく声が聞こえた。」(12節)程に彼に近づかれることによって、御自分が共におられることを教えられた。2. バアル崇拝者への神様の裁きをなす「ハザエル」(15節)と「ニムシの子イエフ」(16節)に油を注がれることを命じられた。3. 預言者達が殺されてたった一人残った自分が死んだら主の預言者がいなくなることを案じるエリヤに、後継者エリシャを与えられた。4. そして「バアルにひざまずかず、これに口づけしなかった」(18節)7000人もの仲間がいることをエリヤに知らせてくださった。

Q. 神様は御自分に仕える者を見捨てず、その祈りに応えてくださるお方です。暗唱聖句を読み、神様が困難なコリント伝道の中でパウロをどのように励まされたかを見てみましょう。神様は私達にも「わたしがあなたと共にいる。」と語りかけていてくださるのです。

4. お祈り

神様がいつも共にいて祈りを聞いてくださること、信仰の友が与えられていることへの感謝。



行け。あなたの来た道を引き返し、
ダマスコの荒れ野に向かえ。

(1) 預言者エゼキエル

ブジの子エゼキエルは、紀元前597年にバビロニアの王ネブカドネツアルによってユダの王ヨヤキンと共にバビロンへ連行された、エルサレムの祭司・預言者でした。エルサレムで活躍した預言者エレミヤと同じ時代に生き、エルサレム神殿の崩壊とバビロン捕囚という民族滅亡の危機を経験し、捕囚地を活動の場としながらイスラエルの見張り役を務めて主なる神の審判と救済とを語りました。ソロモン王によって任職されたツァドク家の祭司らしく、エゼキエルの預言はエルサレム神殿や礼拝制度に関わるものが多いのが特徴です。本章では、イスラエル全家の偶像礼拝が捕囚の原因として指弾され、バビロン捕囚が理由なくして起こった災いではないことが明らかにされています。

(2) 偶像崇拜の罪

「主の言葉がわたしに臨んだ」(1節)とは、11節と同様に、エゼキエルの預言が神の言葉であることを保証する言い方です。「人の子」と呼びかけられた預言者がここで与えられた言葉は、「イスラエルの山々」に対する審判です。「山々」という呼称では、そこに聖所があったであろうことが示唆されますが、続く「山と丘、川と谷」では、南北合わせてのイスラエル全域が意図されています。神は民がそこに設置した「聖なる高台」「祭壇」「香炉台」「偶像」を、御自分の手でことごとく破壊すると言われます。真の神への信仰を蔑ろにした偶像と偽りの礼拝制度は、神御自身の手によって取り去られます。その裁きを行う神の手は「剣」と言われています(3、8、11節)。これは疫病や飢饉と共に、神の裁きを表す災いで、戦争を指しています。ここでの「剣」は、バビロニア人たちの剣で、イスラエルの聖所と町々の破壊は、彼らによって実現します。

(3) 審判を通して神の真実を知る

神の一撃によって打砕かれたイスラエルの心は、「自ら行った悪」(9節)に気づかされます。

偶像崇拜が「忌まわしいこと」であり、それに手を染めた自分の過去の振る舞いに自分を嫌うようになる、とさえ言います。こうして神によって自分の罪に目覚める時に、イスラエルは主なる神をそこに認め、神がその災いを起こした理由を知ることになります(10節)。

エゼキエルは神の審判を語りながら、その悲惨な結末を通じて「お前たちは、わたしが主であることを知るようになる」と繰り返し訴えます。ここに預言の目的があるのは明瞭です。世界に起こる戦争・飢饉・疫病などの災害は、神を知らぬ人の目からすれば運命や偶然と説明されますが、そこには罪に対する神の怒りが表示されています。「偶像崇拜」は人が手で作った像を神とするという文字通りの意味ばかりでなく、生きて私たちが求めておられる神を認めず、他のものに絶対的な信頼を置くことです。しかし、大きな災害によって信頼の根拠がゆるがせになったとき、人は自身自身が神ではないこと、また、神と共に歩んでもいなかったことの重大さに目が開かれます。神の怒りや審判は、人間の手の届かない神の御旨の内を探ることではなく、多くの人が一度に死んでゆくような歴史の深刻さを通じて私たちに知らされるものです。その審判のうちに神を知らない世界の終りを認め、忌まわしい罪を嫌いながら神に立ち返っていくことが、すべての人に求められます。

注意したいことは、そういう悔改めの時が、「そのとき〜になる」という言い方で表されていることです。9節で「わたしが打ち砕く」と言われたのと同じように、人が罪を認めて神を知るようになるのは、神が「そのとき」に定めておられて、人間の手を離れています。エゼキエルが語った審判は、イスラエルの歴史に実現しました。けれども、人が罪を悔改めて神に立ち返るという出来事は、すべて、神の定めた時の中にあります。人には人を悔改めさせる力はありません。「そのとき」は、聖霊が与えられた日に実現します。(牧野信成)

テキスト エゼキエル書6章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問45, 46

〔単元のねらい〕

バビロン捕囚は、イスラエル民族にとって最も厳しく困難な出来事。しかし、その大きな苦難は、決して何の意味もなく起きたのではない。イスラエルの民は、神の憐れみと忍耐を試みるかのように、深い罪の生活を改めようとしなかった。さまざまな預言者活動も、イスラエルの指導者や民に、悔い改めをもたらすことはできなかった。そして神の裁きはついに下る。罪に対する神の取り扱いには、決してあいまいなものはない。厳正そのものである。しかし、その厳正な裁きのなかに、なお神は消えることのない希望の光を残してください。旧約聖書における神の愛のギリギリの表明を、エゼキエル書に読みとるべきである。

「偶像を離れて、まことの神さまへ」

皆さんは「偶像」という言葉を知っているでしょう。まことの神様でないものを、神様のようにあがめるならば、どんなものでも「偶像」になります。自分を、神様のように考えて、「わたしほど立派な人はいない」とか、「わたしの考えで何でもしよう」とか、「人はだれでもわたしに従うべきだ」などという考えをもつ人は、自分を「偶像」にしているのです。「お金以上に素晴らしいもの、頼りになるものはない」と考えるなら、その人にとってお金は「偶像」になりますね。

預言者エゼキエルが、およそ30歳ぐらいの時、ユダの王国はバビロンという大きくて強い国にほろぼされてしまいます（紀元前597年）。そして、王様をはじめ、ユダの国の主だった人たちは、バビロンに連れ去られてしまうのです。この大事件が「バビロン捕囚」です。連れ去られた人びとの中に、エゼキエルもいました。

やがて神さまは、このエゼキエルに、神さまの言葉を語るといふ大切なはたらきを与えられます。エゼキエルたちは、ふるさとから遠く離れて、バビロンに捕われています。そして、ふるさとは、まだそこに住んでいるイスラエルの人びとが、神さまの教えに背をむけたまま、偶像を拝む罪をおかしているのです。エゼキエルが、どんなにそのことで心を痛めているか、私たちにも想像でき

るでしょう。大きな悲しみや苦しみに遭っても、それでも人は自分の罪に気づかないままにいることが多いのですね。

エゼキエルが、心を痛めているのは、やがてふるさとの地で、都のエルサレムが、滅ぼされてしまうことです（紀元前586年）。エゼキエルたちがバビロンに捕われてから11年後のことです。神さまは、その11年の間、だまってエルサレムの都が滅ぼされるのを見守られたのではありません。何とかして、ユダの人びとが、心を変えて神さまに立ち返り、そしてエルサレムの都が滅びをまぬがれるよう、エゼキエルに神さまの言葉を語らせました。「たとえ彼らが聞き入れようと拒もうと、あなたはわたしの言葉を語らなければならない」（2章7節）。

今朝の聖書では、エゼキエルは、山や丘、川や谷に向かって神さまの言葉を語っています。皆さんは、山や川が好きですか。私は、山も川も大好きです。山や川がない場所で、ながく生活することなどできないと思うほど大好きです。とくに自分が生まれ育った、ふるさとの山や川は、大人になればなるほど、年をとればとるほど、なつかしくなります。

エゼキエルにとっても、同じではないでしょうか。神さまは、遠く離れたバビロンから、ふるさ

とイスラエルの山々を思い起こすよう、エゼキエルに命じておられます。でも、ふるさとの山や丘を懐かしく思うためではありません。神さまの厳しい裁きの言葉を聞かせるためなのです。イスラエルの山や丘には、偶像をおまつりして礼拝する、そんな場所がたくさんありました。そのような場所は、神さまが嫌われるにきまっているのです。でも、イスラエルの人びとは、山や丘の上から、「聖なる高台」(3)と呼ばれる祭壇を取り除こうとしませんでした。

神さまは、イスラエルの人びとのかたくなで、神さまにそむく心を砕くために、それらの高台や祭壇が、バビロンの手で取り壊されるよう、心をきめてしまわれました。ふるさとの山や丘や川が、神さまの裁きで踏みにじられ、荒らされる。しかも、それを神さまの御言葉として預言しなければならぬ。エゼキエルの心は、どんなにか悲しく暗くされたことでしょう。

そんな厳しい言葉のなかにも、神さまは、ふたつの恵みを示しておられます。一つは、神さまの厳しい怒りと裁きを味わって、イスラエルの人びとが、まことの神さまをもう一度思い起こすと

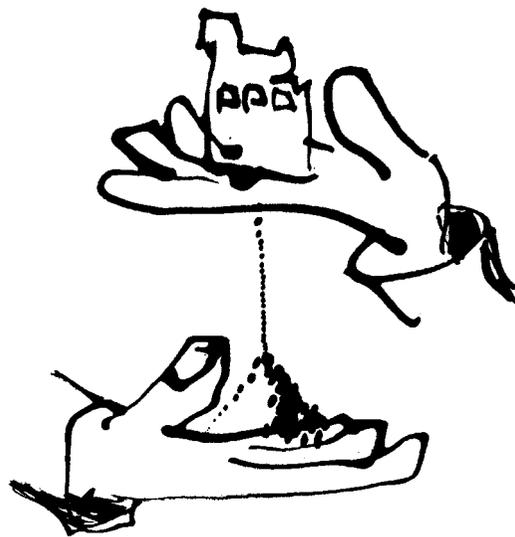
いうことです。「そのとき、お前たちはわたしが主であることを知るようになる」。この言葉が、3度も繰り返されています(7, 13, 14節)。神さまを知らないままで楽しく生きるより、厳しい裁きを味わってでも、まことの神さまを知るこのほうが、はるかに大切なのです。

もう一つは、神さまの裁きのために、イスラエルの多くの人びとが、追い払われ、散らされますが、神さまは、そのような苦しみのなかでも、恵みと憐れみによって守られる人びとを、残してくださいという約束です。神さまは、数少ない人びとを用いて、神さまの働きをさせることができます。こうして残された人びとの中から、やがて救い主イエスさまも誕生して下さるのです。

学校でも、家の回りでも、イエス様を信じるひとは決して多くありません。もっと多くの人びとが、まことの神さまを信じてほしいと私たちは祈ります。そして、たとえ数は少なくても、神さまがいつも私たちの中におられるのですから、勇気をもって祈り、まことの神さまだけを愛し、礼拝しましょう。(小野静雄)

[今週の暗唱聖句] エゼキエル書 6章14節後半

そのとき、彼らは、わたしが主であることを知るようになる。



わたしは剣をお前たちに臨ませ、
聖なる高台を破壊する。

〈ねらい〉

主なる神様は愛なるお方ですが、偶像を礼拝する人々を連れ戻すために、厳しい裁きを下されることがあるということを、御言葉を通して学ぼう。

〈展開例〉

Q1 エゼキエルは主の言葉を預言しますが、誰に向かって言ったのでしょうか？

A1 イスラエルの全ての人々に対してです。

Q2 イスラエルに残っている人々は、何を礼拝していますか？

A2 いまだに、まことの神様を離れ、偶像を礼拝しています。

Q3 エゼキエルの預言はどのような内容です

か？

A3 神様の厳しい裁きが下ることです。あらゆる偶像は破壊され、それに仕える人々は全て死に至ることです。

Q4 神様は、イスラエルの人々を憎くて懲らしめたいから、厳しく裁かれるのでしょうか？

A4 いいえ、とても厳しい裁きを通して、まことの神様に立ち帰ることを願っておられるのです。

〈おいのり〉

今日も教会に来ることができて感謝します。生けるまことの神様を信じていけるように導いて下さい。今日から始まる一週間もお守りください。

〈やってみよう〉

ぬり絵をしよう



〈ねらい〉

旧約聖書のできごとを通して、偶像礼拝への厳しい裁きを知る。神さまは、まことの神さま以外のものを礼拝することを、とてもお嫌いになるのです。

〈展開例〉

ユダの王国が減ばされ、エゼキエルやイスラエルの人々が捕らえられ、連れ去られた事件を「バビロン捕囚」といいます。この恐ろしい事件はなぜ起こったのでしょうか。

とても残念なことにイスラエルの人々は偶像礼拝をしていました。イスラエルの人々は、自分たちで造った像を祭壇に祭り、大事にして拝んでいたのです。このことを神さまはお許しになりませんでした。お怒りになり、裁きをくだすことをお示しになります。

神さまはとても悲しまれたことと思います。たとえば、みなさんの、大好きで大事に思っている人が、なにか困ったことがあった時、神さまにお願いすることをせず、聞いてもくれない偶像に頼っていたらどうでしょうか。きっと悲しいはず

です。そして、なんとかしてその間違っただおこないに気づかせ、神さまを信じる道へ戻ってきてほしいと思うでしょう。神さまも、イスラエルを愛しておられました。イスラエルの人々が偶像礼拝の罪に気づき、偶像からはなれ、まことの神さまの元へ戻ってこられるように、厳しい裁きを示されたのです。

私たちはどうでしょう。知らず知らずのうちに、偶像礼拝をしていませんか。占いを見て、喜んだり不安になったりすることだって、偶像礼拝のひとつです。そんな時、神さまは悲しまれています。しかし同時に、神さまの元へ立ち返るようにと、招いてくださっているのです。

〈おいのり〉

天のおとうさま。おはようございます。今朝もお友達といっしょに神さまを礼拝することができました、ありがとうございます。私たちがいつもまことの神さまにだけ、礼拝をささげることができるように、お導きください。イエスさまのお名前によって、お祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

神さまに従わなかったイスラエルに与えられた刑罰を正しく理解する。

〈聖書の言葉〉

臨ませる、高台、香炉台、廢墟、○捕囚、姦淫、忌まわしい、嫌悪、飢饉、疫病、免れる、頂、宥め、荒廢

〈展開例〉

①神さまはイスラエルにどんな悪いことが起こると言われましたか（11節）。

→エリヤのわかりやすいお話と比べて、漢字も多くピンときにくい箇所です。まず、何が預言されているかをおさえましょう。「剣」すなわち、戦争が起こります。そして、「飢饉」「疫病」です。言葉の説明が必要でしょう。とにかく、ひどいことが次々起こります。そして、もう一つ8～9節に記されていることですが、「捕囚」ということがあるのも確認しておきます。これは、イスラエル（トユダ）がバビロンという外国に負けて、人々はそこに連れ去られ全く自由を奪われることです。紀元前597年に実際に起こったことでした。

②どうしてそんなことが起こるのですか。先週までのお話も思い出して考えてみよう。

→先週はエリヤがカルメル山の対決で真実の神の力を示したにもかかわらず迫害された話でした。イスラエルは真実の聖書の神さまに立ち返らず、異教の神々に従い続けたのです。今日の聖書箇所でも、4～6節、13節に繰り返し「偶像」「祭壇」「高台」という言葉が出てきますが、これらは民のバアル信仰を指しています。そのため、見るも無残な状態になると預言されているわけです。しかし、そのような中で前回の題であった「残りの者」が登場するのを見逃してはなりません（8節）。神さまによって選ばれた

彼らは、捕囚として連れ去られた国で「自分を嫌悪」し、この災いの理由を悟ります。彼らは悔い改めて神に立ち返るのです。ここにイスラエルの希望があります。

③神さまは、十戒で言うところの戒めを守ってほしかったのでしょうか。十戒を見直して考えてみよう（出エジプト記20章3～6節）。

→神さまの求めていたことは、実はとても基本的なことでした。教会学校で教わった十戒の第一戒、第二戒です。このことなら知っている、という子も多いことでしょう。イスラエルの民も知らない人はいなかったと思うのです。知識として知っていることと、それを生活の中で守っていくこととは違うのだということを学びたいと思います。

④神さまのその御心は、今日の聖書ではどこに示されていますか（7、10、13、14節）。

→難解そうに見える箇所ですが、言葉の壁を乗り越えれば神さまのメッセージは明解です。この刑罰を通して聖書の真実の神さまが主であることを知れ、ということです。主なる神さまは公正でもあられるので、悔い改めない罪人に対してふさわしい刑罰をも与えられます。その刑罰は徹底しており、悔い改めに至る選ばれた「残りの者」以外はそれを免れることはできません。さらに一歩進めて、私たちも実は同じ刑罰に値する罪人ではないかということに思い至らせることができれば、と思います。その刑罰をイエスさまが身代わりになって負ってくださったというところに福音の恵みがあります。今日の箇所はお話としてはつらいものですが、その恵みを理解する前提であることを心得て教えたいと思います。

〈ヒント〉

子供たちの理解に応じて行けるところまで進む余裕が大切です。

〈ねらい〉

罪の大きさと、神様がみもとに立ち帰ることを切に望まれることを知る。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしていただき、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. 神様の裁きは何が原因で起こると語られていますか？

→イスラエルの偶像崇拜の罪

Q. 「偶像」とは先々週考えたバアルのような、私達をまことの神様から離れさせるものことです。一見するとこの裁きが厳し過ぎるようにも思えますが、聖書は罪の結果が何だと教えているのでしょうか？ローマ6：23を読んでみましょう。

→「罪が支払う報酬は死です。」（ローマ6：23）神様はそれ程に罪を嫌われる。

Q. 神様はイスラエルに見切りをつけるために、彼らの罪に対してこのような厳しいお取り扱いをなさったのでしょうか？ そうでないならば神様は何のためになさったのですか？

→彼らを全く捨て去るためではなく、「わたしを離れ去る姦淫の心と、偶像にひかれる姦淫の目をわたしが打ち砕」（9節）き、「わたしが主で」（10節）あることを知るため。

Q. イスラエルは神様に背いているのに、何故

神様はこれほどまで彼らに執着されるのですか？

→イスラエルが神様に選ばれ、契約を結んだ契約の民であったから。神様は民が背を向けても御自分の一方的な真実によってイスラエルを見捨てられない。

Q. 人がこの世で味わう大小様々な苦難にはどのような意味があるのでしょうか？

→人が信仰に導かれるきっかけとなったり、信仰者が悔い改めと以前にまさって熱心にさせられるのに用いられる。

「卑しめられたのはわたしのために良いことでした。わたしはあなたの掟を学ぶようになりました。」（詩119：71）。

「こうした虚栄を抑制するのに最も良い方法は、われわれが愚かであるだけでなく、非常に脆弱であることを、神がわれわれに経験させ、立証してくださることである。そこで神は、屈辱や貧困、肉親を失うこと、病気やその他の災難によって、われわれを苦しめられる。そうすると、それらの苦しみに耐えられないため、われわれは屈服させられる。そこでわれわれは謙虚になり、苦難の重荷に耐えさせる、唯一の力である主の力を求めて呼ぶようになる。」（ジャン・カルヴァン『キリスト者の生活綱要』第3章 二つのぶえ社）

Q. 「わたしはだれの死をも喜ばない。お前たちは立ち帰って、生きよ。」（18：32）とおっしゃる神様の御心を覚えて、神様を信じる道をまっすぐに歩いていきましょう。

4. お祈り

罪の大きさと神様の憐れみ深き御心をますます知ることができるように。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

テキスト エゼキエル書34章

(1) 羊飼いのたとえ

「牧者（ローエー）」とは羊飼いのことで、イスラエルの指導者たちを指しています。神はここで、バビロン捕囚が起こった時期に、イスラエルの民衆が離散の憂き目にあったのは、イスラエルの王や長老たちが自分の群れ（民衆）を顧みないで私腹を肥やしていたからだ、と厳しく責めています。そこで告げられる神の決断は10節以下に表されます。神はイスラエルの牧者たちから群れを取り上げ、ご自分で群れを養われる、というのです（11節）。

牧者を非難する4節の言葉から、神御自身の群れに対する態度が違ってよく判ります。「お前たちは、～しなかった」と言われるのですが、ひっくり返せば、神は「弱いものを強め、病めるものを癒し、傷ついたものを包み、追われたものを連れ戻し、失われたものを探し求め」るお方なのです（15節）。そして、自分自身を養うのに精一杯なイスラエルの牧者とは違って、「力づくで過酷に群れを支配する」ようなお方ではありません。また、「肥えたものと強いものを減ぼす」と、羊を食べ物にした者たちを容赦しません（16節）。

羊と羊飼いとの関係で言えば、羊飼いが良い羊飼いかどうか群れの命運を握っています。イスラエルの羊飼いたちは良い羊飼いでありませんでした。そこに、バビロン捕囚に行き着いた偶像崇拜社会の悲惨がよく現れています。誤った指導者をいただくことは乱世においては致命的です。しかし、その過ちは人間が人間を支配する世界にあっては避けることができません。また、偶像崇拜とは、真の神以外の何者かが人を支配するというものですから、羊たちは神以外の何者かに行く末を委ねてしまっているわけです。その何者か、とは結局、人間の栄光であって、力のない羊たち

は食べ物にされるばかりです。良い羊飼いは、神以外にはおられないことが、実にこの預言者の言葉で明らかにされています。

(2) 平和の契約

預言者の口を通して、ここで断固として語っておられる神は、詩編23編に歌われるような、散らされた群れを探し求め、呼び集める、理想的な羊飼いです。23節以下では、ダビデを起こすと言われます。他では「ダビデの子孫」と言われますが、ここではダビデ本人が名指されているのが特徴的です。ダビデは確にかつて羊飼いでした（サムエル記上16章11節）。そして、このダビデを介して、神は「平和の契約」（25節）と言われる新しい契約をイスラエルと結ばれます。「平和（シャローム）」は「和解」でも構いません。「主であるわたしが彼らの神となり、わが僕ダビデが彼らの真中で君主となる」（24節）。この後半は、別の定式では「彼らはわたしの民となる」となるはずですが（エレミヤ書24章7節、エゼキエル書11章20節他）、主がお立てになった君主ダビデが民を代表すると告げられているのが、この契約の特徴です。「君主（ナシー）」とは部族や会衆のリーダーというニュアンスが強い、「王（メレク）」とは異なる語です。

新しいダビデを介して結ばれる平和の契約には、荒廃の後、神によって実現される平和の到来が約束されています（25～29節）。偶像崇拜によって国を荒廃させたイスラエルの民を、神は決して見捨てませんでした。捕囚となって離散していった民をご自分で呼び集め、彼らに君主ダビデをお与えになって、イスラエルの家を再興されます。聖書の語る「契約」は、こうして神の憐れみと力によって支えられている、神と人間との関係です。
(牧野信成)

テキスト エゼキエル書34章(1～16節)
参照カテキズム 子どもカテキズム 問31

〔単元のねらい〕

神がその選ばれた民を養う働き。それは旧約においてしばしば「牧者」の姿で描かれる(エレミヤ書23章1～4節などを参照)。神こそ、イスラエルと教会のまことの牧者であられる。そして神は、ご自身の羊を養う働きを、イスラエルの指導者や、教会の役員たちに委ねてくださる。これらの働き人たちは、いわばまことの羊飼いの働きに仕える「副牧師」である。神は、イスラエルの指導者たちが、まことの牧者の心を忘れ、羊たちの現状に無関心となり、「自分自身を養う」ことに血道をあげている悲惨な姿に、深い失望と憤りを向けておられる。しかし、エゼキエル書においては、怠慢で強欲ないつわりの牧者への怒りよりは、放置された群れへの神の憐れみ、そして神が自ら群れを養う羊飼いとして身を乗り出してくださる情愛に強調点が置かれている。群れを養うことへの神の熱い決意。日曜学校と、そこに集う子供たちへの私たち自身の祈りと愛も、その神の決意の中で支えられる。

「神さまの美しい牧場で」

今朝は、神さまが私たちの「まことの羊飼い」であることを学びます。と言っても、皆さんの中には、羊飼いに守られた羊の群れを、実際に見たひとは少ないではありませんか。動物園の羊や、自然農園のようなどころで放し飼いにされている羊の群れなら、「わたしも見た、僕も見た」という人がいるでしょう。

羊という生き物は、とても穏やかな動物です。白やグレーの毛で覆われた羊の姿は、のんびりとして、平和そのものです。でも、エゼキエルの時代、またイエス様の時代の実際の羊の群れは、いつも平和なわけではありません。熊やおおかみのような、羊を襲う獣もいたことでしょう。ユダヤには岩地や荒れ野も多いようですから、羊たちに良い牧草を食べさせることは、羊飼いの大切な仕事でした。そして、何よりも羊は、導く人がいなければ道に迷ってしまう動物です。自分では、どこへ向かって歩けばよいか分からないのです。なかなか手のかかる生き物ですね。

実は私たち自身が、神さまの目には、迷い出た羊と同じように、弱く、傷ついたものです。ですから、神さまは、昔のイスラエルの人びとを守るために、ユダヤの国に王様をはじめとした力のあ

る指導者を与えられました。人びとが、神さまを信頼し、平和に安全に生きられるよう「牧者」を与えられたのです。

ところが、その牧者たちは、イスラエルの民のことを心にかけるどころか、自分が豊かになり、ぜいたくなくらしをすることにだけ一生懸命でした。人びとが苦しみ、傷つき、貧しいまま放り出されているのに、平気です。自分だけがぬくぬくと豊かになって、人びとの世話をしようとはしません。神さまは、こんな指導者のありさまに、激しい怒りと悲しみをいだかれます。

もうイスラエルの指導者たちに、人びとのことを任せてはおけないのです。神さまの群れが、散らされているのです。羊が道に迷うように、神さまが愛しておられる人びとが、道に迷い、助ける人もないまま、行き倒れになっているのです。傷ついて、自分では立ち上がることもできません。

神さまは「自分の羊」「自分の羊」と、繰り返して言っておられます。そこに神さまの大きな愛が溢れています。迷い、傷つき、弱りきった人びと。その一人一人は、神さまの目には「自分の羊」なのです。私たち一人一人が、神さまの羊です。いま、学校ではひどい「イジメ」のために生きてゆ

く力も勇気もなくしてしまう子供たちの悲鳴が聞こえます。みなさんの近くにも、そのような辛い気持ちでいる友達がいませんか。皆さん自身、心に深い傷をうけてしまって、なかなかそこから立ち上がることができないような辛さを味わったことがあるかもしれません。人が、共に生きることができない。それは、神さまがいちばん心を痛めておられることです。

クリスチャンの詩人で、まど みちを というひとがいます。「ぞうさん」(ぞうさん ぞうさん お鼻がながいのね) などたくさん楽しい歌も作っています。

まどさんの作品に「ぼくがここに」という、すばらしい詩がありあす。

ぼくがここにるとき／ほかのどんなものも／ぼくにかさなって／ここにすることはできない／もしもゾウがここにいるならば／そのゾウだけ／マメがいるならば／そのひとつぶのマメだけしか／ここにすることはできない／ああこのちきゅうのうえでは／こんなにだいじに／まもられているのだ／どんなものが どんなどところに／いるときも／その「いること」こそが／なににもまして／

すならしいこととして

どんなに小さく、どんなに弱く、どんなに傷ついたものでも、私たちの地球では守られています。小さいもの、弱いものを守りたい。そのように願っている神さまが、その小さいもの、弱いものと一緒にいてくださるからです。

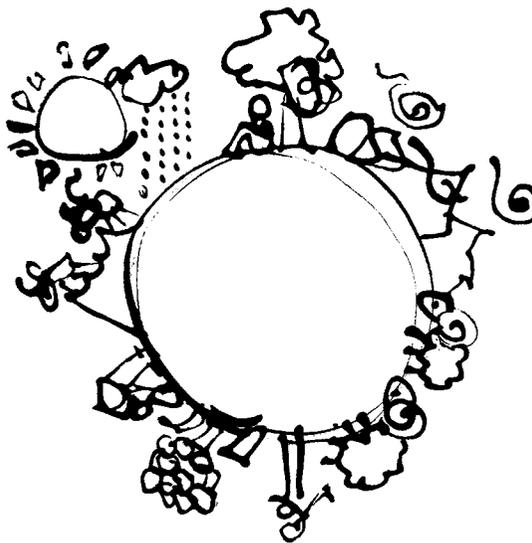
私たちも、とても小さく弱いことを、私たちは知っています。ほんのささいなことでも、勇気がくじけてしまいます。正しいと分かっている、その正しさを貫く勇気がないのです。その大元には、私たちが神さまへの信頼に生きることができない「罪」があるのです。神さまは、そのような罪人の私たちを、迷い出た羊のように、神さまの牧場、神さまの安全な囲いの中に集めてくださいます。神様の安全な囲い。それは、いまではイエス様の教会です。

迷い出た羊たちを、美しい牧場で養い、永遠の命を与えるため、イエス様は生まれ、そして十字架の苦しみを背負ってくださいました。ですから、小さく弱い羊である私たちも、今では神さまの美しい牧場で、「まことの羊飼い」イエス様といっしょにいられるのです。(小野静雄)

[今週の暗唱聖句]

エゼキエル書34章14節前半

わたしは良い牧草地で彼らを養う。



私は良い牧草地で彼らを養う。

〈ねらい〉

真の神様こそ教会の牧者である。そして私たちはその牧場の羊。迷い、傷つくことが多いが、それでも探し求め、守って下さる良い羊飼ひ、イエス様を知り、親しもう。

〈展開例〉

皆さんは羊を見たことはありますか。聖書には羊の話が出てきます。羊は弱い動物です。群れとなって暮らします。緑色の柔らかい草が羊たちのご飯です。

羊の世話をする人は、「羊飼ひ」と言われています。羊は一日中、野原でおいしい草を食べ、水を飲み、友だちと追いかけています。転んでけがをする羊もいます。食べることに夢中になって迷子になったりします。

ですから羊飼ひの仕事は大変です。野原には熊や狼も出てきます。羊飼ひが、「怖いよー」と言って逃げたら、羊は食べられてしまいます。それは悪い羊飼ひです。残った羊もバラバラに散ってしまいます。そんなことにならないように、良い羊飼ひは獣を追いかける仕事もしなければなりません。どんなことがあっても羊を守るのです。

聖書で神様は、私たちのことを、「自分の羊」

と言っています。昔、イスラエルの国に、神様はたくさんのご自分の群れの家族をもっていました。王様や長老という仕事を与え、群れの人々を守るようにしたのです。

でも、その人たちは、自分のことだけを考えて、人々のことは何の世話もしなかったのです。そこで神様は、ご自分で「自分の群れを探し出し、人々の世話をする」決心をしたのです。良い羊飼ひを私たちのために送る決心でした。その人が私たちのイエス様です。

私たちを守り、養って下さるイエス様は、私たちが弱いときには強くして下さい、病気のときは治して下さい、傷ついたものを包み、追い払われたものを連れ戻し、失われたものを探し求めて、私たちが安心して生活できるように、平和に暮らせるように、悪い者から今日も守って下さるのです。

真の羊飼ひがいて、羊を一つの群れとして生活できるように、イエス様の教会がここにあるのです。

〈おいのり〉

いつも守って下さってありがとうございます。いつまでも側において下さい。

〈歌ってみよう〉

「よい羊飼ひ」 詞／曲 二宮忍（関キリスト教会）

(羊飼ひ) わたしはよい羊飼ひ わたしの羊のために
この命捨ててさえ 守ってあげる
(羊たち) わたしは小さな羊 羊飼ひの声聞いて
いつまでもどこまでも ついて行きたい
(羊たち) でもときどき 迷子になっちゃうの
(羊飼ひ) 探してあげる
(羊たち) 狼が来たなら 怖いよね
(羊飼ひ) 助けてあげる
(羊飼ひ) だから おやすみ 安心して
(一緒に) おやすみ おやすみ 草原に
※次ページの楽譜をご覧ください。



〈ねらい〉

1. 義と公正の神さまは悪を見逃したままにはなさらないということ。
2. 悪によって起こされた苦しみは、イエスさまによって取り除かれるということ。
3. 神さまを信じる人は、このイエスさまによって導かれ養われる存在であること。

〈展開例〉

羊は、猫のように気まぐれに移動しますが、迷いやすく、自分で元いた場所に帰ることができなくなります。また、同じ場所の草ばかり食べる習性を持っているので放っておくと群れで草を食い尽くし、その土地に草が生えなくなります。また、足も遅く敵に狙われると逃げ切ることはできません。ですから羊飼いが羊の群れをきちんと導かないと、羊たちは生きていくことはできないのです。

もしも、羊飼いがちゃんと自分の仕事をしなくなったら、羊たちはとても困ることでしょう。しかも、羊飼いが仕事をさぼるだけではなくて、羊たちの食べる草や飲み水を汚して回っているとしたら、羊たちはずいぶんと苦しく、悲しい思いをすることでしょう。

今日の箇所では、このような苦しい目にあっている羊たちこそが、私達の姿であると語っています。私達の中には狭くて意地悪な人がいて、リーダーとして選ばれたのに、自分のことだけを考えています。テレビやニュースでは、立派な立場や仕事をしている人たちの中にも、みんなのお金を自分のために使ってしまったりする人がいることを語ります。

私達の神さまはこういう悪いことをそのままにされない方です。神さまはさぼっていた悪い羊飼いの代わりに、良い飼いを送って下さいました。この良い羊飼いきそイエスさまです。イエスさまは悪い羊飼いのように、自分一人のためにみんなを困らせたり悪いことをしたりしません。むしろ、私達のために神の御子であるご自分が代わりに苦しみ、悲しい目に会って下さったのです。ご自分の一人子イエスさまを私達に与えて下さった神さまは、それほどまでに私達のことを大事に思っていて下さるのです。

この神さまは私達に対して平和の約束をして下さいました。平和の約束とは、神さまと私達が喧嘩をしないということだけではありません。神さまが神さまに従う私たちの生活の全てを祝福して、良いものを与えて下さるという約束です。それは羊たちが羊飼いによって導かれるように、神さまはイエスさまを通して私達を御世話して下さいているのだということです。私達はこの世の悪や罪という、悪い羊飼いでなく、神の御子イエスさまという良い羊飼いに従う者とされているのです。

〈おいのり〉

天の父なる神さま。毎日、私達を思って下さり、イエスさまの御言葉を通して導いて下さりありがとうございます。私達の毎日の暮らしがこれからも神さまによって護られますように。私達が苦しい時も神さまをご存知ですから、憐れみ深いあなたの救いを待ち望むことができます。どうか、今、苦しみの中にいる人たちをあなたが憐れんで、御手を伸ばして下さいますように。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。

☆今回の聖書箇所は長く難解ですので、34章23～31節に絞って学びます。

〈ねらい〉

神さまご自身が、人の罪で荒廃したイスラエルを回復させてくださる約束をされたことを学ぶ。

〈聖書の言葉〉

○牧者、牧す、僕、君主、契約、断つ、安んじる、産物、生じる、軛、苗床、辱める

〈展開例〉

①エゼキエルが預言したとき、イスラエル（とユダ）はどのような状態でしたか。先週までのお話を思い出して考えてみよう。

→主人公のはっきりしないお話が続きますので、今一つピンときていない子が多いのではないかと予想されます。そういうときは復習をしっかりとしてから積み上げてまいりましょう。バアル信仰に走り、真実の主から離れたイスラエルは、主の刑罰として「剣」すなわち戦争、「飢饉」「疫病」といった災いを受けます。中でも最も悲惨な出来事は、バビロンに「捕囚」されたことでした。そのとき都であったエルサレムはバビロン軍の攻撃で陥落し、王を始めとして多数の民が捕らえられバビロンに連れ去られました。その具体的な記述は列王記下25章1～21節に見ることができます。

②神さまは、奴隷状態のイスラエルの民をどうしてくださると言っていますか（27節）。

→エゼキエルが預言したのは、まさに上記のバビロン捕囚の真っ只中でありました。27節を注意深く読むと、主である神さまがイスラエルの民を、「奴隷にした者の手から救い出す」と書いてあります。これは「捕囚」からの解放、すなわちイスラエルへの帰還を指しています。そのことは、34章13節などによりはっきりと書かれています。

③また、民を導く人として誰を立ててくださいますか（23～24節）。それはどういうことですか。

→神さまは、ダビデを起こして牧者とすると言われます。このダビデはまた君主でもあると言われます。この部分は象徴的な言い方です。そして、このような表現を子供たちはとても苦手です。回りくどい説明をせず、ずばりこれはイエスさまのことを預言しているのだと結論を急いでもいいのではないのでしょうか。その上で、ダビデの時代はエゼキエルの400年前、エゼキエルの時代とイエスさまとは600年という途方もない時間で隔てられており、エゼキエル自身何が起こるのか全く予想のできない事柄を、神さまから示されたのだということに思いを巡らせるとよいと思います。イエスさまは、ここで預言されているように確かに良い牧者そして君主となりました（マタイ9章35～36節）。

④さらに神さまが約束してくださったことがいろいろあります。それは一言で何と呼ばれていますか（25節）。またどんな内容ですか。

→神さまご自身が、イスラエルの民と結ぶ約束を「平和の契約」と名づけています。これはイエスさまが十字架の贖いによって実現された恵みの幻と言えるでしょう。ここには、「敵や獣からの守り」「豊かな収穫」「恵みの雨」が繰り返し語られます。これらは、現実生活における神さまの祝福でももちろんあるわけですが、同時に霊的祝福の具体的な形でもあったと考えられます（この理解は、やはり子供たちには難しいです）。ですから、イエスさまについて福音書の中で語られる「守り」「豊かさ」「恵み」のことです。イスラエルのどん底の状況で語られたこの預言が、いかに豊かな内容を持っていたかまず教師自身がじっくりと味わいたいと思います。

〈ヒント〉

理解を助けるために簡単な年表を用意したらどうでしょうか。

〈ねらい〉

まことの羊飼いである神様に委ねて生きる。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしてください、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. 神様は預言者を通してイスラエルの牧者たちを非難していらっしゃいますが、これは彼らが何をしたから、そしてしなかったからと語られていますか？

→民を導くはずの指導者である彼らは、自分自身の私腹を肥やすばかりで、民を顧みなかった。その結果、「彼らは飼う者がいないので散らされ、あらゆる野の獣の餌食となり、ちりちりになった。わたしの群れは、すべての山、すべての高い丘の上で迷う。また、わたしの群れは地の全面に散らされ、だれひとり、探す者もなく、尋ねる者もない。」(5、6節)

Q. 神様は飼う者がいない状態のようになってい

るイスラエルの羊の群れに、何をなさるとおっしゃいましたか？

→御自ら民を養われ、彼らのために一人の牧者を起こされる約束をされた(11、23節)。

Q. 神様が与えられたまことの羊飼いととはどなたですか？

→「わたしは良い羊飼いである。」(ヨハネ10:11)とおっしゃったイエス様。

Q. イエス様は私達の羊飼いとして何をしてくださいましたか？

→「羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるため」(ヨハネ10:10)に来られ、私達が永遠の命を受けるため、十字架で命を捨ててくださった。

Q. 暗唱聖句に「わたしは良い牧草地で彼らを養う。」(34:14)とありますが、今で言えばどこを指しているのでしょうか？

→教会。羊飼いイエス様はそこで私達を養ってください。

Q. 羊飼いである主に導かれて生きる人生の幸いを詩編23編と一緒に読んで味わってみましょう。

4. お祈り

私達を養い、導いてくださることに感謝して。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。



テキスト ダニエル書3章1～30節

(1) ダニエルと三人の友が置かれていた状況を理解しよう

ご存知のように、私たちはキリスト教国に住んでいるわけではありません。クリスチャンはごく少数の異教社会で生活しています。それゆえ、抵抗や不自由さを感じる事が起こってきます。例えば、この国が主の日を重んじる国であったのならどんなに良かったろうか、と叫びたくなるような事態にしばしばぶつかります。

さて、ダニエルたちはどうでしょうか。ダニエルたちは、私たちよりもっと苛酷な異教の国に置かれていました。1章1～7節を御覧下さい。

- (1) 彼らは敗戦国の捕囚の民として連れて来られた。すでに自由はありません。
- (2) 彼らは良い育ちと豊かな能力を持っていたため、バビロンの王に仕えるしもべとなるのが命じられた。命令に背くなら、すぐにも処刑されてしまったことでしょう。
- (3) 新しい名を付けられた。これからはバビロン風の名で呼ばれるのです。この社会に同化する以外に道はない、と絶えず脅かすようにです。苛酷な状況です。

(2) 神は全地の主

1章8節～2章49節を御覧下さい。たとえ異教国家であろうとも、全地を治めておられるのは主なる神です。神は侍従長の心に働き掛け、また、四人の健康を強めて下さいました。さらに、国中のどの占い師、祈祷師よりもはるかに優れた知恵を与えられます。そして後には、四人とも高い位に就いたのです。

異教社会の虐げの真っ直中でも、み民を大いに祝福することが我らの神には出来るのです。

(3) 対決の時来る

国家権力者が、手で造った像の前に人々をひれ伏させようとする、それはバビロンの王に限ったことではありません。ローマ国家による皇帝礼拝

の強要も、戦時中、日本政府が国民とアジアの人々に強要した神社参拝も同じです。

ネブカドネツアル王は命じます。「背く者は、燃え盛る炉に投げ込まれよ！」。

①自分の問題として考える

さて、どうぞご自分を、この三人の主のしもべの立場に置いて考えてみて下さい。自分ならどうするのかと……。

形だけひれ伏しておこう。せつかく行政官になれたところなのだから、と考えるのでしょうか。私たちが救うために十字架に架かって下さった主は、私たちに命じておられます。「死に至るまで忠実であれ」(黙示録2:10)。

②三人の落ち着きは一体なんだ

燃え盛る炎を前にして、震え上がらず、悲鳴を上げずにいられる人がいるのでしょうか。きっとおりません。しかし、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴの三人は激怒する王とは対照的にまったく落ち着いています。七倍も熱く燃やされた炉も、彼らの主への信頼を揺るがすことは出来ません。

なぜ、これほど落ち着いていられたのでしょうか。どうぞ、その理由をご自分で時間をかけて考え、思い巡らして下さい。参照イザヤ43:1～7、マタイ10:16～20、ヨハネ4:18。

③主のみ業

彼らは、少しも焼かれず、焦げもせずに出てきました。そして、これによりバビロン王の心は変えられ、国々にまことの神を認めるべき命令を出すまでになるのです。王は語ります、「まことに人間をこのように救うことのできる神はほかにはない」。

(4) 結び

人数はわずかに三人、しかしこの三人によって、大バビロンを引っ繰り返す大きなみ業が現わされたのです。私たちのこの国も、彼らに継ぐ信仰の勇者があらわれるのなら、きっと変わるに違いありません。(小野田雄二)

の大きな金の像を造ります。約15階建のヒルの高さあります。「この金の像を拝みなさい」とシャドラク、メシャク、アベド・ネゴも命じられるのです(3:14-15)。目の前には、燃え盛る炉が準備され、彼らも、王の命令を拒否すれば、焼き殺されることは、十分に理解することが出来たでしょう。

しかし、彼らは金の像を拝むことはしませんでした(3:16-17)。主なる神さまが、私たちに求めておられる信仰とは、彼らのような信仰です。主なる神さまは、生きて働いておられ、彼らと共にいて下さり、彼らを救って下さいます。主なる神さまは、彼らの信仰を本当に喜んで下さいます。

なぜ、彼らは、死ぬことも恐れずに、金の像を拝むことを拒否できたのでしょうか？ 主なる神さまが唯一の生ける神さまであり、真の救いをもたらして下さる神さまであることを信じていたからです。もちろん、ここで死ぬかも知れません。しかし、神さまは肉体の死についても、イエス様が十字架の死から三日目の朝に復活し、天に昇ら

れたように、やがて復活の体が与えられ、天国に入れられ、神さまの祝福に満たされることを、彼らも信じていたからです。

彼らのように、像を拝むことが求められつつも、拒否して、実際に殉教の死を遂げていった人たちが、多くあります。それは金の像を拝んで、神さまを悲しませたり、神さまを裏切って神さまの裁きを受けるよりは、神さまを信じて、神さまによる救いによって与えられる祝福を、心から信じていたからなのです。

日本には、本当の神さまを信じている人たちが、本当に少ないために、偶像を拝むように求められることが、いろんな所で出てくるでしょう。しかし、本当の神さまは主なる神さまお一人であり、本当の救いをお与え下さる主なる神さまを信じていれば、神さまが守って下さり、本当の喜びをお与え下さることを信じて、「私は像を拝むことはしません」とはっきりと言える信仰を持って頂きたいと思います。(辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句] ダニエル書 3章18節後半

わたしたちは王様の神々に仕えることも、
お立てになった金の像を拝むことも、決していたしません。



四人目の者は神の子のような姿をしている。

〈ねらい〉

燃え盛る炉の中にも、一緒にいて下さる神様の助けを知り、「人間をこのように救うことのできる神様はほかにはない」というネブカドネツアル王の驚きを追体験しよう。

〈展開例〉

最初に工作をして、作った絵本を使いながらお話をします。お話の後で時間があれば、絵本に色ぬりをさせる。

【表紙】王様が大きな金の像を造りました。この像を拜まない人は、大きな燃え盛る炉【1】に投げ入れる、というおふれを出しました。ダニエルさんの三人のお友だち【裏表紙】は、本当の神様を信じていましたから、「金の像を拜むなんて、できません」と王様に言いました。王様は怒って、三人を縛り、燃え盛る炉の中に投げ込んでしまいました。ところが！まもなく王様はビックリして立ち上がりました。見て下さい【2】、炉の中にいる人は何人でしょう？数えてみましょう。（子どもに指で押さえながら数えさせる）「いーち、にー、さーん、しー。」何人かな？「四人。」そうだね、四人いるよ。おかしいね～。王様が炉に投げ込んだのは三人（指を三本立てる）なのに、炉の中には四人（別の手で四本指を立てる）いますよ。（両手を合わせて一本指が余ることを見せる）一人多いね。（もう一度数えて確かめさせてもよい）し

かも、三人を縛って炉に投げ入れたはずなのに、四人は立って歩いています。

王様は、「四人目の者は、神の子のような姿をしている」と言いました。そして炉に近づいて、「いと高き神に仕える人々よ、出てきなさい」と呼びました。すると【3】、三人は炉の中から出てきました。やけどもしていません。服や髪も焼けていません。

王様は、「三人の神様をたたえよ。人間をこのように救うことのできる神様は、ほかにはない」と言って、本当の神様を讃美しました。

☆幼稚科には何才のお子さんが来ていますか？もし、年長のしゃべりたい盛りのお子さんでしたら、「ネブカドネツアル王様」「シャドラク」「メジャク」「アベド・ネゴ」の名前を言わせてあげて下さい。もちろん、練習しないとできません。でも、言えるようになると、とても喜びます。（そのためには、先生もスラスラ言えるように練習しておく必要があります。）年少の、しゃべることが苦手なお子さんでしたら、言わせる必要はありません。お話も「王様」「ダニエルさんの三人のお友達」で十分です。

〈おいのり〉

偶像を拜めと言われても、それはできませんとはっきり言って、本当の神様だけを礼拝することができますように。

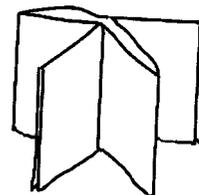
〈やってみよう〉

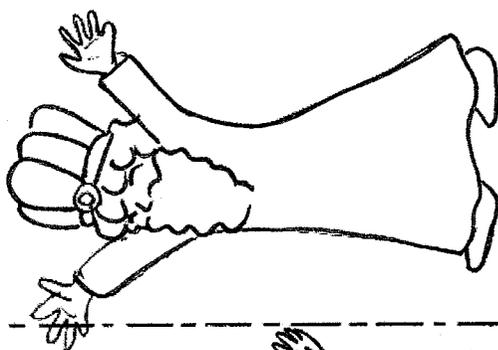
絵本を作ろう

【準備する物】 次ページの絵のコピー、はさみ、色鉛筆（ぬり絵の時間があれば）

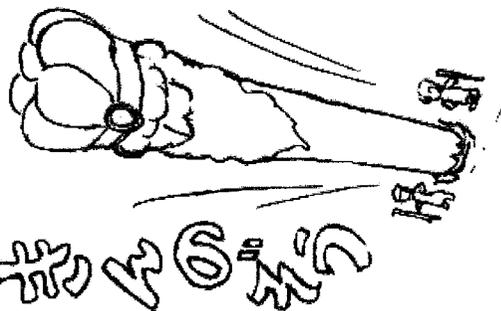
【作り方】

- ①-----線を山折りにする。
- ②———線をはさみで切る。
- ③-----線を谷折りにする。
- ④図のように絵本の形にする。
- ⑤展開例のお話を聞いた後、時間があればぬり絵をする。

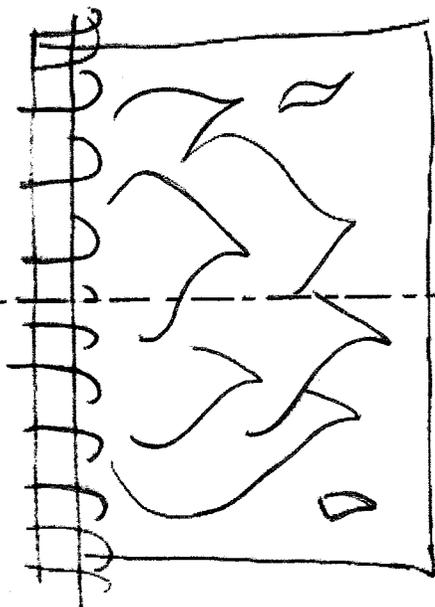
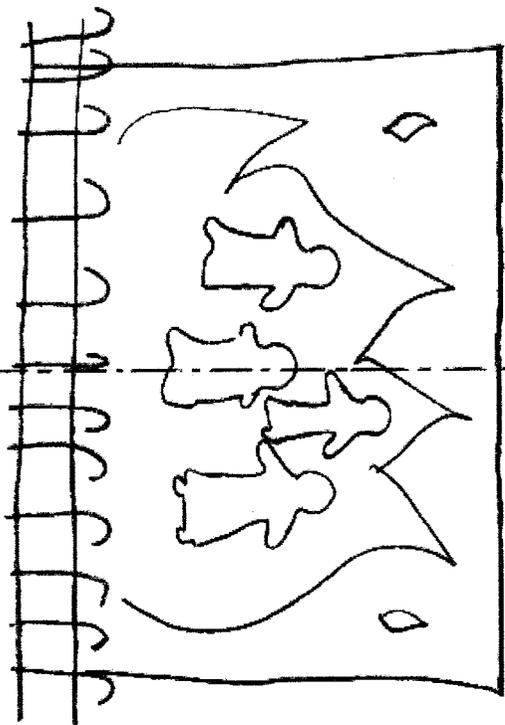




おしゃべり



プレゼント



〈ねらい〉

こどもたちが、まことの神様以外の、神ならぬもの、いきている、あるいは死んでしまった人間や被造物を拝んだり、信仰の対象とすることがないように、また本当に恐れるべき方はまことの神様だけであるということを覚えさせる。

〈展開例〉

バビロンのネブカドネツアル王は、一つの金の像を建てた。高さ60アンマ、今の単位では約27メートルぐらいです。ふつう、小学校は3階建か4階建が大部分ですから3階と4階をあわせてぐらいの7階建もしくは8階建ての校舎と同じぐらいの高さです。「国中の人々は楽器のなる音が聞こえて来たら、その像をひれ伏して拝みなさい」と命令をだしました。また、「命令に従わないものは燃え盛る炉の中に投げ込む」とも命じました。

まことの神様を信じているシャドラク、メシヤク、アベド・ネゴの三人は音楽が聞こえて来てもその像を拝みませんでした。この三人を快く思わない人々が王に、「三人が王様の御命令にいたしません」と、訴えて出ました。その訴えを聞いた王は怒り、シャドラク、メシヤク、アベド・ネゴを連れてくるように命じました。王の前で問いただされた三人は、「わたしたちのお仕えする神様は火の燃え盛る炉や、王様の手からわたしたちを救うことができますし、必ず救ってくださいます、そうでなくともわたしたちは、王様の神々に仕えることも王様の造られた金の像を拝むことも決して致しません」と答えました。王は怒って炉をいつもの七倍も熱くするよう命じ、三人を服の上から縛り上げて燃え盛る炉に投げ込みました。火は激しく燃えていたので三人を連れて行った人々さえ焼き殺してしまいました。三人は縛られたまま炉の中に落とされました。

しばらくして王が炉を見ておどろいて言いまし

た。「あの三人は縛ったまま炉の中に投げ入れたのではなかったのか、しかし、四人のものが火の中を自由に歩いているように見える。そして、四人目のものは神の子のように見える」。王が三人を呼ぶと三人は炉から出て来て服も髪の毛も焦げておらず火の匂いさえしなかったのです。

王はまことの神様に従うために命をも惜しまずに王の命令に従わなかったこの三人を守られたまことの神様をほめたたえて、まことの神様に従うよう国民に命じました。

マタイ10章30節に、「あなたの髪の毛一本一本まで数えられている」とありますが、わたしたちの髪の毛一本一本まで数えてくださる神様は、わたしたちを必ず守ってくださいます。だから、何ごとも恐れず、わたしたちを守ってくださいますまことの神様だけにひれ伏して、神様でないものを拝んだりひれ伏したりしないように、またそのようにすることができるようにいつも祈っていたいものです。

学校では天皇を讃える歌である「君が代」を無理やり歌わされたり、「日の丸」を必要以上に大切に、まるで神様のシンボルのように扱わせたりという、まことの神様のおよろびにならないような国にだんだんとなっていく中で、神様を信じるものは、ただ神様だけを恐れ、偶像を拝んだりすることがないように、いつも気をつけていたい。またそのために祈っていなければなりません。

〈おいのり〉

神様は神様を信じて、神様にお仕えするために王の命令に背いて王の造った偶像を拝まなかった三人を燃え盛る炉の中でも守ってくださいました。わたしたちも、わたしたちの髪の毛一本一本まで数えてくださる神様だけを信じて、神様以外のもの、偶像や人間を拝んだりすることがないようにさせてください。

☆今回も長く、特に初めの部分に漢字が多いので、ダニエル書3章8～30節に絞りたいと思います。

〈ねらい〉

力強く守ってくださる神さまに喜ばれる行動をすることを学ぶ。

〈聖書の言葉〉

○中傷、行政、血相を変える、側近、総督、執政官、属する、ののしる

〈展開例〉

①1章7節でダニエル、ハナンヤ、ミシャエル、アザルヤはベルテシャツアル、シャドラク、メシャク、アベド・ネゴと名前を変えられます。今日のお話はそのうちの三人が登場します。なぜそんなことをさせられたのでしょうか。

→まず、ダニエルと友人たちの置かれた境遇を確認しましょう。前回の話と関連しますが、捕囚の民としてバビロンに連れ去られたという状況でした。そこでは、現地風の通称名をつけて呼ばれました。彼らは、その優秀さから王宮で優遇されたわけですが、それでも名前を変えるという屈辱的なことに耐えねばならなかったわけです。子供たちは、これらの物語風の名前を喜ぶかもしれませんが、外国人として基本的人権を認められない状況があったことを忘れてはなりません。

②他の人たちは皆ネブカドネツアル王の金の像を拝んだのに、なぜシャドラク、メシャク、アベド・ネゴの三人は拝もうとしなかったのでしょうか。

→ここは、表にして他の人たちと三人とを比較対照して考えていくといいでしょう。「拝んだか」「なぜか」「何を信じていたからか」こういうふうに深めていきます。結論はもちろん、三人が聖書の語る真実で唯一の神さまを信じていたからということになります。では、他の人たちは

何を信じていたのでしょうか。彼らは多神教でした。ですから、ネブカドネツアル王の偶像を拝むことに痛みを感じなかったのです。この対比は、日本におけるクリスチャンの立場と同じです。多くの日本人が口にする「神」とクリスチャンの「神」が全然違うものだというところに気づかせられればと思います。

③三人は燃え盛る炉の中に入れられても、神さまが守ってくださると、本当に信じていたのでしょうか（17～18節）。

→この部分の解釈は微妙です。誰でもそのような場面に直面したら、確信をもってこのように言うことはなかなかできないでしょう。しかし、この聖書箇所メッセージは、忍耐をもって従い続けることの重要さです。確信は後から与えられるものでしょう。そして、そのことこそ教師が経験に基づいて子供たちに伝えていくべきことです。

④炉がとても熱かったことは、どこでわかりますか（19、22節）。

→このお話がどうなるかは、よく知られていますしわかりやすいものです。そのような場合にはあえて細部に目を向けてみると子供たちの注意をそらさずに進めることができます。怒り狂った王は、炉を普段の七倍の熱さに燃やさせ、そのため三人を連れて行った男たちの方が焼け死んでしまいます。三人が完全に守られていたことが対照的に描かれます。炉の火の中で神の子のような者が一緒に歩いているという話も、イメージしやすく興味深いところです。「神の子」と言えば、この場面では明確にされていませんが、私たちにとっては当然イエスさまのことで、私たちが同じような苦しみにあうことがもしあったならば、イエスさまがきっとこのように共に歩んでくださると教えることができると思います。

〈ねらい〉

神様は御自分に仕える者と共にいてくださることを知る。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしていただき、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. ネブカドネツアル王が造ったものは何でしたか？

→金の像（1節）。「この人々は御命令を無視して、王様の神に仕えず、お建てになった金の像を拝もうとしません。」（12節）と訴えられ、「わたしの神に仕えず、わたしの建てた金の像を拝まないというのは本当か。」（14節）と王に責められていることから、この金の像は異教の神の偶像であっただろう。

Q. 王がこの像を建てた除幕式で国民に何が命じられましたか？

→「……ネブカドネツアル王の建てられた金の像の前にひれ伏して拝め。」（5節）ということ。

Q. シャドラク、メシャク、アベド・ネゴは何故王の命令に従わなかったのですか？ ユダヤ人は捕囚中の身であり、そして「ひれ伏して拝まない者は、直ちに燃え盛る炉に投げ込まれる。」（6節）と脅されていたのに。

→唯一の生けるまことの神様を信じていたから。十戒の第一戒で、「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。」（出エジプト20：3）と神様の御心を教えられていたので。

Q. ネブカドネツアルは「お前たちをわたしの手から救い出せる神があるか。」（15節）と言いましたが、それに対する三人の確信はどういうものでしたか？

→17～18節、「わたしたちのお仕えする神は、その燃え盛る炉や王様の手からわたしたちを救うことができますし、必ず救ってください。そうでなくとも、ご承知ください。わたしたちは王様の神々に仕えることも、お建てになった金の像を拝むことも、決していたしません。」

Q. 神様は三人の信仰にどう応えられましたか？

→燃え盛る炉から彼らを救い出されることによって、御自分を信じるために迫害を受け、殉教の危機にさらされる者と共におられることを示された。

Q. 私達もまことの神様を信じる者達が少ない国に生きていますから、三人のようにまことの神様以外の何らかのものを拝むことを求められることがあります。イエス様は私達に何とおっしゃって励ましてくださっているのでしょうか？ マタイ10：28～30を読んでみましょう。

4. お祈り

まことの神様だけを礼拝する者として守られるように。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

テキスト ダニエル書6章

(1) ダニエルの生き方

私たちがいかに生きるべきか、神様はそれをミカ書を通して教えておられます。「人よ、何が善であり、主が何を前にお求めておられるかは、お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し、へりくだって神と共に歩むこと、これである」(ミカ書6:8)。

ダニエルは、まことにこの求めの通りに生きた人でした。なぜなら、彼は日に三度の祈りと賛美を欠かしたことがなく、また、彼を憎む者たちでさえダニエルの働きに、何の汚点も怠慢も見つけることが出来なかったからです。

王が禁令の書面に署名したことを知っても、彼はいつもと変わらずに祈り続けました。それが、どういう結果をたらすことになるかは、ダニエルもよく知っていたことでしょう。しかし、祈りと賛美がダニエルの口から絶えることはありませんでした。まことにダニエルは、主の前にへりくだり、誠実に生きていたのです。

(2) 正しい者は悪者に嫌われる

正しい者は誰からでも好かれる、という世の中であるならば、どんなに良いでしょうか。しかし、現実とは違います。聖書は告げます、「行ないの正しい人は悪者に忌み嫌われる」(箴言29:27、新改訳)。その通りに、輝かしい戦果を上げる青年ダビデはサウル王から槍を投げ付けられてしまいます(サムエル上19:10)。使徒パウロは、「この男は疫病のような人間だ」と訴えられます(使徒24:5)。そして、ダニエルは、ライオンの餌食にされてしまうのです。

さて、神様はこれを見過ごしにされるのでしょうか。いいえ、違います。

(3) 信頼する者を見捨てたもうことのない神

ダレイオス王は、何とかダニエルを助ける方法はないかと、心を痛め悩みます。この王の姿は、大臣や総督たちの邪悪さを一層際立たせていま

す。なぜなら彼らは、恭しい態度を取りながらも、実際は自分たちの願いを達成させるための道具として王様さえも利用するからです。

さて、夜が明けて大逆転が起こります。

神はみ使いを送って、ライオンの口からダニエルを守り通されたのでした。大臣たちの企みは大失敗。代わりに洞窟に投げ入れられた彼らは、もはや出て来ることはありませんでした。

なぜ、彼らは失敗したのでしょうか。それは彼らが、ライオンの口を閉ざすことの出来るお方、燃え盛る炎の中でもご自分のしもべたちを守り通すことの出来るお方、まことの神がおられることを知らなかったからです。そう、信頼する者を見捨てたもうことのないまことの神、ご自分のしもべたちをあらゆる苦難から救い出すことの出来るまことの神がおられるのです。聖書はそれを繰り返し繰り返し、私たちに教えています。

ダビデは、どんなに追い回されてもサウルの手に渡されることはありませんでした(サムエル上23:14)。使徒パウロは、苦難の中で主に仕え、その働きを全うします(テモテニ4:7)。そしてダニエルは、この異教の地でなお活躍し、主の栄光を大いに現わす者となったのです。

ダレイオス王は諸国の民に書き送って告げました、「この王国全域において、すべての民はダニエルの神を恐れかしこまなければならない」。

(4) 結び

ダニエルは、なぜライオンの洞窟の前に立たされても落ちついていられたのでしょうか。それは、彼が神の前にも王の前にも背いたことが無く、神に信頼したからです。心にやましきのない人は何と幸いなことでしょう。

私たちは、ダニエルとは違って汚点も怠慢もある者です。しかし、主イエスの十字架のゆえに赦され、神の子とされ、恐れなくみ前に立つ恵みを得ています。恐れずに、主に信頼して進みましょう(ヘブライ13:5~6)。(小野田雄二)

ぬことを恐れて、神さまを礼拝することを止めたでしょうか。いいえ。「ダニエルは王が禁令に署名したことを知っていたが、家に帰るといつものとおり二階の部屋に上がり、エルサレムに向かって開かれた窓際にひざまずき、日に三度の祈りと賛美を自分の神にささげた」(6:11) のです。ダニエルも、死の恐怖はあったでしょう。しかし、ダニエルは、たとえ王様の命令であろうが、殺される命令であったとしても、人の目の色を気にして神さまを礼拝したり、神さまを礼拝することを止めたりはしないのです。ダニエルは、主なる神さまが、ダニエルを罪から赦し、救い、永遠の生命に導いて下さることを知り、信じていたからこそ、人がどの様に思い、どの様な命令を下そうとも、救いをお与え下さり、永遠の生命をお与え下さる主なる神さまが求めておられること、つまり、神さまを信じて、神さまを礼拝し、神さまの御前に祈りを献げる行為を続けたのです。

ダレイオス王は、ダニエルを洞窟に投げ込むことを躊躇します。しかし、王は自分の命令を変更することが出来ず、ダニエルを獅子の洞窟に投げ込む決定を下します(6:17)。それと同時に王は

「お前がいつも拝んでいる神がお前を救ってくださるように」と祈ります(6:17)。

主なる神さまは、主を信じる者の苦しみを覚え、主なる神さまを信じる者の祈りを聞き入れて下さいます。そして、ダニエルは、獅子の洞窟に投げ入れられたにもかかわらず、主は天使を送り、獅子の口を閉ざすことにより、ダニエルを救い出して下さいました(6:23)。

主なる神さまは、生きて働き、今も、いつも、みんなと一緒にいて下さいます。そして、みんなが苦しんでいること、悲しんでいることなど、すべてご存じです。そして、みんなの祈りを聞いて下さる方です。だからこそ、他の人たちからいじめられるから、嫌われるからと言って、みんなは神さまを礼拝することを止めたり、偶像を拝んだりしなくても済むように、神さまに祈り続けましょう。そして、私たちの罪を赦し、救い、永遠の生命に導いて下さる唯一の主なる神さまを、どの様な時でも礼拝して、どの様な時でも祈り、どの様な時でも信じ続けることが出来るように、一緒に祈り続けましょう。(辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句]

ダニエル書6章28節

この神は救い主、助け主。
天にも地にも、不思議な御業を行い
ダニエルを獅子の力から救われた。



その身に何の害も受けていなかった。
神を信頼していたからである。

〈ねらい〉

ライオンの穴に落とされても、なお神様に従おうとする、勇気ある信仰を学ぶとともに、何があっても神様が守って下さることを信じよう。

〈展開例〉

ダニエルの国は大きなバビロンと戦争をして負けてしまいました。バビロンの王様はダニエルの国から色々な人を連れてきて、自分の国の仕事をさせました。ダニエルもその中に入っていました。でも、ダニエルはどんな時でも神様を信じていたので、毎日お祈りをしていました。ダニエルが神様の力をいただいていることがわかった王様は、ダニエルをととても大切に総理大臣にしました。

周りの人たちはダニエルが憎らしくて、何とかしてダニエルの悪いところを見つけようとしたが、見つかりません。「文句を言うなら、あいつの神様のことだけだよ。」皆がひそひそと相談をしていると突然、「いい考えがある。僕に任せなさい。」と一人が言いました。

そしてある日、王様に会いに行こうと言いました。「王様、あなたは世界中で一番偉い方です。王様よりすばらしい方はどこにもありません。これから30日の間王様以外の物を拜んではいけないという法律を作りましょう。」王様はうれしく

なっていました。「わたしでない物を拜んだら、ライオンの洞穴に入るのだ。」

この知らせは国中に出されました。ダニエルもこの知らせを聞きました。でも、いつものように神様にお祈りをしています。それを見て「そんなやつはライオンの穴行きだ。ダニエルを捕らえましょう。」と訴えたのです。王様は困りました。大切なダニエルを助けたいと思いましたが、何もできません。とうとうダニエルはライオンの穴に入れられることになりました。

王様はダニエルのことが心配で眠れません。夜が明けるとすぐに穴の所へ行ってみました。「ダニエル、神様はお前を守って下さったか?」と呼ぶと、「私は元気です。神様はライオンをおどなくさせてくださいました。」と答えが返ってきました。王様は喜んでダニエルを穴から出すと、代わりにダニエルの悪口を言った人たちが穴に放り込みました。するとライオンはその人たちを食べてしまいました。王様はダニエルの神様が本当の神様だということがわかりました。

〈おいのり〉

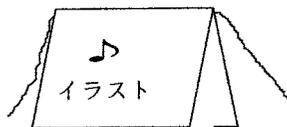
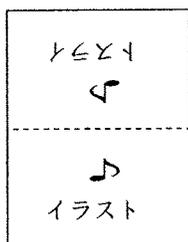
どんな時でも真の神様を信じて従うことができますように。神様はいつも守って下さることを学びました。どうかそのような信仰を与えて下さい。

〈やってみよう〉

お話カードで遊ぼう

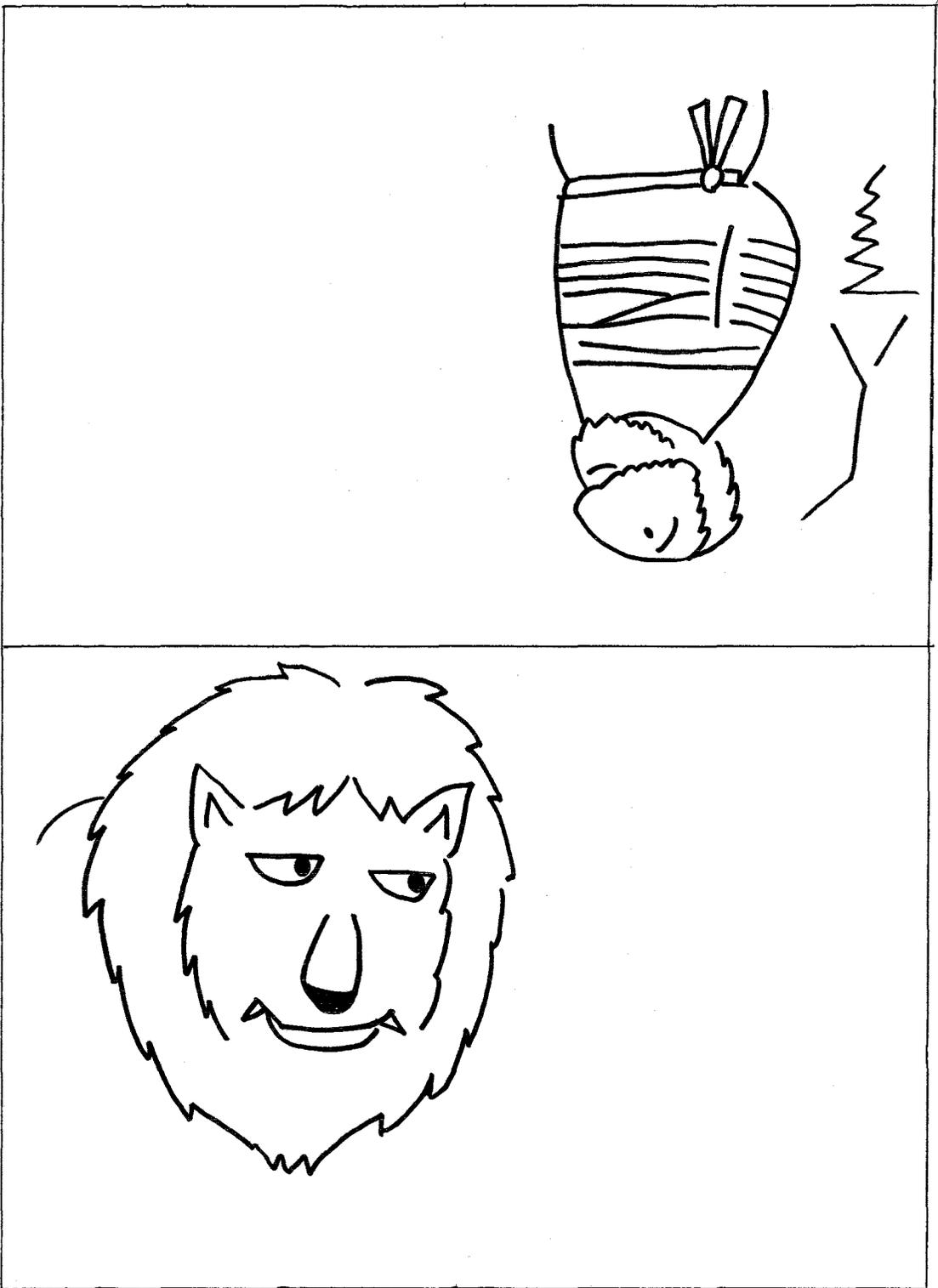
【準備する物】

次ページのイラストのコピー、B5かA4サイズの厚紙1枚、30cmほどの紐1本、のり、テープ



厚紙にイラストを貼り、内側に紐を貼り付けます。

紐の両端を手で持って、カードを回転させます。二つのイラストがフラッシュして交互に現れます。



〈ねらい〉

ダニエルは彼に対して嫉妬や妬みのある者たちに罾にかけられました。その罾を知らながらも彼は神様に対する信仰を守り通しました。その姿は信仰に基づいてしっかりと立ち、雄々しく強く生きている堂々とした態度でした。神様は困難を乗り越え御名を呼び求める者を守ってくださいます。そして、それを見た王様は神様を信じるようになったのです。神様を信じる者を通して神様の計り知れない御業を覚えましょう。

〈展開例〉

1. ダニエルとはどんな人でしょうか。

⇒優れた霊が宿っていて、他の大臣や総督よりも優秀だったので、王様はダニエルに王国全体を治めさせたかった。仕事（政務）に忠実で何の汚点も怠慢もなかった。神様に日に三度のお祈りと讃美をささげていた。

2. 大臣や総督はなぜダニエルを陥れようとしたのですか。

⇒ユダヤ人の捕囚のくせに、自分たちよりも王様の信頼が厚く、王様がダニエルに王国全体を治めさせようとしたことに嫉妬したから。

3. グレイオス王様が出した禁令を知っていたにもかかわらず、ダニエルはいつもと変わらず神様に祈りと讃美をささげました。その結果どうなりましたか。

⇒ライオンの洞窟に投げ込まれた。

4. ダニエルは王様が禁令に署名をしたことを知っていましたが、それでも自分の神様への祈りと讃美をやめませんでした。その結果どうなるかということもわかっていました。どうしてそこまで出来たと思いますか。

⇒神様が必ず自分を守って下さると信じていたから。

5. グレイオス王様はダニエルがライオンの洞窟に投げ入れられた後、どうしましたか。

⇒その夜は食事もせず側女も近寄らせず、眠れずに過ごし、夜が明けるとすぐにライオンの洞窟に行き、ダニエルが無事かどうかを確かめた。

6. ライオンの洞窟に投げ込まれたダニエルと、ダニエルを陥れようとした人達はどうなりましたか。

⇒ダニエルは神様が天使を送ってライオンの口を閉ざし、守ってくださったので無事だった。しかし、ダニエルを陥れようとした人達は、ダニエルに嫉妬し王様を利用して罾にかけたため、王様の怒りに触れ、妻子までも一緒にライオンの洞窟に投げ込まれ、かみ殺されてしまった。

ダニエルは毎日神様に祈りと讃美をささげていました。追い詰められて苦しい時も神様に祈り続けました。王様の命令に従うのではなく神様によりすがり祈り続けたのです。神様はライオンをも従わせることができますのです。しかし、王様はダニエルをライオンから助けることはできませんでした。王様に取り入って王様の権威を利用してダニエルを陥れようとした人達は、結果的に王様に滅ぼされてしまいました。今回のことでダニエルの信じる神様が本当の神であることをグレイオス王様は信じました。そればかりか、全地に住む人々にまことの神様の存在を知らせたのです。これはすばらしいことです。

〈おいのり〉

天の父なる神様、いやなことやつらいことがあっても神様がいつもわたしたちを守り励ましてくださっていますことを感謝します。神様によるこばれる子供として光の中を歩むことができるようにおみちびきください。

〈ねらい〉

たとえ人から理不尽なことをされても、神さまに信頼し従い続けることを学ぶ。

〈聖書の言葉〉

今回は長いですが、よく知られた話です。がんばって聖書を読み通すことを目標として、言葉の説明に時間をかけてもいいでしょう。

獅子、損失、傑出、政務、陥れる、口実、汚点、怠慢、○言いがかり、とこしえ、生き永らえる、○勅令、○禁令、署名、廃止、発布、廃棄、○捕囚、心を砕く、処置、食を断つ、側女、明けるやいなや、無実、恐れかしこむ、治世

〈展開例〉

①8節の「向こう三十日間、王様を差し置いて他の人間や神に願ひ事をする者は、だれであれ獅子の洞窟に投げ込まれる」という禁令は、誰が何のために作ったものですか（5～6節）。

→5節には大臣や総督たちがダニエルを陥れる口実を探していたとあります。ダニエルは共に働いていた大臣や各地でその地方を治めていた総督たちに陥れられようとしていたのです。彼らは、ダニエルに何も汚点や怠慢を見出せず、彼の神信仰に言いがかりをつけるしかないと考えました。そのために王の権力を利用して作ったのがこの法律でした。

②彼らがそんなことをしたのは、ダニエルに対するどういう気持ちからですか（3～4節を読んでみよう）。

→一言で言えばねたみの気持ちでしょう。ダニエルは外国人にも関わらず、その傑出した働きによって王に認められ、大臣の一人になったばかりか王国全体の政治を任せられようとしていました。そのような目立つ人物に対してはねたみの気持ちから悪意が向けられやすいのです。特に、彼が外国人であるという異質性から、その

気持ちはまさに現代のいじめ問題に近い様相を呈しています。いじめの問題は単純ではありませんが、このような異質な存在に対する攻撃という面があります。このような場合、本人には理解できないような攻撃にさらされることになり、全く理不尽な思いをすることになります。日本におけるクリスチャンも、子どもも含めてそのような危険にさらされていると言えます。

③ダニエルは、その禁令が出たのを知ってどうしましたか（11節）。

→ダニエルは自分にとって全く不利な禁令が出されていたことを知りつつ、普段行ってきたお祈りを変えませんでした。これは、王に反抗してデモンストレーションをしたわけではなく、むしろ自分の行動に後悔めたいところを感じず隠そうとしなかったということです。そして、その行動の根拠が神さまへの信頼にあったということが重要です。単に聞き直して法律違反を堂々とやったという理解にならないようにしなければなりません。このことが、周りの気持ちを逆なでするだろうということも分かっていたと思われます。彼はその点で良い意味の頑固だったわけです。

④獅子がダニエルを食べなかったのは、どうしてですか（23、25節）。

→ダニエルが自分の運命を神さまに委ねて従ったことに対して、神さまが天使を送って獅子から守ってくださったのです。獅子が十分獰猛であったことは、対比的に描かれる敵たちの最期（25節）で明らかにわかります。この部分は教師自身の経験と信仰で補いたいところです。神さまの守りというのは、ダニエルのようにその時は全く理不尽と思われるような現実の中で、神さまに委ねて精一杯忠実にまた誠実に歩む中で必ずもたらされるものだということです。

〈ねらい〉

どんな時でもまことの神様だけを礼拝する信仰を確かにする。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジくださり、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいばと思います。

Q. ダレイオス王が出した禁令とは何でしたか？

→「向こう三十日間、王様を差し置いて他の人間や神に願い事をする者は、だれであれ獅子の洞窟に投げ込まれる」(8節)。

Q. この命令を知ったダニエルの反応はどのようなでしたか？

→いつもと何も変わらず神様に礼拝し、祈る習慣を続けた(11節)。

Q. ダニエルはいつも通り「開かれた窓際」(11節)で祈りをささげたと書かれています。ばれたら殺されてしまうのに、たった三十日、中止したり、見つからないように行わなかったのは何故でしょうか？

→「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません。」(使徒5:29)と確信していたからであろう。中止することも、ひそかに礼拝し、祈ることも、人を恐れることであった。それでダニエルは公然と神様に祈りをささげ続け

たのである。そして彼は神様が獅子の洞窟からも救い出してくださいと「神を信頼していたからである。」(24節)。

Q. 彼を陥れようとした者達に見つけられたダニエルはどうなりましたか？神様は彼をどうされましたか？

→ダニエルは獅子の洞窟に投げ込まれた。しかし神様は「天使を送って獅子の口を閉ざしてください、なんの危害も受け」なかった(23節)。

Q. 神様がダニエルを救い出されたことから、神様はどのようなお方だということが分かりますか？

→唯一の真の神様は御自分を礼拝する者と共におられ、生きて働かれて救われるということ。

Q. 私達の住んでいる日本は信教の自由が認められています、これからの時代、まことの神様を礼拝することを禁じたり、神様以外の人間や何かを礼拝することを強要されたらどうしますか？どうしたらダニエルのように神様を礼拝する習慣を変えずにいられるのでしょうか？そしてそんな不自由なことにならないように私達にできることはないでしょうか？考えてみましょう。

※自由に話し合っていたら、どうなったとしても神様が必ず守ってくださいと信頼する思いに導くと共に、神様が信じる自由を少しでも長く保ってくださいるように、祈ることにならなければならないと思います。

4. お祈り

神様への信頼が増しますように。

神様を信じる自由が守られるように。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

テキスト ネヘミヤ記2章

ネヘミヤ記は、捕囚期からエルサレムへの帰還期への移行期に書かれた書物です。すでにベルシャ王ダレイオスの時代には神殿本体は完成されていましたが（エズラ6：14）、未だ町や城壁は破壊されたままであり、無残な様相を呈していました。時はベルシャ王「アルタクセルクセス」の時代（ネヘミヤ2：1）、主はベルシャの首都スサにいたネヘミヤに働きかけました。

ネヘミヤは王の「献酌官」（同1：11）として王にお仕えしていました。彼は異教の地のただ中でも、「主に立てられた者」（ローマ13：1）に忠実にお仕えしていました。彼は王からとても厚い信頼を寄せられていました。

この信頼を背景に、彼は意を決して王に、自分の故郷の町の「再建」を進言しました（5節）。目を留めたいことはこの進言の直前、王が「何を望んでいるのか」と問うた時、彼がとっさに「天にいます神に祈った」（4節）とするされていることです。ここに彼の力の源が明らかにされています。彼は、日々の暮らしの中で、主との熱心で豊かな交わりを欠かすことがなかったのです。

王はこの再建の進言に「好意的」であった（6節）とされています。ここには、時に神は、人間の「心」の中にも働きかけ、人間の「心」をも作り変える力をお持ちであることがしめされていると思います。神は全能者にいまし、おできないことは一つもないのです。王は彼に、エルサレムへ到着するまでの通行許可証「王の書状」を手渡し、城壁再建のための木材を与えられました。

これをいただきネヘミヤは、「神の御手がわたしを守って下さった」（8節）と告白しています。主は、信じる者の暮らしのすべてをその大きな「御手」の中においてくださいます。私たちの暮らしは主の大きな「御手」の中に守られ、支えられているのです。いつでも、この手が見える人は、

何と幸いなことでしょう。このあと、ネヘミヤは山を越え、谷を越えて帰還の途に向かいました。そこには「王の書状」が共にありました。しかし、これは王の守りではありませんでした。それは主の守りでした。彼は、道々、主の「御手」に守られていたのです。

ネヘミヤはエルサレムに着き、再建反対者たち（10節）を刺激しないように、夜遅く、人目につかないように、谷の門から糞の門をめぐる「城壁を調べ」ました（13節）。ここには、私たちがあらゆる時に「思慮」深く、「知恵」深く対応することの徳がしるされています。信仰者は絶えず、人々に「建徳」的に対応することが求められているのです（コリント一8：1）。

ところが、反対者たちはこれに気づき、城壁再建を阻止しようと攻勢に転じました。しかしながら、この阻止活動は実を結びませんでした。再建を阻止することはできなかったのです。なぜでしょうか？この世的に見ると、それはこの事業の背後にベルシャ王の認可があったからです。しかし、現実には違っていたのです。現実にはこの事業の背後には神の認可があったからなのです。この事業はすべて神の事業だったのです。「神が共にいます」事業……、人はこれを決して止めることはできないのです。すべて神ご自身の全能のみ力によって進められていたのです。「神がわたしたちの味方ならば、だれがわたしたちに敵対できるでしょうか。」（ローマ8：31）

「天にいます神御自ら、わたしたちにこの工事を成功させてくださる。」（20節）わたしたちの行なう信仰的事业は、自らの手の事業ではなく、神の御手の事業です。神はその事業を省み、必ずその事業を守り支えてくださるのです。「主は、お前に向かって堡壘を築き、壘を積み、大楯を立てる。」（エゼキエル26：8）（山村貴司）

テキスト ネヘミヤ記2章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問76

〔単元のねらい〕

テキストはネヘミヤ記2章であるが、説教展開例は1章も含めて取り扱うこととした（話のつながりを考慮して）。ネヘミヤ記の全体を読んで印象深いことは、この書物が最初から最後までネヘミヤの祈りにつらぬかれていることである。それはネヘミヤが、エルサレムの城壁再建という難事業を祈りによってなしとげたことを意味している。祈りには力がある。神はわたしたちの祈りにこたえてくださる。そのことを今一度確かめたい。キリスト者とはすべてのわざを祈ることから始めるのだということをも、同様に確かめておきたい。

「祈りによって」

今週と来週の二回は、ネヘミヤさんとイスラエルの人々のことを学びましょう。ネヘミヤさんは神さまの都エルサレムの城壁の再建工事というとても大きな仕事をなしとげた人です。もうすでに、神さまがイスラエルを、ご自身への背きの罪によって滅ぼしたもうたことは学びましたね。神さまは、バビロンという敵国の手をかりて南ユダの国を滅ぼし、その都エルサレムを破壊して廃墟とされました。神さまは正義のお方ですから、愛する民イスラエルといえども、その罪をおゆるしにはなりません。ご自分のみ手とみ心を痛めて、あえてイスラエルに罰をお与えになりました。

けれども神さまはあわれみ深いお方です。刑罰の 때가満ちるとイスラエルをゆるし、敵の国に捕虜となっていた人々をも祖国に帰ることをおゆるしになりました。祖国に帰って、新しい歩みをもう一度始めよと仰せになったのです。そのことを神さまは、バビロンを滅ぼしたペルシャという国の王の手を通してなされたのです。

捕囚の地からイスラエルに帰ってきた人々の仕事は、神さまの都エルサレムを、とくにその城壁を建て直すことから始まりました。それは町を建て直すことにとどまりませんでした。イスラエルの人々の信仰をもう一度たてなおすことでもあったのです。廃墟となっていた都を、満足な材料も

なく、建築のプロもない中で建て直していくことは、とほうもない難事業のように思えます。けれども信仰によってなすなら、何もできないことはありません。神さまは全能のお方だからです。イスラエルが神さまの民としてもう一度生きていくためには、そのことを知る必要がありました。神さまは城壁再建のわざを通して、神さまの大いなる力に頼るべきことを、イスラエルの人々に身をもって教え示してくださったのです。

さて、イスラエルの人々が祖国に帰ってきたとき、ネヘミヤさんはまだペルシャにいて、ペルシャの王に仕える家来でした。けれども、ネヘミヤさんは遠く離れた祖国イスラエルと、その都エルサレムのことが今どうなっているのか気がかりでしかたがありませんでした。たまたまペルシャにやってきたイスラエル人たちがいましたので、ネヘミヤさんは今エルサレムはどうなっているのかと尋ねました。すると、返ってきたのは悪い知らせでした。エルサレムはまだ廃墟のままです、城壁も破壊されたままです。

この知らせを聞いたネヘミヤさんは、何日かほただ座り込んで泣くばかりでした。でも、そのうちにネヘミヤさんは祈りはじめました。その祈りの中でイスラエルがどれほど大きな罪をおかしたのかをあらためて深く示されて、ネヘミヤさんは

神さまにおわびをしました。けれども、同時に神さまはあわれみに富むお方であって、信じる者の祈りにはかならずこたえてくださるお方であることを、祈りの中で思い起こしたのです。そのことがネヘミヤさんを元気にしました。座り込んで泣きただけだったネヘミヤさんは、立ち上がって祖国に帰り、エルサレムの城壁を再建する仕事にとりかかることを決心したのです。

そのためには、ペルシャの王に帰国のゆるしを得なければなりません。さまざまな面で王の助けもかりなければ、この仕事は実現しません。でも、王がゆるしてくれるかどうかはわかりません。王の返事にイスラエルの国の未来がかかっています。ネヘミヤさんは「天にいます神に祈って」(2章4節)、王にこの願いをうちあげました。息詰

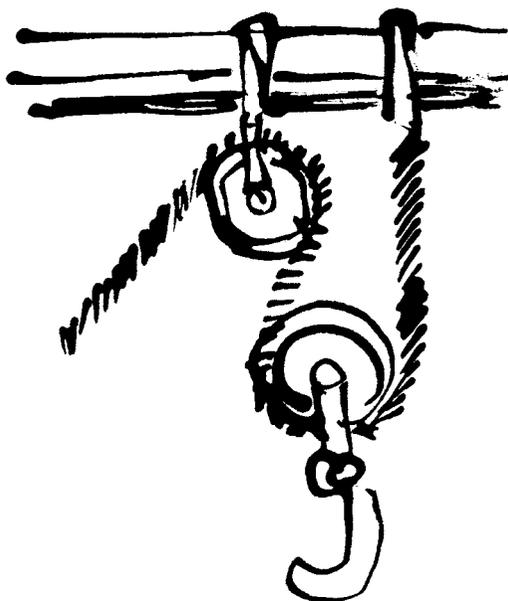
まる瞬間です。返事はどうであったのでしょうか—「神の御手がわたしを守ってくださったので、王はわたしの願いをかなえてくれた」(2章8節)

これまでに神さまを信じる多くの人々が、神さまのために偉大な仕事をなしとげてきました。それらの仕事がどのようにして始められたのかを知っていますか。祈りによって始められたのです。ネヘミヤさんも祈ることから城壁再建というとても難しい仕事を始めました。そして、この仕事は祈りによって最後まで守られたのです。

祈りには力があります。祈りとは神さまの力をいただくことです。神さまはわたしたちの祈りをも聞きとどけてくださるお方です。(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] マルコによる福音書 9章23節

イエスは言われた。「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる。」



わたしたちにこの工事を成功させてくださる。

〈ねらい〉

主が人の心に志を起こし、知恵と力を与えられることを知ろう。

〈展開例〉

ネヘミヤさんは、ペルシャの王様アルタクセルクセスに飲み物をおつぎする仕事をしていました。いつも王様のお食事を楽しくするように明るい顔をしているように努めていました。

しかし、ある朝、王様が「ネヘミヤ、何か心配事があるのか。暗い顔をして。」とおっしゃいました。ネヘミヤさんは申し訳なく思いながら、王様に答えました。「わたしの先祖のお墓のあるユダの町が、荒れ果てて、城壁が火で焼かれていると知ったからです。」それを聞いて王様は「何を望んでいるのか。」と言われました。ネヘミヤさんは、天の神様に祈ってから、「王様にお差し支えがなければ、わたしをユダに、先祖のお墓のある町にお遣わし下さい。町を再建したいのでございます。」と言いました。

王様は傍らに座っている王妃と共に、「旅にはどれほどの時を要するのか。いつ帰れるのか。」と尋ねられました。ネヘミヤさんは、王様の好意を感じ、どれほどの期間が必要かを話しました。さらに、「もしもお心にかないますならば、わたしがユダに安全に行くことができるように手紙を下さい。それに、木材をわたしにくださるようにも手紙に書いてください。木材は、都の城門と、城壁のために使います。それと、わたしが住む家を作るのにも使います。」神様の御手が守ってくださったので、王様はネヘミヤさんの願いを叶えてくださいました。

〈やってみよう〉**折り紙できつねをつくらう（城壁を登る狐はどこにいるかな？）**

【用意する物】 折り紙

【作り方】 次ページをご覧ください。

エルサレムに着いて三日目、ネヘミヤさんは夜中にこっそり起きました。そして、わずかな人たちと一緒に出かけて、エルサレムの城壁を調べました。しかし、エルサレムで何をすべきかについて神様がネヘミヤさんの心に示されたことは、誰にも知らせませんでした。

ネヘミヤさんが乗った動物の他には、一頭の動物も連れて行きませんでした。城壁は壊され、城門は焼け落ちていたので、ネヘミヤさんの乗っている動物が通る所もないくらいでした。

ネヘミヤさんは夜のうちに帰ってきましたが、そのことは誰にも知らせませんでした。

やがてネヘミヤさんは、みんなに言いました。「エルサレムの城壁を建て直そう。」

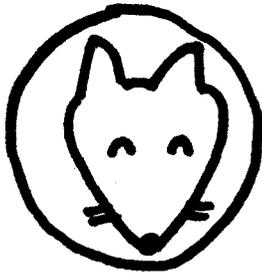
神様の御手が恵み深くネヘミヤさんを守ってくださったので、王様がネヘミヤさんにおっしゃったことを言うと、みんなは、「早速、建築に取りかかろう。」と答えて、みんなで力を合わせて一生懸命働きました。

アンモン人たちは、その様子を見て、「焼け石を拾って作っても、狐が一匹登っただけで崩れてしまうだろう。」とあざ笑いました。

しかし、ネヘミヤさんたちは、「天にいます神様御自らが、わたしたちのこの工事を成功させて下さいます。」と信じていたので、昼は片手に投げやりをもち、夜は警備に当たり、心を合わせて祈りつつ働き、52日で完成させました。

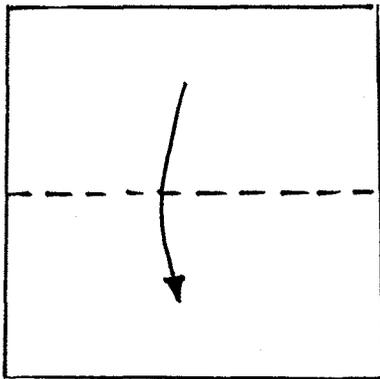
〈おいのり〉

わたしたちの罪を許し、喜びに導いてくださることを感謝します。

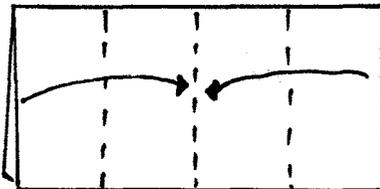


きつね

☆ あそべるおりがみ ☆

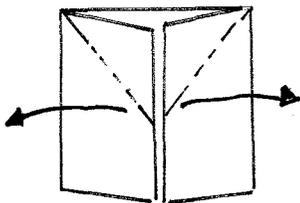


2 はんぶんにおる



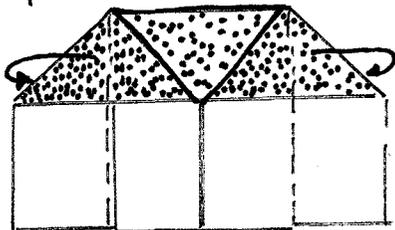
3 まん中にあわせておる

3



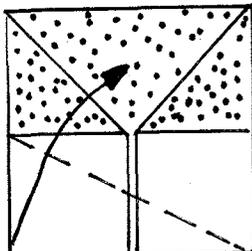
左右にひらいて
上のふくらをフボす

4



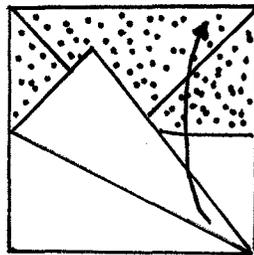
左右をむこうがわにおる

5



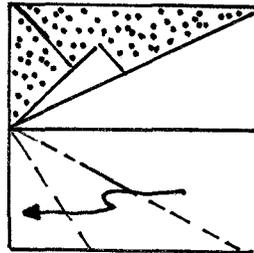
てまえのがみをおり上げる

6

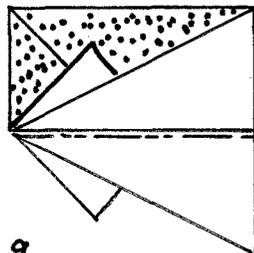


かさねており上げる
うらがわもあはじょうに
おり上げる

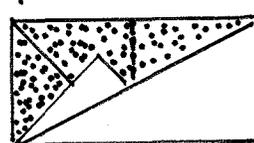
7



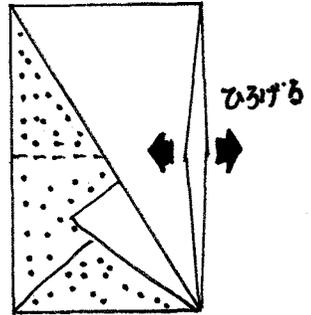
8



9

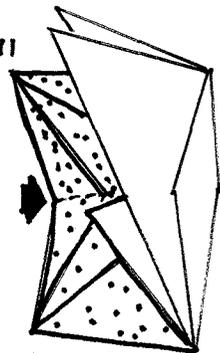


10



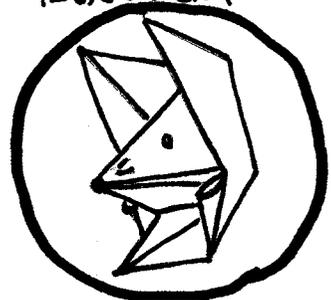
ひろげる

11



ふくらました
ヒコりに
ゆびを入れて
おたろをつくる

12 めとひげをかく



できあがり☆

〈ねらい〉

ネヘミヤの姿から、クリスチャンが神の事業に携わるときの、神さまの召命に対する確信の大切さを学ぶ。そしてこの確信は祈りから来るのである。神さまは、ネヘミヤの祈りを通して、王から力を引き出してくださった。それにより、ネヘミヤは「城壁再建」を成し遂げることができた。

〈展開例〉

昔イスラエルの国は敵にやっつけられ、エルサレムの町も壊されてしまいました。ネヘミヤさんはそんな時代のイスラエルの人で、神さまを心から信じていました。ネヘミヤさんはベルシャの王さまに使え、王さまから信頼されていました。

昔の大きな町は、「城壁」と呼ばれる大きな壁を町の周りに作って、敵から町を守っていました。エルサレムにも立派な城壁があったのですが、敵に壊されてしまいました。ネヘミヤさんは、エルサレムの城壁が壊され、エルサレムに住むイスラエルの人たちがかわいそうな生活をしていることを聞きました。ネヘミヤさんはまず神さまに熱心にお祈りして、それから、王さまに「わたしをエルサレムに送って、城壁を建て直させてください」とお願いしました。王さまはその願いを許してくれました。ネヘミヤさんは、「神の御手がわたしを守ってくださったので、王はわたしの願いをかなえてくれた」(2:8)と聖書に書いています。そして、王さまは「ネヘミヤがエルサレムに帰ることを許可する。誰も邪魔をしてはいけない。そして、町を建て直すためにみんな協力するように」というお手紙を書き、ネヘミヤさんに渡しました。

王さまからの手紙を持っていましたから、誰も

邪魔はできませんでした。そして、ネヘミヤさんは無事にエルサレムに着きました。これは王さまのおかげでしょうか。いいえ違います。本当は神さまが守ってくださったからなのです。エルサレムには城壁を建て直すことを邪魔しようとした人々もいました。しかし、その邪魔はうまくいきませんでした。なぜなら、神さまが城壁を建て直すことを許してくださったので、誰も邪魔することができなかつたのです。

神さまを信じる人が神さまのご用をするとき、お祈りをしてから始めます。人間の力でそのお仕事をするではありません。神さまがその人を使ってご用をされるのですから、何も怖がることはありません。心配することはありません。お祈りすることによって、神さまは聞いてくださり、私たちに力を与えて下さるのです。

ネヘミヤさんは「私の神が、私の心を動かして」(2:12、新改訳) くださったから城壁を建て直すのだ、そして「この良い企て(仕事)」(2:18)は神さまから与えられたものだ、と強く信じていました。そのために武器をもって反対する人々に対しても恐れることなく、仕事をやり遂げました。そして、52日間というすごいスピードで城壁を完成させることができたのです。

〈おいのり〉

神さま、私たちは小さくて弱いものです。神さまの力とお守りがないと、神さまのご用をすることができませんから、私たちを助けてください。そのためにいつもお祈りできるようにしてください。



☆少しでも短くした方が理解しやすいと思われるので、2章1～18節に絞ります。

〈ねらい〉

神さまは御心に適った働きをする者を強め、障害となるものを取り除いてくださることを学ぶ。

〈聖書の言葉〉

ニサン、恐縮、荒廢、○城門（日本と違い、「城」が町を囲むものであって、城門や城壁の荒廢は町の荒廢を意味することに注意）、僕、心に適う、差し支えがない、遣わす、再建、派遣、好意的、書状、梁、○城壁、将校、騎兵、携わる、あえぐ、企て、奮い立つ

〈展開例〉

①ネヘミヤは何を悩んで暗い表情をしていたのですか（3節）。

→ベルシャの献酌官として王に仕えていたネヘミヤは、兄弟らからエルサレムが荒廢し、城門が崩れたままであることを知らされ悲しんでいました。まずこの話の前提となるこの気持ちがわかりにくいと思います。それは、日本では敵に囲まれるという状況が基本的にないこと、したがって城壁によって安全を守るという感覚も歴史もないからです。しかし、多くの敵に囲まれるユダヤの民がそのような無防備な状態にあるということは、捕囚によって分断され、無力でみじめな状態であるということを端的に表していました。ネヘミヤは異国の中であって、同胞の境遇を自分のこととして悲しみます。

②王と王妃はネヘミヤのために何をしてくれましたか（7～8節）。

→王たちはネヘミヤがユダに帰ることを許可したばかりか、その途中の長官たちが通過を保障する書状を作ってくれました。また、城門や城壁、そしてネヘミヤの滞在する家のための木材を提供する書状も用意してくれました。終始一貫し

てネヘミヤの願いに好意的に応じてくれたのです。これもユダヤの民のために心を砕くネヘミヤの言動を神さまが祝福し、彼の祈りに答えられた（4節）のだと言えます。

③ネヘミヤがエルサレムに着いて調べてみると、町はどんな様子でしたか（13～14節）。

→ネヘミヤは慎重を期して夜中にこっそりと町の様子を調べました。兄弟らが語ったとおり城壁は破壊され、城門は焼け落ちていました。これは人々が安心して暮らすことができず不安定でみじめな生活を強いられていることを意味します。これは信仰的に見れば神さまから離れた刑罰の中にある悲惨な姿です。ネヘミヤはこの状態から民を救うべく町を建て直したいと強く心を動かされたことでしょう。

④ネヘミヤがユダの人々に呼びかけると、人々はどうかどう応じてくれましたか（18節）。

→人々はネヘミヤの呼びかけを「良い企て」と認め、建築にとりかかる意志を表し奮い立ちました。ここでもネヘミヤには「神の御手が守ってくださいました」（18節）との意識があります。神さまは、神の民の生活を守り、その信仰を強める企てを祝福して守ってくださいます。それは、そのことが私たちの生きる目的である神の栄光を表すことに他ならないからです（ウェストミンスター大教理問答第1問）。神さまの祝福がある時、異教の王の心は動かされ、人々の心も奮い立ちます。敵対者はいますが、彼らの行いは抑えられます。このような中で一見困難な業と思える城壁再建が実現していきます。

〈ヒント〉

城壁再建の重要性を語るためには社会的背景や文化的背景についてふれなければなりません、一方的な説明にならないよう子どもたちとのやりとりを大切にしましょう。

〈ねらい〉

成し遂げる力を賜る主に、祈り求める。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの实情に合わせてアレンジしてください、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. 今日の箇所に出てくるネヘミヤはどんな身分の人だったのでしょうか？ 1:11を見て答えて下さい。

→ペルシャ王に仕える献酌官であった。

Q. ネヘミヤの捧げた祈りが一章に書かれていますが、彼がこのように祈ったのはどういう知らせを受けたからだと言われているか？ (参照、1:2~4)

→エルサレムの城壁は壊れたままになっている。

Q. この祈りの最後でネヘミヤは「わたしの願い」(1:11)と言っています。ネヘミヤの心にある願いが与えられたことが分かります。それは何でしたか？ (参照、5節)

→エルサレムの町と城壁の再建事業。

Q. この願いはネヘミヤの勝手な思いでしたか？ そうでないなら、ネヘミヤは何故安全な暮らしを捨てる願いを抱いたのでしょうか？ 一体彼が祈った根拠は何でしたか？ (参照、1:8、9)

→彼の勝手な思いではなかった。ネヘミヤがペルシャでの安全な暮らしを捨てて危険なチャレンジをなしたいと願ったのは、神様とその民に対する聖なる熱心からであった。そしてネヘミヤの祈りは、神様が示してくださった御心に基づいて祈り求める、御心と一致する祈りであった。これこそ聖書的な祈りである。

Q. ネヘミヤに与えられた願いが実現するためには、ペルシャ王の許しが必要でした。一歩間違えて王の不興を買う結果となれば、彼自身の生命が危機にさらされるギリギリの緊迫した事態に、ネヘミヤがとった行動は何だったのでしょうか？

→4節、「わたしは天にいます神に祈って」という瞬間的な祈り、神様への全面的依存。

Q. 「神の御手がわたしを守ってくださったので、王はわたしの願いをかなえてくれた。」と主に感謝した、ネヘミヤの城壁再建事業にける確信は何でしたか？ (参照、20節)

→「天にいます神御自ら、わたしたちにこの工事を完成させてくださる。その僕であるわたしたちは立ち上がって町を再建する。」(20節)。

Q. ネヘミヤの祈りとそれに対する神様の応えから、私達はどのような確信を学びますか？

→神様とその民のために熱意をもって仕える者には、天にいます神様がその祈りに応えて成し遂げる力をお与えくださること。

4. お祈り

神様に仕える良き志と、成し遂げる力をお与えくださるよう。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

テキスト ネヘミヤ記8章1～12節

時はベルシャ王「アルタクセルクセス」の時代（ネヘミヤ2：1）、主はネヘミヤを通して王の「心」に働かれ、王にエルサレムの町と城壁を再建する志を与えられました。神は、時に人間の「心」の中にも働きかけ、人間の「心」をも作り変えることができにされます（ネヘミヤ2章聖書研究参照）。

再建反対者たちの激しい反対に遭いながらも、彼らは「52日」かかって（同6：12）無事、城壁再建を成し遂げることができました。これは、この事業が「神が共にいます」事業であり、主の御手の事業だったからでした。その事業が主ご自身の全能のみ力によって進められているかぎり、人はその事業を阻止することはできないのです（同2：20）。

再建後「民は皆、水の門（東南の門。ギホンの泉のそば）の前にある広場」に集まりました。時は「第七の月の一日」（同8：2）。それは旧暦の新年、その一日でした。民たちは、新年の一番大切な時を、まず神様のために取り分け、神様を拝し、神様と親しく交わるために取り分けたのです。

この日（「書記官」祭司エズラ）は神の律法を会衆の前にもってきました（同8：2）。エズラはすでにアルタクセルクセス王の第七年（エズラ7：7）、すなわち13年前にエルサレムに帰還していました。エズラは城壁再建よりも、民たちに、何よりも日々律法を尊ぶことを教え、神ご自身と共に生活することを教え、また教えを宣べ伝えることを（エズラ7：10、25）教えたのではないかと思います。

エズラは、用意された「木の壇」（ネヘミヤ8：4）に登り、主のみ名を心からほめたたえました。すると民は皆、両手を上げて「アーメン、アーメン」と唱和したと記されています（同8：6）。ここには、彼らの純真で真実な神礼拝の姿が描かれてい

ます。彼らは真実に「霊とまことをもって」（ヨハネ4：24）主を礼拝し、真実に神を、自らの人生の「主」、「あるじ」として崇めたのです。

次いで、レビ人がその律法を民に「説明した」（同8：7）。そして、民はその中身を「理解した」（8：8）とされています。ここにはみ言葉の「説教者」の重要性が謳われています。主はご自身のみ旨を、今日、聖霊と「貧しい土の器」を通して、世の光として伝達なさるのです。主は貧しい私たちを用いて、宣教のわざを実現なさろうとしているのです。

「民は皆、律法の言葉を聞いて泣いていた。」（8：9）彼らは、過去の捕囚の「罪」、律法をないがしろにし、神から遠く離れて生きた罪（ルカ15：11、「放蕩息子」）を思い起こし、悔い改めました。私たちは悔い改めて、絶えずその人生で「蜜のように甘い」（詩編119：103）主のみ言葉を愛し、絶えず主と共に生きるものとなりたいたいと思います。

「主を喜び祝うことこそ、あなたがたの力の源である。」（同8：10）ウエストミンスター小教理問1は「人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです」と告白しています。神を喜ぶこととは「神を愛する」ことであり、そのことは「礼拝」で実現します。私たちは礼拝で主と完全に結合し、主と一つとされ、主を愛するものとされるのです。その時、主の溢れる恵みと命が私たちに満ち溢れます。そして、主ご自身の恵みと命、それがわたしたちの「力の源」なのです。

ただ、ここで神を喜ぶことには、「兄弟を愛すること」、兄弟どうしの交わりを喜ぶことが包括されています。聖書は食物のないものとはそれを「分かち合う」よう教えています（8：10、12）。神を喜ぶことの中には、兄弟を愛することも含まれているのです。（山村貴司）

テキスト ネヘミヤ記8章1～12節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問1

〔単元のねらい〕

この聖書箇所は、捕囚から帰還したイスラエルの新しい歴史が礼拝から始められたことを示している。神の民にとって主の日の礼拝こそがただひとつ必要なこと（ルカ10：42）であること、そして救いの神を喜び祝うことこそが生きる力の源であることは、ネヘミヤの時代のイスラエルにおいても、新約の教会においても変わりはないであろう。礼拝こそ人生の目的である。子どもたちとともに主を喜び、主の救いを祝いたい。わたしたちのために死んでよみがえりたもうたお方を、ともどもに仰ぎたい。帰還したイスラエルは城壁とともに神殿をも再建した。復活のイエス・キリストこそ、永遠に破壊されることのない真の神殿（ヨハネ2：21）であり、教会と私たちの命のいしずえであることをも覚えたい。

「神さまを喜ぶ」

エルサレムの城壁は完成しました。がれきの山から、城壁を築いていくのです。それがどれほど困難な仕事であったのかは、私たちにも想像できるのです。焼け石のようなれんがしかありません。ネヘミヤさんに導かれて仕事にたずさわった人々も、みな建築のしろうとでした。さらに、この仕事を完成させまいとする敵の妨害にも、しばしば悩まされたのです。時にはもうだめだと頭をかかえて、このとほうもない仕事を放り出したと思ったこともあったでしょう。

にもかかわらず、この仕事は完成しました。神さまがついてくださったからです。ネヘミヤさんが祈りをもって始めた仕事は、神さまへの感謝の祈りをもって終えられました。そして完成した城壁は神さまにささげられたのです。

城壁を完成させたイスラエルの人々は、まず何をしたと思いますか。いちばん大切なことをしたのです。それは礼拝です。神さまに背き続けている間、イスラエルの人々はこのいちばん大切なことをおろそかにしていました。神さまのみ声を聞くとはしませんでした。けれども捕囚のさばきを受け、ゆるされて祖国に帰り、神の都の城壁を建て直したイスラエルの民は、忘れ去っていたいちばん大切なことをふたたび始めたのです。

主の日に、民はみなひとつところに集まりました。そして、聖書が読まれました。聖書は神さまのみ言葉です。主の日の礼拝において、神さまはご自分の民たちにみ言葉をお語りくださいます。祭司エズラさんによる聖書の朗読は長い時間続きました。人々は起立したままみ言葉に耳をかたむけました。そして聖霊なる神さまが助けてくださったので、人々はみな神さまのみ言葉の語りかけを理解しました。

イスラエルの人々は、そのときどうしたでしょうか。みな泣いたのです。なぜでしょうか。それは、今まで自分たちが神さまに対してどれほど罪をかさねてきたのかということ、み言葉をとおして心に深く示されたからです。「ハイデルベルク信仰問答」という信仰問答は、人間は自分の罪深さ、みじめさを神さまのみ言葉を通して知るのだと語っています。ここでのイスラエルの人々も、自分たちの罪に泣いたのです。自分たちが神さまに愛され、神さまから数えきれないほどの恵みをいただいていたのに、その神さまの愛といつくしみとを裏切り続けてきたことを知らされたからです。神さまはイスラエルの罪を長く忍耐しておられました。そして、一日も早く悔い改めてご自分のふところに帰ってくるようと呼びかけ続けたのです。けれども最後に、あえてご自身のみ

手をもって愛する民を激しく打たれました。神さまは愛なるお方であると同時に義なるお方であるので、愛する民といえどもその罪をそのままにしておくことはおできにならなかったからです。それほどに神さまを悲しませていたことをイスラエルはさとり、そして涙を流したのです。

けれども、ネヘミヤさんとエズラさんはイスラエルの人々に向かって語りかけました。「今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である」(8章10節)

神さまはイスラエルの背きの罪をおさばきになりました。けれども神さまはイスラエルの罪をゆるすこともおできになるお方です。今イスラエルは、罪ゆるされて神さまのみ前に立っています。神さまを礼拝しています。罪のゆるしの恵みにあずかったことは、喜び祝うべきことです。これほどに大きな恵みはないのです。泣いている場合で

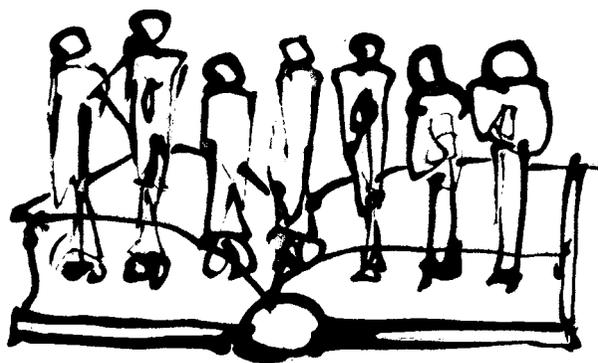
はないのです。そのことを理解したイスラエルは、涙をぬぐって祝宴を開き、神さまの恵みを喜び合いました。ここから新しいイスラエルの歩みが始められていきました。そして神さまを礼拝し、神さまの愛と恵みを喜び祝うことこそが、新しい歩みをうながす力の源となったのです。

主の日の礼拝は、イエスさまの十字架とよみがえりの記念です。イエスさまは十字架に死なれて、わたしたちの罪をすべてゆるしてくださいました。そして、わたしたちは今イエスさまとともに生きる祝福された命、罪にも死にもうちかつ命に生かされています。神さまはみ子イエスさまをとおして、これほどにすばらしい救いの恵みをくださいました。それゆえに、主の日の礼拝は祝いの場です。そして、ここでこそ私たちはイエスさまの命にあずかります。生きる力を得るのです。

(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] ネヘミヤ記 8章10節後半

主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。



主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。

〈ねらい〉

主の聖日に礼拝できることは、私たちの大きな力となり、喜びであることを知ろう。

〈展開例〉

みなさんはすごく困ったことがありますか？そんな時、どうしますか？

ネヘミヤさんは壊されてしまった神殿をイスラエルの人たちと建て直そうとしましたが、反対する人や、じゃまをする人がいて大変でした。

神様を信じている人が注意しなければいけないのは、悪魔の誘いです。ネヘミヤさんは、どんなに大変な時も神様を信じて感謝しました。イスラ

エルの人たちは、頑張って神殿を建てることができました。始めにしたことは礼拝です。みんなうれしくて泣きました。

ネヘミヤさんたちは、「心配しなくていいよ。神様を信じて喜んでいれば、力がいっぱいわいてきてうれしくなるよ。」と教えました。

神様は心から信じる人と共にいて下さいます。今私たちは絶対に壊れないイエス様の教会で礼拝できます。喜んで礼拝しましょう。

〈おいのり〉

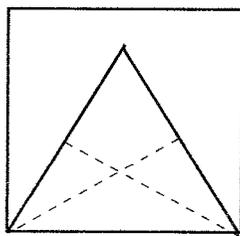
今日も御言葉を聞くことができ感謝します。いつも喜んで礼拝できるように導いて下さい。

〈やってみよう〉

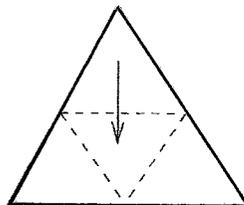
折り紙で「ダビデの星」をつくらう

【用意する物】 折り紙

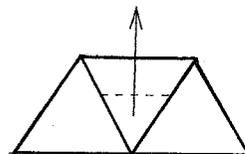
【作り方】



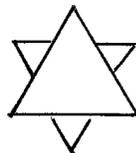
正三角形を作って切ります。



下辺の中心に向けて折ります。



中心を通って折り返します。
(他の2カ所も同じように)



最後の1カ所を差し込んでできあがりです。

イエスを信じる神の子は星のように輝くでしょう。

(フィリピ2:15)

〈ねらい〉

エルサレムに帰還して城壁を再築したイスラエルの民が、御言葉を聞いて主を喜び祝う新しい生活をスタートしたことを学び、私達も心から主を喜び祝うことができるよう祈りたい。

〈展開例〉

1. ネヘミヤの時代、エルサレムの城壁はどうして崩れていたのですか？

⇒イスラエルの民が神様を礼拝することを忘れた時、神様はバビロンがイスラエルを滅ぼし、イスラエルの民がバビロンに捕らわれて行くことをお許しになりました。城壁はこの時、崩されてしまったのです。バビロンがペルシャに滅ぼされた後も、城壁は崩れたままになっていました。

2. 城壁は、どのようにして建て直されたのですか？

⇒捕らわれの民の一人だったネヘミヤは、エルサレムに戻って城壁を建て直すことができるように祈りました。神様はこの祈りに応え、ペルシャの王様の心を動かし、ネヘミヤを応援するよう

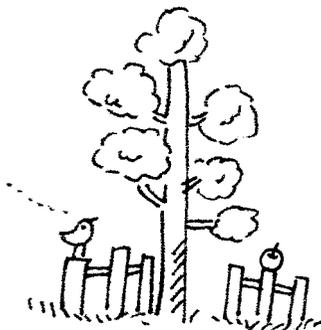
にしてくださいました。ネヘミヤが城壁を建て直し始めると、ユダヤに住んでいた外国人が妨害しようとしたことが、ネヘミヤは、妨害に備えながら工事を進め、52日間で城壁を建て直すことができました。

3. 城壁が完成した時、エルサレムに戻った民は何をしましたか？

⇒広場に集まって、エズラが読む神の御言葉を聞き、理解して、主を喜び祝いました。

〈祈り〉

神様、あなたは主を礼拝することを忘れたイスラエルを滅ぼされ、民が外国に捕らわれることをお許しになりました。けれども、民をいつまでも捕らわれたままには放っておかれず、再びエルサレムに戻り、神殿と城壁を建て直すことができるように導いてくださいました。エルサレムに戻った民は、主を喜び祝い、力づけられたことを教えてくださり感謝です。どうか、私達も御言葉を正しく理解して、心から神様を喜ぶことができるようにしてください。



〈ねらい〉

イスラエルの再スタートが礼拝によって始められたことから、私たちにとっても礼拝こそが人生を歩んでいく土台であることを学ぶ。

〈聖書の言葉〉

書記官、○モーセの律法の書、会衆、唱和、翻訳、総督

〈展開例〉

①エルサレムの城壁は52日かかって建て直されました(6章15節)。その後、イスラエルの民は広場に集まって何をしましたか(3節)。

→52日という期間は長いようですが、工事の規模や準備にかかる時間などを考えると相当の早さだったと言えるでしょう。ネヘミヤ自身ペルシャの王さまのもとに帰るといふ約束がありましたし、何よりも工事自体イスラエルの民にとって念願のことでありました。工事の完成後の今日の聖書箇所場面はとりわけ神さまの祝福を感じる一時だったことでしょう。そこでなされたことは、まず神さまへの礼拝でした。それは具体的にはモーセの律法の書(モーセ五書)の解き明かしを時間をかけて聞くことでした。

②人々はその説明を聞いているうちにどうなりましたか(9節)。

→民はまるで「一人の人のようになって」(1節)聞いていました。そして、「民は皆、律法の言葉を聞いて泣いていました」(9節)。イスラエルの民が本当に心から御言葉に耳を傾け、その言葉一つ一つをかみしめて味わったことがわかります。

③それは、どうしてですか。これまでのお話の流れを思い出して考えてみましょう。

→まず、ポイントとなるのはイスラエルが外国に支配され多くの民が「捕囚」として奴隷同然の生活を余儀なくされていたといふことです。これは、国や民族として自治権を失い共同体と

して機能しなくなっていたわけで、個人で言えば死んでいたのと同じです。神さまの祝福を受けて神殿や城壁を再建できたのは、事実上共同体として復活したと言える出来事でした。そもそもそんな状態になったのは、神さまから離れ、神さまから懲らしめの刑罰を受けたためでした。けれどもその間も神さまは預言者たちや信仰者たちを通して力強くイスラエルの民を励まし導いてきました。その神さまの一貫した憐れみ深い働きかけと、共同体として死んでいた者をよみがえらせる力を、民は律法の書に聞き取ったのだと思われます。民は心を一つにして悔い改めたのです。

④今日のお話は長い苦しみを経てイスラエルの民が神さまに立ち返った場面です。彼らにとっても私たちにとっても同じようにいえる生活の力の源は何ですか(10節)。

→これは今日の暗唱聖句にもなっている言葉ですが、ぜひ胸に刻みたい言葉です。礼拝において「主を喜び祝うこと」です。ウェストミンスター大小教理問答の問1にある人生の目的のうち、ネヘミヤを中心とした城壁再建の試みは前半の「神の栄光を表す」ことであると前回書きましたが、その結果が今日の場面で後半の「神を喜ぶ」ということにつながります。今日の聖書箇所が人生の目的に完全に合致した喜ばしい場面であったということです。これは、私たちの現実の生活にも同様に言えることです。神さまの栄光を表す行動をこころがけ、主の前に悔い改めて真実の礼拝を捧げ、主を心からほめたたえ喜ぶ。これこそが私たちの人生の目的であり別の点から見ますと力の源です。人生の目的に適った生活は力を与えられるのです。今日のお話はイスラエルの共同体に関する大きな出来事ですが、私たちの生活においては個人の小さな出来事として日々起こりうることです。これらの結びつきを教師自身が消化して子どもたちに向き合いたいと思います。

〈ねらい〉

主を礼拝する喜びを知る。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしてください、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. 神様の助けによってエルサレムの城壁は52日で完成しました。ネヘミヤたちはその後まず何をしたら書かれていますか？

→神様を礼拝した。神様の民の新しい歴史は礼拝で始まった。

Q. その礼拝では律法の書が朗読され、説明されました。それを聞いて、「民は皆、律法の言葉を聞いて泣いていた。」(9節)と書かれています。何故彼らは泣いたのでしょうか？

→「しかし、彼ら(民の先祖達)はあなたに背き、反逆し あなたの律法を捨てて顧みず回心を説くあなたの預言者たちを殺し 背信の大罪を犯した。」(9:26) こと、その結果としてのバビロン捕囚であり、自分達のこうむった苦しみだということを思い起こされた

から。ネヘミヤたちが悲しんではならないと三度も(9、10、11節)呼びかけなければならない程に、民は悔い改めの涙を流したのであった。

Q. ネヘミヤたちは悲しむ民に向かって、「主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。」(10節)と呼びかけましたが、一体何を喜ぶことができたのでしょうか？

→罪を神様に裁かれて捕囚にあったのは事実だが、罪赦され、エルサレムに帰還して再び神様の民としての歩みを始めることができたこと。神様はイスラエルをお見捨てにならず、悔い改めた後、彼らの神様として喜びの中心であってくださる。神様を自分の神様としてもち、礼拝することこそ、神様の民の喜びであり、力の源である。

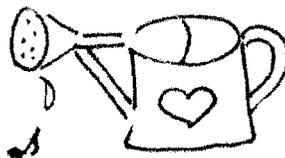
Q. 主を喜ぶ、すなわち、礼拝することは私達にとっては何のような意味で力の源なのでしょうか？

→主の復活を記念する主の日の礼拝での御言葉の朗読と説教を通して主と出会い、罪の赦しの恵みと永遠の命の希望、主が共にいて導いてくださることを確信させられて、力づけられる。

4. お祈り

主を礼拝する喜びをますます味わわせてくださるよう。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。



イエスが役人の息子を癒すという奇跡物語が記されている箇所を読むと、二つの疑問が生じます。第一はイエスが「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」(44節)と語られているのに、それに続く45節では「ガリラヤにお着きになると、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎した」と語られているからです。なにかイエスの言葉と故郷の人々の態度に食い違いがあるように感じてしまいます。第二は死にかかった息子を癒してほしいと願う役人に対してイエスは「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」(48節)という奇跡についての否定的な答えを語られながら、その言葉のすぐあとに役人の息子の病を癒されている点です。

(1) 故郷の人々の本心は

第一の疑問には、二つの答えが可能です。一つはイエスの語る「故郷」の人々とは神の民と自らを主張しながらも、その神の子であるイエスを受け入れることができないエルサレムの人々、またユダヤ人全体を指すという考え方です。

もう一つは、イエスを歓迎したガリラヤの人々の態度は彼らの心から出た誠の態度ではないと考える解釈です。聖書はガリラヤの人々がイエスを歓迎した理由について次のように記しているからです。彼らは「エルサレムでイエスがなさったことをすべて、見ていたからである」と。イエスは過越祭の間エルサレムでしるしを多くの人びとに示しています(2章23節)。ですから故郷の人々の歓迎はこのイエスのしるしと関係していると考えられるのです。ガリラヤの人々の歓迎もイエスのしるしをもっと見たいという願いの現れであり、彼らはイエスを心から信じて歓迎していたわけではないと言えるのです。

(2) しるしを求める信仰

第二の疑問に登場するしるしを求める信仰につ

いてのイエスの否定的な言葉はこの故郷の人々の態度と深く関係しています。

しるしを求める信仰の正体は「それでは、わたしたちが見てあなたを信じるができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか」(6章30節)と言う群衆の言葉の中に示されています。しるしを求める信仰は自分の周りの出来事がイエスの不思議な力によって、都合のいいように変ることを求めます。ところが自分自身は依然として古い人間のままであり、決して新しくされることがないのです。

(3) イエスの言葉を信じた

このようなしるしを求める信仰に対して、聖書はイエスの語られるみ言葉を信じる信仰を強調しています。

「イエスは言われた。「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った」(50節)。役人はイエスのなされたしるしを見て信じたのではありません。息子がどうなったかも彼は知らずにイエスのみ言葉を信じて、家に帰っていったのです。

イエスのみ言葉を信じる信仰は、しるしを求める信仰と違ってその人自身に働いて、その人を新しくし、永遠の命の祝福を与えるのです。もちろん、私たちはこの信仰も聖霊のみ業によって私たちに起こされたものであることを忘れてはなりません(3章5節)。

私たちは聖書を通して、また毎週の教会の礼拝で語られる説教を通して、今もイエスのみ言葉を聞くことができます。そして私たちがそのみ言葉を信じる時、私たち自身が新たにされ、永遠の命の祝福に与ることができるようにされるのです(『子どもカテキズム』問69、70)。(櫻井良一)

9月2日

「役人の息子のいやし」

説教展開例

テキスト ヨハネによる福音書4章43～54節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問25, 34

〔単元のねらい〕

子どもたちを信仰へと養い育てることは、ただ聖霊のお導きにゆだねる以外にありません。しかし、聖霊はご自身のお働きのために、御言葉をお用いになられます。また、御言葉を語る人をお用いになられます。そこに、私どもの出番があります。今日からのテキストは、福音書、主イエス・キリスト御自身を直接に紹介するテキストです。たしかに私どもの信仰教育にとって譲れない主張は、旧新約聖書を子どもたちに救済史として提示し、キリスト教有神論的世界観を養い育てることです。しかし、だからこそ、救済史の頂点である主イエス・キリストを紹介することこそ、その中心となります。この中心点がぼやけると、世界観どころではなくなります。本日、あらためて主イエス・キリストとその御言葉の力を心を込め、愛を込め、情熱を込めて証しましょう。説教題は、詩編第147編15節「御言葉はすみやかに走る」からです。御言葉が語られ、信じて聴かれたら、そこに必ず事件、出来事が起こります。そうであれば、説教者自身の御言葉の体験を証することも必要ではないでしょうか。具体例を挙げなくとも、自分自身の全存在が、御言葉に支えられてあることが伝わりますように。

「御言葉は走る」

さて、イエスさまは、今、ガリラヤのカナという村にきています。イエスさまは、この村で最初の奇跡を起されました。ある結婚式のお祝いのときに、ぶどう酒がなくなってしまいました。そのことを知った給仕の人はとても困りました。そのとき、イエスさまは水をぶどう酒に変えてくださったのでした。

さて、その村にもう一度イエスさまが戻って来られました。それを聞きつけた一人の男の人がイエスさまのところに大急ぎで駆けつけてきました。とても不安そうな、暗い顔つきをしているお父さんです。その人は、ローマの王さまに仕えている役人です。なぜ、そんな顔つきをしているのでしょうか。なぜなら、かわいい息子が今、死にかかっているからです。おそらくこのお父さんは、お金持ちだったと思います。お医者さんに診てもらっただけのお金なら十分にあったはずです。けれども、お医者さんでは治せないのです。どんどん、子どもが悪くなっています。そして、いよいよお医者さんは、「お父さん、残念ですけれど、もう無理でしょう。」と言って、子どものベッドから

立ち去ってしまったのかもしれませんが。お父さんは、どんどん息をあらげて、苦しんで今にも、もう死にそうな子どもを見て、いてもたってもいられなかったと思います。

「あのイエスさまなら、息子を治してもらえるかもしれない。」そんなことを考えていたのかもしれません。そこにすばらしい知らせが届きました。「イエスという人が、カナの村に戻ってきている。」お父さんは、もう、いてもたってもいられません。とにかく、イエスさまのところに大急ぎで駆けつけました。村に着くと、必死になってイエスさまを探しました。そして、ついにイエスさまを探し当てました。

「ああ、イエスさま、良かった、お会いできて。くわしいお話は後からにして、今すぐに、わたしの家に来てください。実は、息子が死にそうなのです。助けてください。直してください。」大変なけんまくです。みんながこのお父さんだったら、やっぱりそうなるのではないのでしょうか？あるいは、皆のお父さんが今、死にそうであって、すぐそばにイエスさまがおられるのだったら、同じよ

うにお願いませんか？

さて、イエスさまは「よし、わかった。すぐに行こう。」と仰ったのでしょうか。違いました。イエスさまは、そのお父さんに向かって、このように仰せになられました。「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない。」これはどういう意味でしょうか。このような意味です。「あなたがたは、神さまのなさる不思議な、驚くような奇跡を見なければ、決して信じない。つまり、神さまのことを目で見ることがなければ決して神様を信じない。」ということです。要するに、イエスさまは、「よろしい、息子はどこにいるのか、一緒に行こう、案内しなさい。」とは仰せになられなかったのです。

このお父さんは、どんな気持ちでしたでしょうか。とても悲しくなったかもしれません。もしかすると「ひどいなあ、こんなをお願いしているのに、わたしや家族の気持ちを思いやってくれないで、そんな厳しいことを言って。がっかりした。もう結構です……」そんな気持ちがわいてしまうのでしょうか。そして、諦めて帰ってしまうのでしょうか。違います。この役人は、それでも、言い続けるのです。「主よ、子どもが死なないうちに、おいで下さい。」このお父さんは、どんなに言われても、イエスさまが来てくださるなら、治していただくと信じ続けます。

そのときです。すぐにイエスさまは仰せになられました。「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」お父さんは、こんどもびっくりしたのではないのでしょうか。もしかすると、心の中で、こうつぶやいたかもしれません。「いや、イエスさま、一緒に行って欲しいのです……」でも、お父さんは、そう言いませんでした。イエスさまの御言葉を信じて、言われた通りに帰って行ったのです。

ところがどうでしょう。帰る道、向うの方から、僕たちが迎えに来ています。息子が死んでしまっ

たと告げるのでしょうか。違います。みんな驚いたような顔です。しかもニコニコしています。お父さんは、彼らの顔をみただけで分かったと思うのです。僕たちは、子どもがたちまち癒されたことを知らせに駆け寄ってきます。

お父さんは、聞きました。「いったい何時、息子は元気になったのか。」「きのうの午後1時に熱が下がりました。」そのとき、お父さんは、瞬間に理解しました。それは、イエスさまが、「あなたの息子は生きる」と仰せになったときだと。そして、イエスさまこそが、イエスさまの御言葉こそが、本当に息子を癒してくださったのだと。そして、お父さんはもちろん、息子も家族みんながイエスさまが神さまだと信じたのです。

その通りです。イエスさまは神さまです。そして神さまの御言葉は、必ず、その通りに実現するのです。今日の暗唱聖句を、もう一度一緒に唱えて見ましょう。神さまの口から出た御言葉は神さまの言われたとおり、望まれたとおり実現するのです。場所が離れていても大丈夫です。午後1時にイエスさまが語られたら、遠く離れていても、その通りになったのですよね。神さまの御言葉は走るのです。一瞬にして、届くのです。

今、イエスさまは天のお父さまの右におられます。つまりここには、目に見える形ではおられないということです。困ったとき、大変なとき、それだけではなく、嬉しいとき、楽しいときもイエスさまは目に見えるようには、一緒におられません。それなら、駄目ですか。諦めますか。不安ですか。違います。このお父さんのように、信じて帰ればよいのです。僕たち私たちは今、天におられる神さまの御言葉をここで、教会で聴きましたね。それで十分、大丈夫ではないですか。イエスさまの説教を信じて聴いている僕たち私たちに、イエスさまの御心は必ず実現します。イエスさまは今ここに一緒におられるからです。(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句]

イザヤ書 55章11節

そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も

むなしくは、わたしのもとに戻らない。

それはわたしの望むことを成し遂げ

わたしが与えた使命を必ず果たす。

〈ねらい〉

イエス様を知る故郷の人々と王の役人が出てきますが、今回は神様の言葉に聞き従った王の役人のお話に注目します。神様の御言葉に耳を傾けて聞き従うことの大切さと、聞き従うことによって喜びと感謝と祝福があることを知ろう。

〈展開例〉

王様の役人はカナでのイエス様のお力のことを聞いていました。自分の子どもが死にそうになった時、「神様、助けてください」と心の中で叫んでいました。「イエス様のお力があれば、この近くにいてくださればいいのに」と思っていた時に、イエス様が近くに来ていらっしゃることを聞いたこのお父さんは、必死になってイエス様を捜しました。お父さんはイエス様に、「息子が死にそうです。助けてください。」と言いました。イエス様がおいで下されば、子どもは治ると信じていたのです。しかしイエス様は、「あなた方はしるし

や不思議な業を見なければ決して信じない。」と言われました。イエス様は家において下さいませんでした。けれども、「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」とのお言葉を下さいました。

この人はどうするでしょうか。しるしも見ていません。子どもがどうなったかも知りませんでした。しかし、イエス様とイエス様のくださった言葉を信じました。イエス様がおっしゃることは、きっとそのようになると信じたのです。イエス様は、一番大切な信仰をこの役人に下さいました。つまり、神様の言葉に聞き従う心を与えてくださったのです。

イエス様は本当に力のあるお方です。そのイエス様に素直に従う心を与えられたいと思います。

〈おいのり〉

私たちにも大変なことが起こることがあります。そんな時でも、神様のお言葉を信じて生きることができるようにしてください。

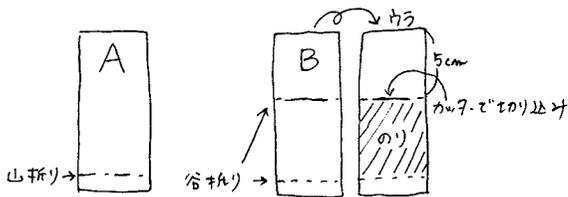
〈やってみよう〉

『おき上がりこぼし』を作ろう！

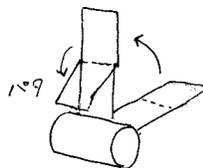
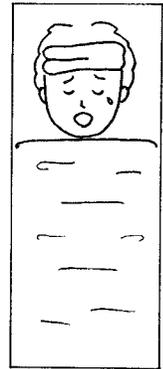
準備：4×11cmの厚紙 2枚

空缶 or フィルムケース or トレットペーパーの芯など
おもり(乾電池など)

- ① 2枚の厚紙に 息子の顔を書く



- ② Bのウラ上から5cmの辺に カッターで切り込みを入れる
切りはなさないよう注意
- ③ 余料線部にのりを付け Aの上にはり付ける
- ④ Bの切り込み部分に折り返し線を付けて上下に重かさやすくする
- ⑤ 重りを付けた空缶等に ④を付けたら出来上がり



〈ねらい〉

自分の思い通りのしるしを見るまでは信じないというわがままな思いを捨て、御言葉に聴き従うことが大切であることを学ぶ。これは人間には難しいことだが、離れたところにも直ちに伝わって御心を実現する御言葉の力を信じ、聴き従うことができるように祈りたい。

〈展開例〉

1. イエス様がエルサレムのあるユダヤ地方から故郷のガリラヤに戻って来られた時、ガリラヤの人たちはイエス様を歓迎しましたが、イエス様から与えられたしるしはわずかでした。なぜだと思いませんか？

⇒ただ不思議なしるしを見たいと思っているだけの人が多く、御言葉を信じて従う人が少なかったから。

2. ところが、一人の役人（ヘロデ王家の人）とその家族だけが、大きなしるしを見て、イエス様を信じるようになりました。この人は、他のガリラヤの人たちと、どこが違ったのでしょうか？

⇒イエス様から期待通りの返事をいただけなくても、「あなたの息子は生きる」という御言葉を信じ、「帰りなさい」という御言葉に従ったところが違った。

3. イエス様はこの役人の息子とは直接会っていないのに、役人の息子はどのように癒されたのでしょうか？

⇒イエス様の御言葉は、遠く離れた町にいる役人の息子のところにも力をあらわす。どこにいてもイエス様は癒しの業を成し遂げてくださる。それと同じように、私たちがどこでお祈りをしても、神様はその祈りを必ず聴いていてくださる。

〈おいのり〉

神様、イエス様の御言葉は遠く離れたところへも直ちに伝わって、御心が必ず実現することを教えてください、ありがとうございます。私達はなかなか神様の御言葉に素直に聴き従えない罪深い者ですが、この素晴らしい御言葉の力によって、神様の子供らしく聴き従う者に造りかえてください。



イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。

〈ねらい〉

イエスさまが、しるしによらずただ御言葉によって信じることを求められることを学ぶ。

〈聖書の言葉〉

いやす（いやし）、○預言者、敬う、○しるし、業、こぞって

〈展開例〉

①46節の「前にイエスが水をぶどう酒に変えられた」というのはどういうことがあったのですか（2章1～11節）。

→今日のお話の舞台が、以前イエスさまが最初の奇跡をされた場所であることをおさえます。子どもたちの中には、このお話を知っている者もいるでしょう。結婚式でぶどう酒がなくなり困っていたところ、イエスさまが水がめに水を用意させて、それを飲んでみたら上等のぶどう酒だった、という楽しいお話です。けれども、このようなことが一度あると、人々の心はまたそのような不思議な出来事を期待してしまうものです。それは、信仰とはかけ離れた珍しいもの見たさの単なる好奇心になってしまいがちです。

②48節でイエスさまは役人に、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と言われました。

(1) この時、イエスさまはどのような気持ちでこの言葉を言ったのか考えてみましょう。

(2) では、役人はどのような気持ちだったか考えてみましょう。

→王の役人であり父親であるこの人は、息子の病気を治すため他にできることはすべて尽くしたことでしょう。医者からさじを投げられ、ただ子どもを助けたい一心でカファルナウムからカナまでのおよ30キロメートルの道のりをやって来たものと思われます。その父親に投げかけられたこの一言の意味を、最初はわかりか

ねたに違いありません。何でもイエスさまが自分の期待の通りにしてくれるという思いはこの言葉で粉碎されます。普通の状況なら失望して去っていくかもしれません。しかし、この人にはそれでもイエスさまによりすがり願い続ける事情と一途さがありました。49節でこの人は、自分をなげうってイエスさまに願い続ける姿勢を示します。しるしや業でなく、言葉を信じよと言うならばその通りにしますという姿勢です。イエスさまが求められたのは、まさにこの姿勢でした。

②50節で、イエスさまは「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」との御言葉を与え、役人はそれを信じて帰りました。息子さんの病気は良くなりました。イエスさまが役人の家に一緒に行って息子をいやしたのと何が違うのでしょうか。

→子どもたちの中には、結果に目を奪われて違いを見抜けない者がいるかもしれません。息子がいやされるということからすれば、イエスさまがカファルナウムにいてもいなくても同じように思えます。しかし、この役人は自分の家に帰る長い山道を、ただイエスさまの言葉を頼りにして歩き続けたのです（30キロメートル歩き続ける大変さをイメージさせると良いでしょう。）。それがイエスさまの求められたことであり、同じことがわたしたちにも求められます。それはわたしたち自身が信仰によって変えられていくことです。それは、時に大きな忍耐を必要とすることであり、また時に長い時間がかかります。けれども、そうしてすべてを神さまに委ねて歩み続ける中で、最善の結果が祝福として与えられるということが教えられています。

〈ヒント〉

子どもたちに親の気持ちを想像させるには、助けが必要かもしれません。

〈ねらい〉

神様の御言葉には力があることを信じる。

〈展開例〉**1. 聖書をもう一度読む****2. 分かち合い**

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

※教師、生徒という以前に、まず教師自身が神の御前に一人の御言葉の聴衆として、教えられたこと、感動したこと、心を導かれていることを、率直に生徒達に話すことが大切だと思います。自分の心に響いたメッセージが一番生徒の心に届くからです。分級では何かを新たに教えようと無理に導くのではなく、生徒達と御言葉を巡って語り合ったり、共に祈る時間を重視してくださればと思います。

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしていただき、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいばと思います。

Q. 再びガリラヤのカナに来られたイエス様のみもとに来たのは誰でしたか？

→王の役人

Q. この人はどういうお願い事があってイエス様のみもとに来たのですか？

→息子が病気で死にかかっていた。

Q. イエス様が役人におっしゃった、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」とは、どのような意味でしょうか？ 今日の話を理解するのに大事なことなので、考えてみてください。

→これは奇跡を目にすることがなければ信じていない、人間の頑なさや不信仰のことをおっしゃっている。トマスも「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」(20:25)と言った。それに対して主は、「見ないのに信じる人は、幸いである。」(20:29)とおっしゃった。

Q. イエス様が「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」とおっしゃった時、役人は帰って行きました。息子の所に来ていやして下さるように熱心に頼んでいたのに、何故でしょうか？

→イエス様の御言葉ならその通りになると信頼したから。

Q. 暗唱聖句イザヤ書55:11を読んで、神様の御言葉について教えられていることを挙げてください。

→神様の御心を成し遂げ、与えられた使命を必ず果たす力がある。

Q. イエス様の御言葉通りに役人の息子はいやされました。神様の御言葉は必ず実現します。ですから、イエス様が私達にもたらすとおっしゃってくださった罪の赦しと永遠の命の約束も確かに私達の現実となるのです。イエス様の御言葉を信じて帰って行った役人のように、私達も御言葉への信頼をもって生きて行きましょう。

4. お祈り

御言葉を与えられていることの感謝。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

イエスがベトザタの池で病人を癒された物語を読んで疑問に感じる点が二つあります。一つは38年間もベトザタの池での回廊で自分の病が癒される日を待っていたはずの人(5節)にイエスが語りかけられた「良くなりたいたのか」(6節)という言葉の意味です。どうしてあたりまえのようなことをイエスは病氣の人に尋ねたのでしょうか。もう一つはイエスによって癒されたこの人が神殿の境内でイエスと再会したとき、イエスが語られた言葉です。「あなたは良くなったのだ。もう、罪を犯してはいけない。さもないと、もっと悪いことが起こるかもしれない」(14節)。いったい彼はどんな罪を犯していたのでしょうか。

(1) 良くなりたいたのか

ベトザタの池の周りの回廊には「病氣の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢横たわっていた」(3節)。ここにどうしてたくさんの病人たちが集まっていたか、その理由を記した3節後半から4節はヨハネによる福音書の巻末に載せられています。「彼らは、水が動くのを待っていた。それは、主の使いがときどき池に降りて来て、水が動くことがあり、水が動いたとき、真っ先に水に入る者は、どんな病氣にかかっているか、いやされたからである」。

たくさんの病人たちが自分の病を癒してほしいとこの池の周りに集まっていました。38年間も病氣で苦しんでいた人もその中の一人です。しかしイエスが「良くなりたいたのか」と声をかけられると彼の意外な答えが返ってきます。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです」(7節)。この人の答えには「良くなりたいたい」という彼の意志が何一つ表明されていません。むしろ、自分が今、このように苦しみ続けているのは、周りの人に愛が欠けていて、自分を助けてくれる人が一人もいないからだ

という嘆きしか語らないのです。彼の病の深刻さはそこにあります。

(2) もう、罪を犯してはならない

「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい」(8節)と言うイエスのみ言葉によって、この人の動けなかった体が癒されるという奇跡が起こりました。彼はこのあとイエスに神殿の境内で再開し、「あなたは良くなったのだ。もう、罪を犯してはいけない。さもないと、もっと悪いことが起こるかもしれない」と命じられています。別の箇所でもイエスは生まれつきの盲人に対して誰の罪のせいでもなく「神の業がこの人に現れるためである」と語られています(9章3節)。二つのイエスの発言の間には大きな隔たりを感じます。

(3) 人間の罪の本質

ここでイエスが語られた罪は38年間も病で苦しんだ人が過去に犯した何か特定の罪にあると考えるよりは人間の持っている根本的な罪を語っていると考えたほうがいいかもしれません。なぜなら人の罪の本質は救い主として神のもとから遣わされたイエスを受け入れないところにはっきりと現されるからです。

この38年間も病で苦しんだ人の別の特徴は、自分から一言もイエスに助けを求めていないというところにあります。彼の問題はイエスが自分に近づいてくださっても、その方に関心さえ示さない人間の罪にあったのです。しかし、イエスの「起きよ」というみ言葉は彼の肉体だけではなく、罪によって失われていた彼と神との関係を回復させました。ですから、「もう、罪を犯してはいけない」という言葉は、イエスによって回復された神との関係の中に生き続けるようにという、イエスの勧めの言葉であると考えられるのです。

(櫻井良一)

9月9日

「ベトザタの池でのいやし」

説教展開例

テキスト ヨハネによる福音書5章1～18節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問27

〔単元のねらい〕

38年もの間、病気の苦しみとそれにまつわるもろもろの悲しみ、孤独に明け暮れている生活は、あまりにも過酷です。しかし、今、その人のところにもイエスさまが訪ねてくださいます。主イエスの方から声をかけてくださったのです。そして物語が始まります。主は、彼の深い悩み、問題を克服させてくださいました。しかし、彼にはまったく予想していない新しい課題を与えられる。主イエスに従う新しい歩みは、ユダヤ人からの攻撃を回避することはできなくなるからである。子どもたちもまったく同じである。主イエスを信じて歩む子どもたちは、あたらしい戦いを担う。しかし、その信仰の戦いに勝利されたのが主イエスである。ここでも、主は王として働かれる。私どもは、王なる主イエスに従う者たちである。小学校の高学年にもなれば、すでにこの戦いを知っているはずである。慰めを証したい。

「イエスさまと一緒に働こう！」

エルサレムには、ベトザタと呼ばれる池がありました。その池には、五つの回廊、人が自由に出入りできる五つの部屋がありました。そこには、病気が人が集っていました。目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが大勢横たわっています。まるで大きな病院のようです。

さて、そこに一人の男性が横たわっています。その人は、38年もの間、寝たきりです。どんな病気なのでしょう。分かりません。とにかく、体が思い通りに動きません。麻痺しているのです。いったい、38年もの間、寝たままの人生ってどんなものなのでしょう。みんながこれまで生きて何倍もの間です。先生なら、小学校の6年生くらいから今の今までずっと病気で寝たきりということになります。ちょっと想像しただけでも、そのつらさが分かります。いえ、本当のつらさは、僕たち私たちには分からないのかもしれませんが。そして、何よりもこの人にとってつらいことがあったのです。それはいったい何でしょうか。

さて、このベトザタの池にイエスさまがおいでになりました。この人のところに近づかれました。そしてお声をかけられました。「良くなりましたか。」

皆は不思議に思いませんか。良くなりたいのに決まっていると思いませんか。でも、この人は何と答えたかという、こうです。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、他の人が先に降りて行くのです。」ちょっと、わかりにくいかもしれませぬ。この池は、地面の底から水が湧き出ているようです。水がいきおいよく湧き出るとき、水面が動きます。そのとき、池に入れば、病気が治ると考えられていたようです。ですから、池の周りでは皆が、水面が動くのを、いまかいまと見つめていたのです。

さて、この人にとっては、病気の苦しみもつらいのですが、今ではそれより何よりつらく悲しかったことがあります。それは、自分を助けてくれる人、自分のことを気にかけてくれる人が誰もいないということです。

イエスさまは、今、この人の友達になってくださいます。声をかけられるのです。でも、いっしょになって池の水が動くのを待って、池の中に降りてあげるわけではありません。イエスさまは、この人にお命じになられます。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」するとどうでしょう。

この人の体に今までまったく味わったことのない力がみなぎりました。38年間歩いたこともないか細くなってしまった足に筋肉がついてしまいました、起き上がったのです。イエスさまは、奇跡を起してくださったのです。この人は、床を担いで歩き出しました。ベトサタの池の病院から退院したのです。

ところが事件が起こります。その日は土曜日の安息日でした。ユダヤ人は、十戒のなかの第4戒を大切にしていました。安息日には、仕事をしてはならないという掟です。ただ、床を担ぐようなことであってもしてはいけないという掟にしていたのです。ですから、ユダヤ人たちは、この人が安息日に床をたたんで歩き出したことを、神さまへの反抗だと考えたのです。彼らは、この38年間寝たきりの人が、病気が治ったことを少しも喜んでいません。むしろ、「けしからん。」と怒り出しているのです。この人を責めたのです。

彼は、すかさず、答えました。「わたしを癒してくださった方が、そうしろと言われたので、そうしたのです。」つまり、自分が悪いわけではなくて、イエスさまが悪いということでしょう。すると、こんどはユダヤ人は、「そんなことを言ったのは誰だ。」と責めました。実は、この人は、イエスさまだということを知らなかったのです。

さて、その後、イエスさまは、エルサレムの神殿で、もう一度この人と会いました。思いがけないところで、再会できました。そして、こんどもイエスさまの方から声をかけてくださいました。「あなたはよくなった、もう罪を犯してはならない。」

ところが、なんということでしょう。この人は、イエスさまのことを憎んでいた人たちに告げ口します。そのせいで、イエスさまは、ユダヤの人たちから迫害されるようになったのです。彼らは、イエスさまを殺さなければならぬと考え始めたのです。病気を治していただいても、本当には、イエスさまのことを信じるができなかったのだと思います。

僕たち私たちは、どうするのでしょうか。イエスさまに声をかけてもらいました。イエスさまにお友達になっていただきました。ところが、それによって、こんなことを言われることがあるかもしれません。「なんだ、お前は、神さまを信じているの？ばっかじゃない。神さまなんているはずないぞ。」「ここは、日本だから、日本の神さまはキリスト教の神さまじゃないぞ。」そんなとき、みんなはどうしますか。

イエスさまは、ぜんぜん気にしません。むしろこう仰せになられました。「わたしの天のお父さまは今もお働いておられる。だから、わたしも神さまの御業を一生懸命する、働くのだ。」

先生は、このイエスさまについて行きたいです。先生のために命をかけて愛してくださって、十字架に死んでくださったイエスさまについて行きたいです。先生もイエスさまのお働きのお手伝いがしたいです。

そして今、イエスさまは、僕たち私たちひとり一人に、わたしと一緒に神さまのために働こうと呼びかけていてくださいます。イエスさまは僕たち私たちのまことの友達であって、王様です。守ってくださるのです。大丈夫です。安心して、信じ、従って行こう。(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句]

ヨハネによる福音書 5章17節後半

わたしの父は今もお働いておられる。

だから、わたしも働くのだ。

〈ねらい〉

イエス様は私たちのまことのお友達になってくださることを知り、感謝しよう。

〈展開例〉

みなさんは病気で熱が出て、幼稚園や保育園を休んで家で寝ていたことはありますか？その時どんな気持ちだった？とても苦しくて、お友達にも会えなくて淋しくなかった？

今日のお話は、38年間もの長い間病気で体を動かすこともできず、たった一人で寝ていた人に、イエス様が声をかけてお友達になってくださり、病気を治してくださった、というお話です。

ベトザタの池の水が動いた時、最初に池に入った人の病気が治ると信じられていたので、多くの人が池の周りで水が動くのを待っていました。ところがこの人は病気で体を動かすことができず、また、誰もこの人を水に入れてくれなかったので、

38年もの間池のそばで寝ていたのです。長い間お友達もなく、たった一人で動くこともできなくて、どんなに辛くて淋しかったでしょうね。イエス様はそんな人にも自分から声をかけてお友達になってくださり、病気まで治してくださいました。その人はとってもうれしかったことでしょう。

辛く淋しい思いをする私たちのために、本当のお友達になるために、力ある神の子が私たちのところに来てくださいます。そして力を与えてくださいます。そういうイエス様に感謝して、幼稚園や保育園のお友だちにもイエス様のことを教えてあげましょう。

〈おいのり〉

私たちが一番辛くて淋しい時に一緒にいてくださることに感謝します。今度はわたしたちが、辛く悲しい思いをしているお友達にイエス様のことを教えてあげられますように。

〈やってみよう〉**池に入って遊ぼう**

【用意する物】 ふろしき、またはブルーシート

【遊びかた】

- ①ふろしきやブルーシートを池に見立てて、その周りに子どもたちを寝ころばせます。
 - ②先生がふろしきかブルーシートを動かしたとき、一番に池に入った子が勝ちです。
- ※転んでけがをしたりしないよう、十分注意して遊んでください。



〈ねらい〉

38年も病気で苦しんでいた人をたちどころに癒し、起き上がらせてくださるイエス様こそ、私達を罪の中から起き上がらせ、復活の命に結びつけてくださるまことの救い主、安息日の主であることを覚えて感謝するとともに、必要な時には正しく主を証しすることができるよう祈りたい。

〈展開例〉

1. 38年間病気で苦しんでいた人は、イエス様から「良くなりたくないか」と聞かれた時、「良くなりたくないです」とは答えず、「私を助けてくれる人がいないのです」と答えました。良くなるなんて無理だと、殆どあきらめているように聞こえますね。僕たちはどうでしょうか。もしも、イエス様から「良くなりたくないか」と聞かれたとしたら、どう答えるでしょうか。

⇒僕たちは別に病気ではないから、良くならなくても良い？

御言葉に従いたくても、邪魔をする友達がいるから無理？

御言葉に素直に聴き従えるようになりたい？

2. イエス様は、病気の人を癒して起き上がらせ

ると同時に、「床を担いで歩きなさい」とお命じになりました。「床を担いで歩く」ことが、この人が完全に癒されたしるしになり、また、そんな奇跡を命じて従わせることがおできになるイエス様こそ、天から遣わされた救い主なのだというしるしになるからです。さて、私たちにどんなことが命じられているのでしょうか。「床を担いで歩く」代わりに、何をすればよいでしょうか。

⇒礼拝すること、イエス様こそ私の救い主だと言いつぶすこと等。

〈おいのり〉

神様、僕達は自分の力では抜け出せない罪の中にいますが、人間にはできないことでも、たちどころに成し遂げることがおできになるイエス様を遣わし、僕達を救い出してください、ありがとうございます。このイエス様の力によって、僕達が救われた神様の子供らしく生きることができるようにしてください。また、必要な時には、イエス様が僕の主だと、正しく証しすることができるように力づけてください。



もう、罪を犯してはいけません。
さもないと、もっと悪いことが起こるかもしれない。

〈ねらい〉

他人に責任を転嫁し自分の罪を見ようとしないう人間の罪深さを学ぶ。

〈聖書の言葉〉

上る、傍ら、回廊、麻痺、床、○安息日、境内、○迫害

〈展開例〉

①6節でイエスさまに「良くなりたいか」と聞かれた時、この病人は「誰もわたしを池の中に入れてくれないのです。」と文句を言いました。この人の罪はどんなところにありますか。

→イエスさまは他のユダヤ人がそうであったように、罪のせいでこの人が病気になるのだと言っているではありません。けれども、確かにこの人の罪を見抜いておられます。それは、この短いやり取りの中に示されています。普通だったら、「良くなりたいか」と聞かれれば「はい」と応じるのではないのでしょうか。そうではなく、この人は池の中に入れないことを嘆いています。生ける神さまの恵みの業を信じられずに迷信に頼っているわけです。そのため、目の前にイエスさまがいらっしやることも見えていません。これがまずこの人の根本的な罪です。それは、偶像により頼む多くの人の罪を代表していると言えるでしょう。また、そのことに加えて、この人は自分のいやされないことを周りの人たちのせいにしてしています。病気であるのは気の毒ですが、そのために自己憐憫の塊になってしまっています。このため、罪の泥沼から抜け出せない状況になっていたのです。

②10節でユダヤ人たちが病気をいやしていただいた人に言った言葉をどう思いますか。

→ユダヤ人たちが言った言葉は病気が治って床を担いで片付けるのを非難する言葉でした。風邪であっても治ったときのうれしさは何とも言えないものです。入院経験がある子どもなら退院

のときの喜びは容易に思い出せるでしょう。ましてや、38年病気だったこの人の状況に共感できない心の堅さは何なのだろうかと言いたくなります。しかもこれらのきまりがもともとは聖書に忠実にあろうという敬虔な思いから出てきたものであるというのが問題です。これが律法主義ということですが、細かな議論はさておいて、結局のところ彼らのきまりは聖書の教えではなく人間の作ったものであったということでしょう。ですから、ここに出てくるユダヤ人たちは神に忠実であるようで、実は人間のきまりに忠実であっただけなのです。病気から癒されたこの人は、さっそくこれらの人の試みに脅かされ、それまでと同じく神さまの方は見ずに人を見て恐れてしまいます。

③この病気をいやしていただいた人は、ユダヤ人たちに責められて自分の行いをだれのせいになりましたか（11、15節）。

→この人は、他のユダヤ人への恐れのみ、こともあろうにイエスさまを悪者にしてしまいます。イエスさまは、この人に対して14節で「もう罪を犯してはいけない」と警告されますが、それでもこの人はイエスさまのせいにするのをやめませんでした。ここに、罪が罪を生み、救いのない人間の悲惨な状態が浮き彫りにされます。この人は、病気が癒されるという恵みを得たにも関わらず、イエスさまに従っていくことを選べませんでした。なおも自分の殻に閉じこもり、罪の支配にあることを選んだのです。

④この人はどうすればよかったですでしょうか。あなたならどうしますか。

→正解は明らかです。イエスさまに従っていくことです。しかし、この話の病気をいやされた人とユダヤ人の結末はそうはできない人の罪の根深さを物語っています。

〈ねらい〉

イエス様に生かされて生きる幸いを知る。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの实情に合わせてアレンジくださり、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. 「ベトザタの池」には「病気の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人などが、大勢横たわっていた。」(3節)と書かれていますが、これは何故だったのでしょうか？(参照、ヨハネ福音書巻末、3～4節)

→天使が池に降りて来て、水が動いた時に、一番最初に入る者はどんな病気にかかっているか？

Q. イエス様「三十八年も病気で苦しんでいる人」(5節)に、「その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気であるのを知って」(6節)いたのに、「良くなりたか」とおっしゃいました。いやされたいのは当たり前ではないでしょうか？何故イエス様はこんな風に声をかけられたのでしょうか？

→あまりにも長い病気の生活で治りたいという意欲がなくなっていたであろう彼に、まず、良くなりたかという意志を呼び覚ますため

あった。

Q. この人は誰も自分を助けてくれないと嘆いています。助けと望みのない悲惨な状態の彼は、私達の罪と悲惨の状態というものを表していると言えます。この病人をいやされたことから、イエス様は私達にとってどういうお方だと教えられていますか？

→罪と悲惨の状態から私達を起き上がらせてくださる、「与えたいと思う者に命を与える。」(21節) 神の御子であるということ。

Q. いやしていただいた人はイエス様のことをユダヤ人に告げ口し、「そのために、ユダヤ人たちはイエスを迫害し始めた。」(16節)とあります。イエス様はそれに対して何とおっしゃいましたか？

→17節、「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ。」

Q. イエス様を信じる者の人生には確かに信仰の戦いがあります。しかし救われた者としてイエス様を裏切ることなく、ついてゆきたいですね。それはイエス様が父なる神様と共に働くとおっしゃったように、「イエス様は今も働いておられる。だから、わたしも働く。」生き方です。イエス様に生かされて生きる人生は、罪の内に無為に横たわっていた時とは比べ物にならない幸いな歩みです。

4. お祈り

イエス様にいやしていただき、共に働くことを感謝して。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

9章は、生まれつきの盲人の目が見えるようになることを通して、主イエスが世の光としてこの世に来られたのは、見えない者が見えるようになるため(9:39)であることを証言します。

(1) 主イエス、生まれつきの盲人に出会う

8章で主イエスは「はっきり言っておく。アブラハムが生まれる前から『わたしはある』と、かつてモーセが神の山で神から受けた自己啓示の言葉を用いて、ご自分がアブラハム以前から存在したことを証言しました。この自己証言に続く9章で、主イエスは、生まれつきの盲人に出会われます。

(2) 弟子たちの質問「罪や苦難の因果」

弟子たちは、主イエスに対し、この人が生まれつき目が見えないのは、誰の罪に原因があるのですか、本人ですか、両親ですか、と尋ねます。

当時の社会では、肉体的障害と霊的・道徳的過失とは相関関係で捉えられ、身体障害者差別に対する自戒心はありませんでした。

(3) 主イエスの声明と御業

しかし、これらの観念に対して主は、これらを拒否して障害の克服を声明されます。

①本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるため。

②わたしは世にいる間、世の光である。わたしたち(主共にいます教会信徒も含む)は、わたし(主)をお遣わしになった方(父なる神)の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。

③主イエスは地面に唾をし、土をこねてその人の目に塗り、「シロアム『遣わされた者』の池に行つて洗いなさい」と言われ、彼は行って洗うと、目が見えるようになって帰って来た。

(4) 目が見えるようになった人と、その隣人たち

①「目が見えるようになった人」について、隣人達の見解は「これは座って物乞いをしてた人ではないか」「いや似ているが違う」と錯綜するも、本人はきっぱり「わたしがそうなのです」と証します。

②隣人達の「お前の目はどのようにして開いたのか」との質問に対し、その人は自分の身に起きた主の御業の事実のままを証します。

③「その人は何所にいるのか」との質問に対しては、彼は主イエスがどなたであるかを確信しつつも「知りません」と答えます。

※現代社会にも共通する面がありますが、当時のイスラエル社会(旧約時代、ヨブ記にもみられる)には、障害や苦難や不幸を罪の因果応報とみるのが一般的でした。しかし主イエスは、障害の原因を過去の因果に捜すのではなく、障害は神の御業が現れるためであると、この人の将来に向けて見出されました。そしてこの人は、主イエスが自分の目に泥を塗り『遣わされた者』と呼ばれる池に行つて洗いなさい』と言われた御言葉通りに信じて実行することによって癒されたのでした。主イエスの唾や泥に癒されたのではなく、主イエスの『(神から)遣わされた者』の池に行つて洗いなさい』との御言葉に素直に聴き従うことによって癒されたのでした。

肝心なことは、過去への追求ではなく、今ここで主の御言葉に聴き従うことであり、神の御業に与ることなのです。神の御業に与ることは、私達も全てが生まれつきの霊的障害者であることをわきまえること、そして世の光である主イエスの御言葉を学び、信じて従うことであり、主イエスの御業に参加して行くことです。(佐々木弘至)

9月16日 「生まれつきの盲人のいやし」 説教展開例

テキスト ヨハネによる福音書9章1～12節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問13, 14, 27, 81

〔単元のねらい〕

子どもの語る説教は、つねに教理的な説教です。それは何も、テキストを横において、教理そのものを教えるわけではありません。テキストが指し示す教会の教えが何かを、説教者自身がよく捉えることなしに、福音のメッセージが際立つことはほとんど難しいからです。ここでは、先ず一つは、子どもカテキズム問13の「摂理」の神の勝利を証します。しかもこの摂理が主イエス・キリストを通して結実することを語るのです。主イエスを信じることのない摂理信仰は、容易にご利益信仰へと転落します。盲人信徒の存在は、このテキストに光を当てるでしょう。肉眼は開かなくても、なお神に感謝し、賛美しておられるのです。日本キリスト改革派教会静岡教会には、多くの盲信徒が、信仰生活に励んでおられます。もう一つは、御国と御心を祈り求める信仰です。ここでも主と共に働くべき子どもキリストの教会の姿が描かれます。また、先週とは異なり、主を裏切らない弟子のあり方の事例をも指し示すことができます。

「振り返らないで、神を見よう！」

今日も、イエスさまのお話ができることを嬉しく思います。皆で、聖書のお話を聴くことは、イエスさまを礼拝することです。心を込めて、お話しします。みんなも、心を込めてイエスさまの御言葉を聴いてください。

イエスさまは、いつものように伝道のために一生懸命働いておられます。そんなある日、イエスさまは、通りすがりに生まれつき目の見えない人を見かけられました。するとそばにいた弟子たちがこのような質問をしたのです。「先生、この人が生まれつき目が見えないのは、どうしてですか。いったい誰が罪を犯したからこんな目にあっているのですか。本人の罪のせいですか。それとも両親の罪のせいですか。」

どうしてこんな質問をするのでしょうか。みんなはどう思いますか。実は、このような考えは、世界中でなされています。特に、日本では、今でも、あちらこちらでなされています。今、苦しいことや、つらいこと、不幸なことがあるのは、誰かが悪いことをしたからその罰が当たっているんだなんて言うわけです。ある人は、まじめな顔をして、こんなことを言うのです。「あなたが今、不幸な

目にあっているのは、あなたが生まれる前に、とても悪いことをしたからです。前世の因縁があるのです。」前世とは、人が今その人として生まれる前のときのことを言うのです。インネンとは、そのときに犯した罪のことで、つまり「たたり」のことです。たたられているからだと言うのです。もちろん、そんなことはでたらめです！ある人は、人間として生まれる前に、犬だったとか、ゴキブリだったとか言うのです。でたらめです。

騙されないでください！ 僕たち私たちの命は一度限りのものです。みんなのお友達のなかには、「人間って、一度死んでも、生まれ変わってまた生きることができるんだ」なんてことをまじめに信じている子もいるでしょう。命はゲームのようにリセットボタンを押して、やり直せません。そして、前の人生のたたりとかのろいとか、罪によって今の人生があるなんていうのありません。

聖書にはそんなことは書いていません。今朝、聖書を通して、イエスさまが宣言してくださいませ。よく聴いてください。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」つまり、のろい

とかたたりとかインネンとか、ぜんぶ嘘っぱちということですよ。そのようなことは、要するに過去のことでいいですね。過ぎ去った昔のことをひとつひとつ思い出して、あんなことをしちゃったからもうだめだとか、あんな悪いことをしちゃったからもう神さまに愛されないとか、悪いことが起こっても仕方ないとか、そんなことは考えなくていいのです。前を向いてください。神さまが必ず素晴らしいことをしてくださるからです。いえ、もうすでに始まっているのです。

さて、そう仰せになると、すぐにイエスさまは地面に座り込まれます。つばで土をこねておられます。まるでどろんこ遊びみたいです。すると突然、イエスさまは、その泥を、目の見えない人の目にお塗りになられました。

みんなは人間がどのようにして神さまに造られたか覚えていますか。土のちりで作られたのでしたね。そして神さまの命の息を鼻から吹き入れられたのでした。そうして、人間は人間になったのでした。先生は、このイエスさまのふるまいがまるで、そのようなことを思い出させてくださるためであったかのように思えるのです。

イエスさまは、そればかりか、「シロアムの池に行ってお洗いなさい」ともお命じになられました。ヨハネによる福音書を書いたヨハネさんは、シロアムというのは、「遣わされた者、つまり、お仕事をするために送り出された者」という意味なのですよと教えてくれました。つまり、ヨハネさんは、「天の神さま、天のお父さまのお仕事をするために送り出された人はイエスさまなんだよ。だから、イエスさまのところに行けばよいのだよ。」と、教えたがっているのです。

そして、この生まれながらの盲人は、イエスさまに言われたとおりシロアムの池に行きました。洗いました。するとどうでしょう。見えるようになったのです。時間がかかりましたが、このときこそ、神の御業が目に見えたのです。でも、大切なことは、イエスさまが「現れるためである！」

と宣言されたときに、神さまの御業は始まっていたのです。それなら、今朝、僕たち私たちにも、同じことが始まっていますよ。信じるあなたにも、必ず、神さまの栄光が現れます。

先生は、むかし静岡盲人伝道センターがある教会に行ったことがあります。多くの目が見えない人たちが通っている教会です。でも、みんな明るく元気に讃美歌を歌っていました。とても励まされました。生まれながら目の見えない人も、途中で目が見えなくなった人もおられました。この人のように、イエスさまを信じたのです。ところが、目が見えるようにはならなかったのです。それなら、やっぱりイエスさまを信じてもしかたがないのでしょうか。違います。その方々は、心の目ははっきりと開かれました。そして、目には見えない神さまを信仰の眼で仰ぎ見ることができておられるのです。そして希望をもって、イエスさまのお仕事をなさっておられました。

イエスさまは、続けてこうも仰せになられました。「わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。」ここでイエスさまは、「わたし」ではなくて、たしかに「わたしたち」って言われましたね。イエスさまを信じている僕たち私たちのことです。イエスさまだけではなく、イエスさまを信じている僕たち私たちも、イエスさまと一緒に、天のお父さま、神さまのお仕事をしなければならぬとお招きくださったのです。イエスさまは今、天におられます。たった今も、イエスさまは天のお父様の隣で、僕たち私たちのために働いておられるのです。

この人は、イエスさまの弟子の一人になって行きます。僕たち私たちの先輩なのです。私たちも、おかしなことを言われて悲しんでいるお友達や、怖がっているお友達に、「イエスさまを信じれば大丈夫。イエスさまのところ、教会と一緒に行きましょう。」と声をかけて行きましょう。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 9章3節後半

本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。

神の業がこの人に現れるためである。

〈ねらい〉

イエス様は、目の見えない人がそうなったのは誰かのせいではなく、神様の業がその人に現われるためである、とおっしゃいました。私たちは過去ではなく、これから神様に従っていくことによって、恵をいただくことができるのです。だれでも神様に従うとき、限りない希望が与えられます。そのことを感謝しよう。

〈展開例〉

関教会に、90歳の古田さんというおばあさんがいらっしやいます。古田さんは、小さい頃から目が見えません。私たちは古田さんが大好きで、尊敬しています。イエス様を心から信じてみえて、とても優しいすてきなおばあさんです。毎週朝、夕の礼拝に出て、御言葉を一生懸命学んでおられます。私たちは古田さんから教えられることがたくさんあります。目に見える人には信じられないほど、何でもできます。マフラーやセーターを自分で編んで着ておられます。手で触れることで、まるで目で見えているようにわかるのです。イエス様を信じる時、心の目が開かれ、光が与えられ、見えるようになることが、ここに証明されています。

生まれつき目の見えない人を見かけたとき、イエス様に弟子の一人が聞きました。「この人の目の見えないのは誰のせいですか？」するとイエス様は、「それは神様の業が、その人に現れるためです。」と言われました。そして泥を唾でこねて目につけ、シロアムの池に行き洗うように言われました。みんなだったらどうするかな？「そんなことをしたら、よけいに目が汚くなって、よけいに悪くなってしまふよー。」って言うかも知れないね。でも、その人がイエス様に言われた通りにすると、目が見えるようになりました。

イエス様に素直に従うことによっていやされたのです。目が見える私たちも、神様の前では見えない人と同じです。過ぎ去ったことにとらわれなくてもいいのです。神様はすばらしいことをして下さいます。悲しんだり怖がったりしているお友だちに、「イエス様を信じれば大丈夫。イエス様のところ、教会に、一緒に行こう。」と言ってみましょう。

〈おいのり〉

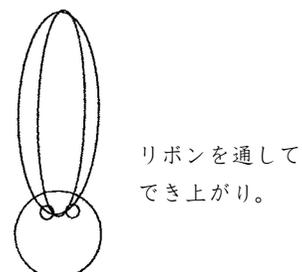
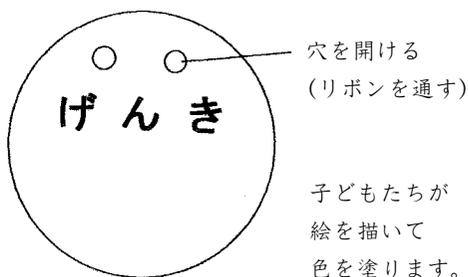
弱い私たちが不幸だと思っているところに、神様は光を当てて下さり、強く生きていけるように導いて下さることを感謝します。

〈やってみよう〉

「元気メダル」をつくらう

【用意する物】 厚紙（ワッペン用）、リボン、色鉛筆か色ペン

今日は敬老の日です。おじいさん、おばあさんの健康を願って、「元気メダル」をプレゼントしよう。



〈ねらい〉

わたしたちにとって、困ったこと、嫌なこと、つらいことの中に、意外にも、神様の最もよく、賢く、力強い、考えやご計画が隠されていて、それが行なわれることを通して、神様の御栄光が現されることを知る。

〈展開例〉

1. 生まれつき目が見えないとはどういうことでしょうか。想像してみてください。

⇒光、色、形、まわりの人の姿、自分を見守る人のまなざし……などが、分からないとは？子どもたちと一緒に考えて見ましょう。

2. 礼拝のお話に出てきた、生まれつき目の見えない人は、どうして見えないのでしょうか。あなたのまわりには、生まれつき目の見えない人や、体の不自由な人はありますか。どうして、生まれながら、障害をもっているのでしょうか。その人や、その人の家族が何か悪いことをして、「罰が当たった」のでしょうか。

⇒因果応報の考えから解放されていることを伝えたい。その一方で、罪の深みにはまり込まないための警告・神様の愛の鞭としての罰はあるかもしれません。(エレミヤ31:27以下参照)

3. イエス様は、何のために、生まれつき目の見えない人の目を開けられたのでしょうか。目を開いていただいた人は、何が見えるようになったのでしょうか。行って目を洗うように言われた池の名前は何か。どのような意味がありましたか。

⇒文字通り目が見えるようになっただけでなく、神様の御業、御栄光、ご計画が見えるようにされました。また、イエス様のそばにいた弟子たちの信仰の目も開かれ、神様のわざのため共に働くことに招かれていることを悟りました。そして、わたしたちも弟子たちの後輩です。

4. あなたは、目が見えていますか。光、色、形、

まわりの人の姿、自分を見守る人のまなざし……などが分かりますか。わたしたちの見る本当の光とは何ですか。わたしたちを見守るイエス様のまなざしに気づきましたか。その光は、どうして本当の光なのでしょう。

⇒あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる(マタイ28:19~20)。主が共にいてくださることは、「わたしがそうなのです」(9節)ということのできる安心につながります。

〈おいのり〉

神様、わたしたちを暗いところから光の中へ、罪から命へと救い出してくださいましたことを感謝いたします。わたしたちにとって、困ったこと、嫌なこと、つらいことの中にも、神様がよいと考えておられるご計画のあることを分かるようにさせてください。また、困ったこと、嫌なこと、つらいことの中にある家族や友だちを思いやり、助けることのできる子どもとならせてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。



神の業がこの人に現れるためである。

〈ねらい〉

今日の目の見えない人が見えるようになった話には、霊肉の両面の変化が語られていることを学ぶ。

〈聖書の言葉〉

業、遣わず、物乞い

〈展開例〉

①2節で、弟子たちはなぜ目の見えない人を見かけて「だれが罪を犯したのか」と聞いたのでしょうか。

→当時のユダヤ人たちの常識として、障害があるのは罪によるのだという迷信があったからです。このような考え方は、社会的強者である健常者が弱者である障害者を差別するもので、今日では決して許されることではありません。しかし、このような差別は現代日本でも起こりうることを注意しておかなくてはなりません。また、迷信ではなくとも、科学的因果関係ということで犯人探しがされることもあるかもしれません。しかし、そのような知識は、人の罪を助長し、人を傷つけるだけで救うことはできません。

②では、イエスさまは何のためにこの人の目が見えないのだと答えられましたか（3節）。

→イエスさまは、誰の罪のせいでもなく、「神の業がこの人に現れるため」と明言されました。これは、イエスさまの教える信仰的な考え方が、①に述べたような常識的な考え方とは根本的に違うことを示しています。

③イエスさまの言葉によってこの目の見えない人に奇跡が起きました。この人に起こった二つの良いことをあげてみましょう（7、9～12節）。

→一つは、イエスさまの言われたとおりシロアムの池に行き、目を洗ったら見えなかった目が見えるようになったことです。もう一つは、（う

やむやにしようと思えばできないこともなかったのに）自分がイエスさまに従っていることをはっきりと告白したことです。ここで、前回のベトザタの池にいた人と比較してみると良いでしょう。ベトザタの人の方は、周りのユダヤ人たちにイエスさまに従っていることを非難されるとすぐにイエスさまを悪者にしてしまいました。これではイエスさまに従っているとはいえません。しかし、今日の目が見えるようになった人は、イエスさまに従っていることを明らかにし、イエスさまを悪者にすることはありませんでした。両者の場合に共通して、イエスさまの側に立つことは多くのユダヤ人に敵対することになり危険なことでした（13～34節に具体的に語られています）。けれどもこの人はそれを承知でイエスさまに従っていると公言したわけです。これは、罪の支配にとどまることから決別し、イエスさまの僕として歩み始めたことを意味しています。

④その二つのうちどちらがよりすばらしいことだと言えますか。

→子どもたちは目が見えることの方に価値を見出すかもしれません。確かに、目がみえるようになる奇跡はとてつもなくすばらしいことです。しかし、聖書の語るメッセージは、これが単なるしるしに過ぎないということを語りたいと思います。すなわち、イエスさまに従うことを決心し、救いに入れられるということは、目が見えるようになることよりはるかにすばらしいことなのです。それは、ベトザタの人の話が、病氣は癒されたものの希望のない状態にとどまってしまったことと比較するとよくわかります。ですから、ここで目が見えるようになったということは、信仰的な目が開かれたという比喻でもあります。逆に言いますと、健常であっても信仰的な目が開かれていない人は困難で悲惨な状態なのです。

〈ねらい〉

神様の御業が現されることを信じる。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

※質問例は、それぞれのクラスの実情に合わせてアレンジしてください、解答例は子供達の答えを補足したり、教えたりするのにお用いくださいと思います。

Q. 弟子達はイエス様に、生まれつき目の見えない人のことでどのように尋ねましたか？

→この人の視覚障害の原因について尋ねた。

Q. 弟子達の質問は当時のユダヤ人の障害や苦難に遭っている人に対する見方を反映していると言えます。しかしこれは約2000年前のユダヤに特有の見方でしょうか？ こういった見方に関して、見聞きしたことがあれば話してください。

→時代と場所を越えて世界中で今もこのような因果応報の考えがなされている。自分や家族の苦境が前世の因縁や悪いことをしたからと言われ、高い壺を買うように勧められたりすることもある。周囲の人々の差別と偏見が当人とご家族の苦しみをどれだけ増していることだろうか？ その聖書的典例としてヨブ記の苦難の人ヨブの友人達がいる。彼らは因果応報の考えに凝り固まっており、ヨブが正しく、罪を犯していないなら、どうして財産、家族を失い、皮膚病となって生きながら死人のような有様にヨブがなるだろうかと言って、慰めるどころか、かえってヨブの悩みを深める結果となった。神様は彼らが御自分に

ついて正しく語らなかつたとおっしゃられた。

Q. 生まれつき目の見えない人の障害の原因を尋ねた弟子達とイエス様では、同じ人の同じ状態を見ても決定的に見方が異なりました。これこそ私達が障害や苦難に遭っている人を見て考える時の見方であり、私達は悩んでいる本人や家族にこの福音を伝えなくてはなりません。イエス様はどのように見られたのでしょうか？

→生まれつき目の見えない人の障害の原因を問うのではなく、目的をご覧になられた。過去の原因を探るのでなく、将来彼の上を実現する神様の目的という視点で現在を見られた。これが弟子達を始めとする当時のユダヤ人と、世の人達とイエス様の異なる点である。

Q. イエス様が「神の業がこの人に現れるためである。」(3節)とおっしゃったことは、どのように実現しましたか？ 私達にはどうでしょうか？

→彼はイエス様に目をいやしていただいた。先週学んだベトザタの池の病人のようにイエス様を裏切って、これからは自分の好きなように生きることが出来たはずであった。しかし彼はユダヤ人たちの前でイエス様を弁護し、会堂から追放されて村八分とされた。そのことにおいてイエス様と共に「わたしをお遣わしになった方の業を」(4節)を行なった。そのようなイエス様と共に働く、霊的にも目が見えるまことの信仰者となることにおいて、神の業は彼に現れ、そして私達に現れるのである。

4. お祈り

障害や苦難に遭っている人に、私達に神の業が現れるように。

※一人一人に祈りの課題を出してもらったり、自然に浮かび上がってきた課題を祈っても良いと思います。

テキスト ヨハネによる福音書11章1～44節

ヨハネ福音書11章は、ベタニアのマリア、マルタ姉妹の兄弟ラザロの身に起こった死と、死からのよみがえりの出来事を通して、主イエスの復活の先取りが示され、主イエスに働く死の力に勝つ命の力が示されます。

(1) ラザロの死 (1～16節)

ヨルダン川の向こうの地に活動していた主イエスの許に、マリア、マルタ姉妹から、ラザロが重篤であることが告げられます。主イエスはそれを受けて「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。」と言われて、すぐに助けに行くのではなく、むしろ二日間滞在されます。そして主はラザロの死を予知され「わたし達の友ラザロは眠っている。しかしわたしは起こしに行く。」と告げます。弟子達は真に眠りと思ったが、主の言われる「ラザロの眠り」は、彼の死を意味しました。

(2) 主イエスは復活であり命である (17～27節)

主イエスがベタニアに着いたとき、ラザロは葬られて既に四日も経過していました。主イエスを出迎えたマルタは「主よ、もしここにいて下さったら彼は死ななかつたでしょうに。」と嘆きます。しかし主の慈しみ深さを知るマルタは、心からの信頼をもって「あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえて下さると、わたしは知っています」と主に対する望みを抱きます。それに対して主は「兄弟ラザロは復活する」と言われました。マルタはその復活を、遠い未来の終末時の復活と早合点していました。しかし主は、遙か先の未来に望みを繋ぐのではなく、今目前にいる主ご自身が復活であり、命であると言われました。そして「わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」と、愛するラザロ

の死を悼むマルタに問われたのでした。それは兄弟の死の事実を前にしてなおわたしを信じるかと、永遠の命を信じる信仰を呼び起こす問いでした。

(3) 主イエスの怒りと涙 (28～37節)

マルタに促されて主イエスに会ったマリアも、泣き伏してマルタと同様の嘆きの言葉を主に告げました。主イエスは、マリアと共に泣くユダヤ人達の姿に、心に激しい怒りを覚え、かつ涙を流されました。主の心の激憤は死の闇の力の支配に対する憤りであり、流された涙は死の圧倒的力に嘆き悲しむ他なすすべのない、愛する者達への熱い同情と深い憐れみの涙でした。

(4) 主イエス、ラザロ生き返らす (神の栄光) (38～44節)

主イエスは再び心に憤りを覚えながら墓に向かい、「墓石を取り除けなさい」と命じます。しかしマルタは主の問いに「メシアと信じます」(11:27)と答えたにもかかわらず、死の暗黒の力の前に遺体の腐乱(死後四日経過)を予想したのでした。

しかし、主イエスは「もし信じるなら、神の栄光が見られる、と言ったではないか」と、弟子達への言葉(11:4)と、マルタへの言葉(11:25, 26)を思い起こさせられます。そして主は天を仰いで祈られました。祈りは「常に御心を求める祈りに応えて下さる神への感謝」と「今こそ、人々が主イエスが神から遣わされたことを悟るため」に捧げられました。

そして主が「ラザロよ出てきなさい」と大声で叫ばれると、ラザロは死から解き放され生き返って墓から出てきました。主イエスの声は、死を打ち負かしたのです。(佐々木弘至)

テキスト ヨハネによる福音書11章1～44節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問24, 36

〔単元のねらい〕

ラザロの生き返りは、主イエスの復活を指し示すしるしである。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」とおっしゃって、主イエスは十字架に向かわれた。この出来事が主イエスの十字架のきっかけになった（ヨハネ11：45－53参照）。主イエスの十字架と復活を礎として、わたしたちの復活の道、命に生きる道が切り開かれた。命の道を歩むことへと子どもたちを招きたい。

「わたしは復活であり、命である」

エルサレムにほど近い、ベタニアというところに、ラザロという人がいました。ラザロは、マルタとマリアの弟です。マルタとマリアのお話は、皆さん、おぼえていますか。主イエスをお迎えして、マルタはお世話をするために慌ただしく立ち働き、マリアは主イエスの足もとに座って話を聞いていた。「マリアがちっとも手伝いません」と言って非難したマルタに対して、主イエスが、「大切にすべきことはただ一つである」とお教えになった出来事です（ルカ10：38－42）。主イエスはしばしばマルタとマリアの家に滞在して、親しく交わりを持たれました。その二人に、ラザロという弟がいて、このとき、病気になっていました。それは、簡単な病気ではない、死んでしまうかもしれない、たいへんな病気だったようです。

このとき、マルタとマリアは、ラザロが病気であると、人づてに主イエスに知らせました。主イエスは、マルタとマリアはもちろん、ラザロのこともとても愛しておられました。ですから、ラザロが病気であると伝えたら、すぐ駆けつけて、いやして下さると思ったのです。けれども、不思議なことに、主イエスは、急いで駆けつけるということをなさいませんでした。知らせを受けてからなお二日間、同じところにとどまられたのです。

主イエスがようやくラザロのところに向かったのは、知らせを受けて二日たってからでした。そして、ラザロのところに向かう途中で、主イエスは、驚くべきことをおっしゃいました。「ラザ

ロは死んだのだ。わたしがその場に居合わせなかったのは、あなたがたにとってよかった。あなたがたが信じるようになるためである」。主イエスは、ラザロが死んだとおっしゃいます。いったい何ということであろうか。死んだことをご存じであるとは驚きですし、そうであるならば、どうして、すぐに駆けつけなかったのか。二日たってからなのか。すぐに駆けつけて、いやして下されば、助かったかもしれないのに、と思います。

主イエスがベタニアに着くと、おっしゃったとおり、ラザロはすでに死んでいました。ユダヤでは、人が死ぬとすぐに墓に葬ります。死んで墓に葬られて、すでに四日もたっていたのです。ひょっとすると、主イエスに知らせが届いたときには、ラザロはすでに死んでいたのかもしれない。それで、むしろ、このラザロの死を無駄にしないということを考えられたのかもしれない。

主イエスが来られたと聞いて、マルタはすぐに主イエスを迎えに出ました。けれども、主イエスに対して出てくる言葉は、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」ということばかりです。いったいどうして、ここにいてくださらなかったのですか、すぐ駆けつけてくださらなかったのですか。いけないと思っても、そんな言葉があふれ出てしまいます。主イエスは、そのように取り乱しているマルタに静かに語りかけます。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生

きる」。続いて主イエスは、マリアを呼び出しました。やはり取り乱していたマリアに対しても、主イエスは、マルタのときと同じように、「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」と語りかけたでしょう。

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」。この主イエスの言葉が、このとき、彼女たちの心にどれほど届いたのでしょうか。難しかったであろうと思います。主イエスがおっしゃったことは、人間的にはとても理解できないこと、受け入れられないことだったからです。「わたしは復活であり、命である」。復活とは、いったい何のことでしょうか。「わたしを信じる者は、死んでも生きる」。「わたしを信じる」はともかく、「死んでも生きる」などということがあるのでしょうか。人間の命は死んだらおしまい。それがふつうではないのでしょうか。「命あつての物种」なのであり、死んでしまったらそこでおしまい。それが当然です。

ですから、マリアはなお泣き続けますし、一緒にいたユダヤ人たちも泣き続けます。ラザロは死んでしまったのですから。愛する者、大切な友を失って、悲しんで泣くことが当然なのです。

主イエスは、そのように泣いている彼女たちを見て、心に憤りをおぼえられました。いったいどうして泣くのかと、人をとらえて離さない死の力に対して憤ったのです。そうして、主イエスはラザロの墓に向かわれます。主イエスご自身が死の力とたたかってくださいなのです。ユダヤでは、墓は洞穴のように掘られていて、その中に遺体をおさめ、入口に石を転がしてふたをします。ラザロの墓のところに行って、主イエスは、ラザロの墓の入口をふさいでいた石を転がすよう命じられました。マルタが主イエスに、「もう四日もたっていますから、においます」と言います。そうです。四日もたつと、遺体が腐ってきて、におってしまう。けれども主イエスは、石を取りのけるよう命

じて、お祈りをささげ、大声で叫ばれました。「ラザロ、出て来なさい」。すると、どうでしょうか。死んでいたラザロが、手足を布にまかれたままで、葬られたときの姿そのまま、出て来たのです。こうして、主イエスは、死んでいたところから、ラザロを呼び出されました。ラザロを生き返らされたのです。

主イエスは、このラザロの出来事をおして、大切なことを教えておられます。ラザロはすでに死んで四日たっていました。それは、ただ眠っていたのではない、本当に死んでいたということの証です。その、本当に死んでいたラザロを命へと呼び出して、主イエスは教えておられます。主イエスは、まことの神であり、人に命を与えるお方である。それは、死んでいた者を生き返らせる。そのような力をお持ちなのです。ふつう、人は死んでしまえばそれでおしまい。誰も「死」という乗り越えることのできない壁があると思っています。しかし、実は、「死」ということを乗り越える神のみわざ、復活ということがあります。主イエスは、ご自身こそが「復活であり、命である」とおっしゃいました。それゆえ、主イエスを信じる者は、たとえ死んでも生きる、そのような復活の命を生きることができるのです。

このときのラザロは、そのしるしとして、再び地上の命を生きる幸いを与えられました。このときのラザロの生き返りは、その点で、ただしるしであるだけです。しかし、主イエスは、まさにこのあと、復活の命の初穂となるために、十字架につけられてくださいました。主イエスはよみがえられて、わたしたちにそのご自身の命をくださったのです。主イエスの十字架と復活が、わたしたちの復活の命の土台です。ラザロの病氣と死は、その神のみわざを指し示すしるしにほかなりません。主イエス・キリストを信じて、たとえ「死んでも生きる」、そのような、神の御力にあふれる、真実の命に生きて参りましょう。（望月 信）

[今週の暗唱聖句]

ヨハネによる福音書 11章25節

わたしは復活であり、命である。

わたしを信じる者は、死んでも生きる。

〈ねらい〉

イエス様がラザロを生き返らされたことを通して、主イエスご自身が復活であり命であることを知ろう。また、そのことを信じて受け入れ有ことができるように、イエス様の導きを祈り求めよう。

〈展開例〉

Q1 病気のラザロを助けるために、イエス様に早く来て下さるように願っていたマルタとマリアは、イエス様がようやく到着されたとき、何と言いましたか？

A1 「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。」と言いました。

Q2 悲しみに泣いているマルタとマリアをごらんになったイエス様は、何と言われましたか？

A2 「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」と言われ

ました。

Q3 そして、イエス様はラザロのお墓の前に行き、何と言われましたか？

A3 「ラザロよ、出てきなさい。」と大声で叫ばれました。

Q4 死んでいるラザロは、イエス様に呼ばれて、どうなりましたか？

A4 生き返って、お墓から出てきました。

Q5 その後、イエス様ご自身も十字架にかかられて、死んだ後どうなりましたか？

A5 イエス様は復活され、天に昇り、今も私たちを守って下さいます。

〈おいのり〉

今日も教会に来ることができて感謝します。復活であり、命であるイエス様を、救い主と信じていることができるように導いて下さい。今日から始まる一週間もお守りください。

〈やってみよう〉

ぬり絵をしよう



〈ねらい〉

ラザロになされた神様の御業を通し、神様の御栄光やご計画（死とよみがえり）が明らかにされる。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。」と、イエス様が示してくださった復活の命に、わたしたちも連なっていることを学ぶ。

〈展開例〉

1. イエス様とラザロ、マリア、マルタとはどのような間柄だったのでしょうか。

⇒イエス様は彼らを非常に愛しておられました。また、わたしたちの友とも呼んでいました。(5、11節参照)

2. どうしてイエス様はすぐにベタニアに行けなかったのでしょうか。

⇒ラザロが亡くなる前に到着していたら、マルタの言うように、イエス様はラザロを癒すことができたかもしれません。しかし、それ以上のご計画がイエス様にはあったことを伝えましょう。

3. イエス様のことを信じる人は死んでも生きる、また、決して死ぬことはない、というのはどういうことでしょうか。

⇒わたしたちが、今の体のまま永遠に生き続けることはありません。(コリント二5：1-10参照)しかし、イエス様のことを信じる人にとって、死は死でなくなります。死は最後まで絶望でもなくなるのです。また、神様は、御子を信じる人が、一人も減びないで永遠の命を得させようとするほどの愛を示してくださっているとともに(ヨハネ3：16)、そう信じることができるよう、御自分の霊を分け与えてくださいます(ヨハネ4：13)。

4. ラザロが亡くなったことを悲しむマリアやマルタ、一緒にいた人たちが泣いているとき、なぜイエス様は、悲しみだけでなく心に憤りを覚えたのでしょうか。

⇒愛する友ラザロの命を奪った死に対して強い憤りを感じました。それと同時に、「わたしは復活

であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」という御言葉が、素直に受け入れられないことに対しても憤られたのかもしれませんが。

5. なぜイエス様はラザロを生き返らされたのでしょうか。マリアやマルタを喜ばせたり、びっくりさせたりするためだったのでしょうか。

⇒聖書の本文には書かれていませんが、ラザロは再び亡くなった(はずです)。イエス様がまず初めに、本当に死に、そこから復活なされることを通して、死に打ち勝つ神様の力を示されます(コリント一15：20参照)。ラザロを生き返らせたことは、その予告であり、神様がイエス様を遣わされたことの証してした(42節)。

6. お墓の外は明るく、生きている人々がいるのに対し、お墓の中は暗く、死んだ人が横たわっています。その間に大きな石が壁のように立ちふさがっています。イエス様の言葉がその壁を取り除き、命の光となってお墓の中に射し込みます。すると、私たちが、朝日がまぶしくて目を覚ますように、ラザロは生き返りました。

7. 生き返らされたラザロやマリアやマルタ、その場にいた人たちは、その後どうなったのか考えて見ましょう。

⇒その後、間もなく逾越祭を迎え、その最中にイエス様は逮捕され、十字架につけられ、三日目に甦られました。ラザロはこれらのできごとを、どのように受け止めたのでしょうか。

8. 死んでもよみがえるということを、ゲームのように短絡的に考えて、命を軽んずる危険性にも配慮が必要かもしれません。

〈おいのり〉

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。」とイエス様は言われました。「主よ、信じます。」と答えられる子どもとらせてください。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

☆今日の聖書箇所は長いので、11章17～44節に絞って学びます。

〈ねらい〉

イエスさまは、死の力にも打ち勝つことのできる方であることを学ぶ。

〈聖書の言葉〉

御覧になる、葬る、承知する、復活する、○メシア、耳打ち、憤り、○神の栄光

〈展開例〉

①今日のお話に出てくる病人ラザロとマルタ、マリアとはどういう関係ですか（11章1節）。

→毎回登場人物が変わるのでついていけない感じがあるかもしれません。まずは人物関係からおさえましょう。ここで登場するラザロはマルタ、マリア姉妹の兄弟でした。イエスさまとこの兄弟姉妹たちはとても親しい間柄で、イエスさまは彼らをととても愛しておられました（5節）。舞台はエルサレムに近いベタニアの町です。

②イエスさまがベタニアについたとき、病気だったラザロはどうなっていましたか（17節）。

→すでに死んで墓に葬られ四日もたっていました。人の死と葬りということは軽々しく扱いたくないものです。小学生くらいでは死ということの経験が乏しく、一方でドラマなどには偽物の死があふれています。死について短く経験を語りあうなどするのもいいかと思います。また、この場合の葬りということが、日本の多くの場合の火葬とは異なり洞穴に収める形であったことを注意します。

③マルタとマリアはイエスさまが来られたのを見て、まずどう思いましたか（21、32節）。

→マルタとマリアは姉妹でしたが性格はだいぶ違っていたようで、活動的で積極的なマルタと大人しく静かなタイプのマリアというふうと言

えると思われます（ルカ10：38～42）。けれどもいづれも最初に言ったことはラザロが死ぬ前にイエスさまが来られなかったことを嘆く言葉でした。これまでいろいろのイエスさまの奇跡を知っていた姉妹も、死ぬ前なら病気を癒してもらえるかもしれないと期待できましたが、死んでしまった今となっては絶望的だと思われたのです。人間にとっては普通の感じ方でしょう。それほど死とは決定的な出来事です。

④今日のお話でイエスさまは死者を生き返らせる奇跡をしますが、それは何のためですか（42節）。

→イエスさまが神さまに遣わされた方であり、生死をつかさどることのできる主であることを示すためです。イエスさまは、愛するラザロが死にかかっているのを聞いても急ぐ様子がありませんでした（11章6節）。それは、イエスさまが初めからこの奇跡を行うことを予定しておられたことを意味します。このことは、イエスさまご自身が言葉のみによって命を生み出したよみがえらせることのできる神さまであることを示します。また、終末においてすべての人間が復活させられるということの裏付けでもあります。けれども、イエスさまは人間の感情を無視した形で超越的に行動することはなさらず、死を嘆く姉妹の気持ちに寄り添いながら、死を克服する圧倒的な力をお示しになったのです。25節でマルタに語られるように（ここではマルタは文字通りに受けとめているようには思えません）、イエスさまは「復活であり、命である」方なのです。

〈ヒント〉

日本でよく行われる仏式の葬儀とキリスト教の葬儀の違いなどについて語るのも死について考えるよいきっかけかもしれません。特に、身近な方の葬儀の経験があればわかりやすくなることでしょう。

〈ねらい〉

復活の主を仰ぐ。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

Q. イエス様は、兄弟ラザロの死を嘆くマルタに復活を信じるかとおっしゃいました。私達自身の家族や教会で親しくしていた兄弟姉妹の死に直面した時にこそ、復活信仰の計り知れない恵みが際立つのです。復活ということについて、どのように信じていますか？

※話し合う中で、必要があれば教理的に補ってください。集まる子達の状態によっては配慮することも必要となります。教師自身が復活信仰の確信が強められた出来事などがあれば話しても良いと思います。

Q. イエス様はマリアたちが泣いているのをご覧になって、「心に憤りを覚え」(33節)、「涙を流された。」(35節)とあります。イエス様は何に怒り、涙を流されたのでしょうか？

→人を圧倒的に支配し、愛する者達を悲しみに打ちのめす死の力に対して主は憤られた。死の強暴な支配に屈したラザロをはじめ愛する者達の置かれた罪のもたらす悲惨への同情と深い憐れみの涙であった。

Q. 死後四日もたっていたのに、「ラザロ、出て来なさい」(43節)というイエス様の声によって彼は復活しました。ラザロの復活は私達に何を教えますか？

→イエス様には死の力に打ち勝つ復活の命の力があるということ。

Q. イエス様は、「死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を

聞いた者は生きる。」(5:25)、「生きていてわたしを信じる者は決して死ぬことはない。」(11:26)とおっしゃいました。これはどういう意味でしょうか？

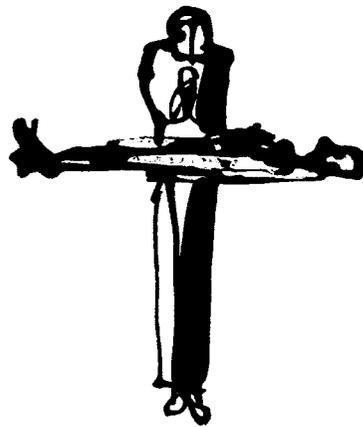
→イエス様を信じる者は、生きながらにしてよみがえりの命を生きる。死の力すらもその絆を断つことが出来ない、神様との永遠の命の交わりに生かされて生きるということである。

Q. ラザロの復活が指し示したイエス様の復活は私達にとって、どのような意味がありますか？(参照、Iコリント15:20)

→私達の復活の初穂。初穂とはその後に続く収穫全体を保証するものである。つまり、イエス様の復活は私達の復活の保証である。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」(11:25)とおっしゃった御約束を実現するためにイエス様は復活してくださったのである。

4. お祈り

イエス様を信じてよみがえりの命に生きれるように。



しかし、わたしは彼を起こしに行く。

テキスト ヨハネによる福音書19章28～30節

ヨハネ福音書19章は、主イエスの十字架による死と埋葬について語られますが、ここでは17節～30節の「主イエスの十字架と死」についての部分から学びます。

(1) 主イエスの十字架 (17～18節)

主イエスの十字架が、肉体的・精神的苦痛を暗示させることなく淡々と記されます。主イエスは自ら十字架を背負い、ゴルゴタ「されこうべの場所」へと向い、彼らはイエスを真ん中にして他の二人と一緒に十字架につけたと。ここに、神の御心によって、罪なき主イエスは罪人の一人に数えられ、罪人の身代わりとして神の裁きを自らお受けになったのです。

(2) 主イエスの罪状書き「ユダヤ人の王」(19～22節)

十字架の上に掲げられた罪状書きは「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と書いてありました。そして、そこが都に近いこともあり、大勢のユダヤ人がそれを読みました。それはヘブライ語、ラテン語、ギリシャ語で書かれていました。

それは総督ピラトがユダヤ人を皮肉る意味も込めた判決文として書いたもので、ヘブライ語はユダヤ人に分り、ラテン語はローマ人、ギリシャ語は当時の世界に通じる言語でしたから、世界中に「イエスはユダヤ人の王」であると宣明したのです。これに対し、ユダヤ人の祭司長たちは、「ユダヤ人の王」ではなく「『ユダヤ人の王』と自称した」と書き直すよう願い出ますが、ピラトはこれを断固拒否したのです。そして、これはピラトの思いを超えて、十字架の主イエスの御名が、世界中の国民に宣布されるという、神様の御心を宣言することとなったのです。→ヨハネ福音書12章32～33節

(3) 主イエスの十字架の下で (23～27節)

主イエスの十字架の下には、二つの異なる人々

の姿がありました。

一つは主イエスの服を分けあう四人の兵士たちです。彼らは上着類は一つずつ均等に分けあい、一枚織りの下着は籤引きで決めようと話し合いました。主は不信仰な罪人の身代わりに裸になられたのです。そしてこの事は、旧約詩編22編19節に、救い主の衣について預言された預言の成就でした。

もう一つは、主イエスの母マリアと母の姉妹、クロパの妻マリア、マグダラのマリアと主の愛する弟子ヨハネたちの姿でした。主イエスは母とヨハネを見おろして「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言われ、ヨハネに「見なさい。あなたの母です」と言われました。このとき主イエスは、十字架によって創りだされる、血肉を越えた新しい主イエスの家族の姿を指し示されたのです。

(4) 主イエスの十字架の死と勝利宣言 (28～30節)

その後、主イエスのご自分が果たすべき全てのことがなし遂げられたことを知り、「渴く」と言われました。それは詩編22編16節の言葉の成就でした。「口は渴いて素焼きのかけらとなり、舌は上顎に張りつく。あなたはわたしを塵と死の中に打ち捨てられる」。主イエスは、罪人の身代わりとして、真の人として最後の極みまで苦難を負われたことを告げる御言葉です。その苦難によってこそ主は、信じる者を救われるのです。

主イエスは、差し出された酸い葡萄酒を含ませた海綿のヒソブからこの葡萄酒を受けられると「成し遂げられた」と言って頭をたれ、息を引き取られました。

この「成し遂げられた」という主の言葉こそは、ご自分が神の御心を完全に果たし終えた勝利の宣言であり、凱旋の叫びとも言うべき御言葉でありました。(佐々木弘至)

テキスト ヨハネによる福音書19章28～30節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問24, 26, 28

〔単元のねらい〕

主イエス・キリストの十字架は、神の救いのみわざの歴史において、その頂点と言うべき出来事である。ヨハネ福音書を通して、神の救いのみわざが「成し遂げられた」ことを学ぶ。主イエス・キリストは、ただ一度、ご自身の肉をささげることによって、贖いのみわざを成し遂げてくださった。神の小羊としてご自身を引き渡して、罪の贖いを成し遂げてくださった。それによって、すべてこと足れり。わたしたちの救いの礎は築かれたのである。わたしたちは、もはや自らの力で救いを勝ち取ろうとする必要はない。ただこの恵みに感謝して生きるばかりである。

「見よ、神の小羊！」

救い主イエスさまの地上のご生涯は、おおよそ31年であったか、あるいは33年くらいであったと言われています。31歳か33歳くらいで、十字架につけられて死んでしまわれたのです。みんなのお父さん、お母さんはいくつくらいでしょうか。きっと31や33よりは大きいのではないのでしょうか。主イエスの地上のご生涯は、決して長いものではありません。

福音書は、その長くはない、主イエスの地上のご生涯について書き記しているのですが、実は、ご生涯のすべてを書き記すわけではありません。お生まれになったこと、クリスマスの出来事がもちろん記されていますが、たとえば、どんな少年時代を送られたのか、みんなと同じ年頃の出来事はほとんど書き残していません。ただ一つ書き留めているのは、12歳のときにエルサレム神殿で過ごされた数日のことだけです。そんなふうにして、福音書は、主イエスさまのご生涯のすべてを書き記すというのではなく、とくに大切なこと、これを知ってほしい、このことを伝えたいと、神さまが願っておられることを書き記しているのです。

主イエスの十字架は、そのようにして、福音書がとくに大切に書き記している神のみわざです。実に、福音書の三分の一くらいが主イエスの十字架のお話なのです。三分の一、いや、実のところ、福音書のすべてが主イエスの十字架に関係してい

ます。それは、福音書のすべて、聖書のすべてが主イエスの十字架を目指している。そのように言うべきであるほどなのです。

今日、一緒に耳を傾けた御言葉には、十字架につけられた主イエスが語られた二つの言葉が書き留められています。「渴く」ということと、「成し遂げられた」ということです。

主イエスの「渴く」という言葉を聞いて、周りにいた人たちは、のどが渴いたのかと思って、「酸いぶどう酒」を含ませた海面をヒソブに付けて主イエスの口もとに差し出しました。それは、決して主イエスののどの渴きをいやして差し上げようとしたものではありません。むしろ主イエスをあざけて差し出したのです。「酸いぶどう酒」とは、兵士たちが自分たちが飲むために用意していた安物のぶどう酒、酸っぱくなっているぶどう酒で、気付け薬のようにして、意識をはっきりさせるためのものです。酸っぱくて、目が覚めてしまうのです。周りにいた人たち、とりわけ兵士たちは、主イエスの意識をはっきりさせて、十字架につけられている苦しみをもっともっと味わわせよう、苦しみを増し加えようとしたのです。

実は、主イエスがおっしゃった「渴く」とは、のどが渴いたということではありませんでした。「渴く」とは、「父がお与えになった杯は、飲むべ

きではないか」(ヨハネ18:11)と云って、苦しみを引き受けることを決意を示されたように、御父が与えてくださる苦しみの杯をすべて飲み干そうとしておられる、一滴も残さず飲み干すことを言い表しておられるのです。そして、そのとおり、十字架につけられ、兵士たちの差し出した酸っぱいぶどう酒も確かに受けられて、意識をはっきりとさせて、苦しみをすべて味わい抜かれて、死んでくださいました。主イエスは、そのようにして、ご自身の受けるべき苦しみをすべて味わわれて死んでくださいました。

また、ヨハネ福音書は、「酸いぶどう酒」を主イエスに差し出すためにヒソブが用いられたと語っています。ヒソブとは、パレスチナの岩場に生える草なのですが、イスラエルの民がかつて出エジプトをするとき命じられた過ぎ越しにおいて用いられた植物です。小羊の血を鴨居と門の柱に塗るとき、ヒソブを小羊の血に浸して、そのヒソブで鴨居と門の柱に血を塗りました(出エジプト12:22)。ですから、ヒソブとは、ほふられた神の小羊を指し示しています。そのヒソブが用いられて、ここでは、主イエスの口もとに差し出されます。まるでそれは、ヒソブで主イエスを指差して、このお方こそ神の小羊、ほふられたまことの神の小羊であると言っているかのようです。いや、まさにそのとおり、このお方は、まことの神の小羊として十字架につけられ、すべての苦しみを引き受けて死んでくださいました。わたしたちの身代わりとして苦しみを味わい抜かれました。そのことによって、わたしたち罪人を罪から贖い出す神のみわがを成し遂げてくださったのです。主イエスが「成し遂げられた」とおっしゃったのは、そのような、神の小羊としてのみわがを成し遂げたということにほかなりません。

それは、旧約時代から、主なる神が一貫して目指しておられたことです。主イエスは、神の御子、また罪人の救い主として、ご自身の成し遂げるべ

きことを成し遂げ、聖書の言葉のすべてを実現されました。「聖書の言葉が実現した」(28)とは、まさに、旧約以来の神の御言葉のすべてが成し遂げられ、実現した。神の御心が成し遂げられた。ヨハネ福音書は、この短い御言葉によって、そのことをわたしたちに教えてくれるのです。

主イエスのご生涯は、この十字架に中心があります。そして、大切なことは、主イエスは十字架につけられて、死んでしまわれましたが、それは、すべてそれで好ましく、むなしくなってしまうということではありません。主イエスは、十字架につけられて、苦しまれて、そのことによって勝利しておられます。苦しみを味わうことによって勝利された。十字架とは、罪と死に対する勝利にほかなりません。ですから、主イエスは、三日目によりみがえられました。復活されたのです。

この主イエスの十字架の死は、わたしたちの罪の死にほかなりません。わたしたちが罪に死に、キリストにあって生きるために成し遂げられた神のみわがなのです。キリストの復活も、わたしたちの復活の初穂としての復活です。イエス・キリストの十字架と復活によって、神と共に生きる、とこしえの命へと復活することが実現しました。たとえ死んでも生きる、そのような信仰者の勝利の道が切り開かれました。こうして、わたしたちも、この主イエス・キリストの十字架によって、すでに勝利を得ています。もうすべて、ことは成し遂げられている。罪の贖いは成し遂げられた。わたしたちの救いの礎、土台は、キリストにおいて確かに据えられました。わたしたちは、この主イエス・キリスト、神の小羊なるお方を見つめて、このお方を仰いで生きればよいのです。わたしたちは、この主イエスの恵みに感謝して、自らを主イエスにささげて、神に従う者として生きるばかりです。何と幸いなことでしょうか。(望月 信)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 19章30節

イエスは、このぶどう酒を受けると、
「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。

〈ねらい〉

神様の一方的な愛を覚え、イエス様の十字架の示す神の小羊としての意味が、私たちへの恵みと知り、この救いの業を受け入れ、感謝するようになる。

〈展開例〉

私たちは、わざと意地悪をすることがあります。また、意地悪をするつもりではないのに、お友だちを泣かせてしまうこともあります。嘘を言うこともあります。何でかわからないのに、お母さんに「だめでしょ」と言われることもあります。それは、誰でも生まれながらに、神様から嫌われる、罪を犯す性質をもっているからです。

悪いことをすると叱られます。赦してもらうためには、罰を受けなければならないのです。

皆さんのお父さん、お母さんの宝物が〇〇くん、〇〇ちゃんであるように、神様の宝物はイエス様です。そして、神様は私たちをととも愛しています。愛しているから、イエス様という宝物を私たちのところに送って下さいました。

イエス様は神様の真の子どもですから、罪を犯すことはできませんでした。神様を愛し、人々を愛されました。神様のことを多くの人にお話し

した。病気の人を治してあげました。淋しい人の友だちになりました。お腹の空いた人に食べ物を与えました。私たちがしなければならぬことを全てして下さったイエス様は、罪人の私たちの友だちとなってくれたのです。

イエス様は、十字架に付けられました。何一つ悪いことをしなかったのに、悪い心に負けて苦しむ者や、悲しむ者のために、十字架の上で苦しみを受けました。この私たちを罰から守るためでした。でもイエス様は、ご自分を十字架に付けた私たちや周りの人たちのことを悪く思ったりしません。反対に、十字架に付けた人たちのために、「赦して下さい。」とお祈りをして下さいました。そして、イエス様は大きな声で、「わたしがしなければならないことは、みんな行いました。」と叫んでから、死なれました。イエス様は、罪の罰を背負い、私たちを神様の国に導く自分の役目を全部、耐えて果たされたのです。

〈おいのり〉

イエス様を私たちの罪の代わりにして下さい、ありがとうございます。これからもイエス様を信じていくことができるようにして下さい。

〈やってみよう〉

言葉さがし

右の聖句は、十字架のすばらしさを表しています。

アンダーラインの部分は空白にして、B紙(模造紙)に大きく書いたものを用意して下さい。

子どもたちに見せ(読んでやり)、空白の部分に入る言葉が何かを考えさせて下さい。

☆「足」「口」「頭」「耳」「鼻」「手」「口」などを簡単な絵で表したものを用意して、ヒントにしてもいいです。

め が見もせず、 みみ が聞きもせず、
人の こころ に思い浮かびもしなかったことを、
神はご自分を愛する者たちに準備された。

(コリントー2:9)

〈ねらい〉

イエス様の十字架は、神様による救いの御業の成就である。本当の神様の御子が本当の人となられ、罪深い人の身代わりとして刑罰としての苦難を味わい尽くしてくださった。この苦難によって、私たちを罪と悲惨の状態から救い出し、義とする道を開いてくださった。信じる者を救われる愛の神をほめたたえたい。

〈展開例〉

1. 福音書とはどのようなものでしょう。福音書について、特に大切なことは何ですか。

⇒福音とは良い知らせのことで、福音書にはイエス様の生涯について書かれています。ただし、普通の伝記とは違い、イエス様の生涯のすべてではなく、特に死と復活を教えとともに記録しています。パウロもコリントの信徒への手紙一に、「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてある三日目に復活したこと」（15章3、4節）と書いています。

2. 十字架とは何でしょう。また、イエス様は十字架につけられるような悪いことをなされたのでしょうか。

⇒この当時（約200年前のローマの属州）、死んでお詫びをしなければならぬほど重い罪を犯した奴隷は十字架につけられました。奴隷でもないのに十字架つけられて死ぬことは、より恥かしく忌み嫌われるものでした。もちろん、イエス様には死刑にされるような罪も理由ありませんでしたが、罪人の一人として、多くの罪人の身代わりとして神様の裁きをお受けになったのでした。

3. イエス様は十字架の上で「渴く」と言われました。のどが渴いたのでしょうか。

⇒そばにいた人々は、イエス様ののどが渴いたと思ひ（十字架に釘付けにされると血が流れ、大変のどが渴くといわれます）、すっぱいぶどう

酒を飲ませようと思いました。しかし、本当は、罪人として神様に見捨てられたイエス様は、神様を慕い求めて「渴く」と言われたのかもしれませんが（詩編42：2、3）。

4. イエス様は十字架の上で「成し遂げられた」と言われました。何が成し遂げられたのでしょうか。

⇒罪のない神様の御子イエス様が、すべての罪人が受けるはずであった罰を、身代わりとなって残らず受けることによって罪人を赦そうという、神様の愛のご計画が完全に実行されたのです。

5. 神様は、どうしてイエス様を罰したのでしょうか。また、イエス様の代わりに、誰か別の人が罰を受けることができますか。

⇒神様は御自分に似せてお造りになった人を愛しておられたので、人を罪の中から救い出そうと思われました。一方、神様は正しい方でもあるので、罪に対する罰をお求めになります。私たちは多くの罪を犯して、まず自分の罰を受けなければならないので、誰かほかの人の代わりに罰を受けることはできません。罪を犯したことのないイエス様だけが、ほかの人の罪のために罰を受けて死に、罪滅ぼしをすることができる唯一ひとりの方なのです。

6. キリストの十字架は、なぜ私たちにとって福音＝良い知らせなのでしょう。

⇒私たちの罪を完全に清めて、滅びの中から救い出して下さるものだからです。そればかりか、イエス様は十字架上の死から三日目によみがえられて、死にも勝利されました。私たちは、呪いに代えて祝福をいただき、イエス様の罪と死に対する勝利にあずかるものとされているのです。

〈おいのり〉

天の父なる神様、イエス様が私たちの罪のために死んでくださったので、私たちが赦されることになりました。また、あなたがイエス様をよみがえらせてくださったので、私たちも永遠の命に生きることができます。ありがとうございます。イエス様のお名前によってお祈りします。アーメン。

〈ねらい〉

キリストの十字架によって何が成し遂げられたのかを学ぶ。

〈聖書の言葉〉

海綿、ヒソブ

〈展開例〉

①十字架の上でのどが渇いたイエスさまに人々は酸いぶどう酒を差し出します。なぜこのぶどう酒は酸いのでしょうか。

→子どもたちはぶどう酒を飲んだことはないでしょう。ぶどう酒は甘味があったりはしますが、普通は酸いものではありません。このぶどう酒は、飲んで楽しむためのものではなく、気付け薬のように飲んで意識をはっきりさせるためのまずいものだったのです。ここでイエスさまがこのぶどう酒を飲まれたのは、十字架の刑罰をはっきりとした意識で苦しみぬかれようとしたためだと言えます。兵士たちは苦しんでいるイエスさまをさらに苦しめようと嘲りと悪意をもって差し出したのかも知れません。けれどもそれとは無関係にイエスさまはこれを飲んで自覚的に苦しみの刑罰を引き受けられたのです。

②前回のお話でイエスさまは死んだラザロを生き返らせる力がありました。それでは、なぜ今回はイエスさまが死んでしまうのでしょうか。

→今回の短い聖書箇所の中に二回出てくる「成し遂げられた」というのが何のことが問題です。これは苦しみの時が単に終わったということではありません。十字架の苦しみの意義は福音書には直接に示されません。コリントの信徒への手紙一15章3節に示されているように、イエスさまは「わたしたちの罪のために死んだ」のです。これを、わたしたちは贖いの死とか身代わりの死というふうに言い表しています。この意義を理解して再度先ほどの問いに立ち戻ると、なぜイエスさまが意識をはっきりとさせて苦し

みぬかれたかが理解できます。身代わりの死であるならば、中途半端なことでは意味をなさないことになるからです。ご自分のためではなく、ご自分を信じるあらゆる罪人が神さまから赦されるようにイエスさまは究極の刑罰を耐え、最後には死ななければならなかったのです。

③何も悪くないイエスさまが十字架で死んでくださったことにより、イエスさまを信じて従うわたしたちの罪はどうなりますか。

→このことを正確に理解するためには、旧約時代のいけにえや献げ物という前提にふれなければなりません。イエスさまはそれらに代わって唯一の、完全な献げ物となられたのです。そのことがヘブライ人への手紙10章に記されています。「ただ一度イエス・キリストの体が献げられたことにより、わたしたちは聖なるものとされたのです（ヘブライ10章10節）。」イエスさまを信じる私たちの罪は、その信仰によって清められ神さまによって赦されます。しかし、このところは、旧約の話を持ち出すと子どもたちにはしんどいかもしれません。イエスさまがわたしたち罪人の身代わりになってくださって刑罰を受けたのでわたしたちは赦されることになったということで留めておいた方が無難かもしれません。

④イエスさまの十字架の死は大昔の遠い国での出来事ですが、どうして今のわたしたちにも関係がありますか。

→イエスさまは時間も距離も関係なくすべての人間に救いをもたらすために完全な献げ物となられたからです。逆に言いますと、イエスさまは現代の日本に住むわたしたち一人一人の救いのためにも死んでくださったからです。わたしたちは、自分から求めるときにその救いを一人ももれなく受け取り、神さまに赦していただくことができるのです。

〈ねらい〉

救いの御業を成就された神様をたたえる。

〈展開例〉

1. 聖書をもう一度読む

2. 分かち合い

Q. 説教を聴いて教えられたこと、心に響いたこと、実行しようと心を動かされたことは？

Q. 分からなかったことは？

3. 質問例

Q. イエス様が「渴く」とおっしゃった時、「聖書の言葉が実現した。」(28節)とあります。

これはどういう意味ですか？

→イエス様の十字架上でこのような苦しみにより、詩編22：16、「口は渴いて素焼きのかけらとなり 舌は上顎にはり付く。」が実現したということ。私達の救いのためのイエス様の受難は、神様が予め預言されていたことであり、イエス様はそれを実現するために十字架にかかれたということを教える。

Q. イエス様が「渴く」とおっしゃったのは、長時間十字架にかけられていたための喉の渴きを訴えられたのでしょうか？

→そうではない。十字架にかけられる前に、「父がお与えになった杯は、飲むべきではないか。」(18：11)とおっしゃったのと同じ姿勢、すなわち、苦難を進んで受ける積極的従順の表れである。今や主は、その最後の一滴までも飲み干さんとする意志を示していらっしゃる。そしてイエス様は、「渴くわたしに酔を飲ませようとはします。」(詩69：22)の成就として、同情のためでなくあざけるための「酸いぶどう酒」(29節)を受けられて、私達の救いのために全ての苦しみを味わわれて死なれたのである。

Q. イエス様の十字架の死を敗北と見る人達があります。

イエス様が「成し遂げられた」(30節)と

おっしゃったのはどういう意味でしょうか？

→御自分が地上に遣わされた目的である救いの御業が完成したという意味である。「成し遂げられた」というイエス様の十字架場の御言葉は、救いが成し遂げられたことの栄光と勝利に満ちた宣言であった。

Q. イエス様が救いに必要な一切を成し遂げてくださったのなら、私達には何が残されていますか？

→成し遂げられた救いをたたえる生涯に亘る賛美、喜びと感謝をもって主にお仕えすること。

☆中国奥地への宣教師ハドソン・テラーの若き日の回心体験の一節が、御言葉の理解に役立つと思われるので、以下に紹介する。

『身代わりとなられたすばらしいおかたが、負債を払って下さった。『キリストはわたしたちの罪のために、否、わたしたちのみでなく、全世界の罪のために死んで下さった』。その時、次のような考えが非常にはっきりと心に迫ってきた。『すべてが完了し、借りになっていた分が、みな支払い済みになってしまったのなら、自分のすべきこととしては、何が残っているのだろうか。』彼の心には、ただ一つの解答があった。『ひざまずいて救い主と、その救いを受け入れ、いつまでも主を賛美すること以外に、この世になすべきことは何も残っていない。』『ハドソン・テラーの生涯とその秘訣』(いのちのことば社より)。

4. お祈り

すべてを成し遂げてくださった救い主への感謝。



「成し遂げられた」

第4課 神のかたち（第二戒）

第二戒

「あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及び慈しみを与える。」

チャップリンの映画に『街の灯』という作品があります。チャップリン扮する浮浪者は、想いをよせた盲目の花売り娘のためにあれこれ尽くすのですが、娘はそれが金持ちの紳士だと思い込んでしまいます。やがてチャップリンが手渡した大金のおかげで視力が回復した娘は、ある日偶然恩人と再会します。ところが娘は、目の前にいる浮浪者がその人だとは気づかないのです！

第二戒が求めていること

自分が愛される側になってみればすぐにわかることですが、相手がどんなに愛を示してくれたとしても、それが真の「わたし」に対してでなかったらどうでしょう。本人が目の前にいるのに、写真や像に対して愛を語ったらどうでしょう。あるいは、頭の中で勝手に造り上げた「わたし」のイメージを愛していたらどうでしょう。たといそれがどんなに深い愛だとしても、「わたし」への愛と受け止めることは困難ではないでしょうか。

第二戒が求めていることは、まさにそういうことです。私たちを愛してくださる生ける真の神を、この方にふさわしい仕方で愛することなのです。

像を造ってはならない

出32、申命4:15-16、ヨハ4:24、ウ小50。

神の像を造ってはならない最大の理由は、神の

お姿が見えないからです。しかし、見えないからということ、見えないから造るという理由にもなりません。事実、地蔵にせよ仏像にせよ、像そのものを拝んでいるわけでは必ずしもありません。それらを通して見えないものに対して手を合わせているのだ、とすることもできます。それでは、像を造ることの本当の問題は何なのでしょう。

出エジプト記32章の話は、まさにこの問題を巡るお話です。イスラエルの人々は決して異なる神々を礼拝しようとしたものではありませんでした。あくまでもエジプトから導き出してくださった神を礼拝しようとしたのです。けれども、問題は、彼らが見えない方を自分たちの考えたイメージに造った点にありました。彼らは、神を自分たちの理解できるもの・扱えるものにしたのです。神に従うよりは、神を自分たちに従わせたのです。

神が霊であられるのなら、私たちも「霊と真理をもって」礼拝しなければなりません。別に言えば、このお方にふさわしい仕方で礼拝しなければならない、ということです。たとい見える像を造らなくとも、私たち人間の心の中にはいくらかも偶像は生まれるものです。ふさわしい仕方で礼拝するためには、ですから、神御自身がお示くださった方法を知ることが必要です。その他の方法は（たといどんなに優れた方法であったとしても）このお方を真に愛する方法とはならないのです。

“神”をあらわすもの

詩編19、ウ小4、ロマ1:19-20・23、ヘブ1:1-2、ヨハ1:17-18、コロ1:15。

事実、神は、私たち人間が神を正しく知ることができるようにと、様々な方法で御自分を啓示なさいました。

第一に、この大自然です。「大空は御手の業を示す」と言われるように、自然界は神の力・荘厳さ・美しさ・優しさ・厳しさ・豊かさ等、多くのことを現す鏡です。けれども自然はあくまでも鏡であって、神御自身ではありません。また、人の主観でいかようにも誤解される危険があります。

そこで第二に、神は、御言葉を通して御自身をお伝えになりました。神の言葉である聖書自身ははっきりと神を啓示しています。自然界を通してぼんやりと現された神のイメージが、より明瞭に誤解することのないよう教えられます。

けれども第三に、神は、時至って御子をお遣わしになり、御子を通して御自身をあらわすことをよしとされました。私たちの主イエス・キリストこそ、見えない神の完全な現れです。とは言え、それは、神の顔かたちが示されたということではありません。聖書は不思議なほど、イエス様のお姿に関わる情報を伝えません。肉体を取って神を現されたというのは、ですから、その外形のことでなく、目には見えない神の「恵みと真理」が主イエスによって具現されたということなのです。

したがって、私たちの神にふさわしい礼拝とは、そのような目には見えない神とその恵みとが生き生きと実感され、主のみを仰ぎ見るような礼拝、と言えるでしょう。

生き生きとした礼拝

ウ大108、ジュネ144-148、列王上7:13-14、
イザ40:18-25、ハイデル98、ガラ3:1、
詩編103:8-13。

第二戒は、神を象る礼拝の禁止であって、必ずしも芸術活動全般を禁止しているわけではありません。芸術には芸術自体の価値があり、それは神が人に賜った恵みの一つでありましょう。しかし、音楽にせよ絵画にせよ、表しているのは真理の一面であって、すべてではないことを心に留めなければなりません。

宗教改革者たちが厳しく偶像礼拝を禁じたのは、芸術否定のためではなく命なき礼拝に対する批判からでした。私たちが心を注ぐべき生ける真の神は、物言わぬ偶像によってではなく、御言葉の生きた説教によって教えようとなさるからです。命なき偶像や絵画が恥ずかしく思えるくらい生き生きとした御言葉が語られること。まるでその場に神がおられるかのように(事実おられる!)説教がなされ、賛美や祈りが捧げられるためです。

それでも悟りの鈍い私たちのために、神は礼典をお与えくださいました。洗礼と聖餐を通して、神の恵みと真理を手で触れられるくらい具体的に

示してくださったのです。そうであれば、私たちは、神を現すためにそれ以上像を造り出す必要はない。少なくとも、生き生きとした礼拝に偶像など入り込む余地はないはずです。

私たちの神は、自ら「熱情の神」とおっしゃいます。まるで神がおられないかのように「否む者」にはその罪を三四代までも問うと言われますが、神を愛してその戒めを守る者には幾千代にも及ぶ慈しみを与えると約束なさいます。つまり、神は溢れんばかりの恵みを注ごうとしておられるのであって、私たちが小手先の造り物で満足してしまうことに我慢がならないのです。私たちの主は、そこまで私たちからの愛を求めておられる「熱情の神」です。吹けば飛ばすような罪人の心をひたすら求める方なのです。

神の像となる

創世1:27、60周年、ヨハ4:24、ロマ12:1-2、
Iヨハ4:12・20、マタ25:40。

生き生きとした礼拝は、私たち自身を生ける神の似姿へと造りかえる力を持っています。神の像として造られたにもかかわらず、罪によって壊れてしまったこの“像”を回復させるのは、キリストの御霊のみです。キリストにならい、神を愛し隣人を愛するという霊的礼拝を通して、私たちはキリストの似姿へと造りかえられて行くのです。

実際、目に見える兄弟を愛せなくて、目に見えない神を愛することはできません。偶像などではなく、神の像を担う一人一人の隣人を具体的に愛し仕えていくことこそが、「霊と真理」による礼拝と言えましょう。そうして、「最も小さい者」の一人にしたことが実は主に対してなされていたことを、私たちは終わりの日に知らされるのです。

ディスカッションのために：

- 1 心の中の偶像を取り除くためには？
- 2 教材として絵などを用いることはどうか？
- 3 信仰と芸術との関係について論じてみよう。
- 4 生き生きとした礼拝に必要なことは何か？

第5課 神の名前 (第三戒)**第三戒**

「あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。みだりにその名を唱える者を主は罰せずにはおかれぬ。」

名をあらわす神

出3:14-15、34:5、ヨハネ17:6、詩編83:19、イザヤ12:4、エレミヤ33:2。

あなたのお名前は何かと尋ねたモーセに、神は「わたしはあるという者。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主」と、御自分の名を明らかにされました。ところが、その「主」という名をみだりに唱えてはならないという戒めを文字通り守っているうちに、元々の発音それ自体がわからなくなってしまったというお話は有名です。YHWHという四つのヘブル文字で表された聖四文字(テトラグラマトン)を、今日、多くの学者はおそらく“ヤーウェ”と発音するのだらうと考えています。

しかし、本当に使ってはならないような名前であれば、神様は御自分の名を決して明らかにされなかったことでしょう。名をお知らせになったのは、御自分を私たちに知らせようとなさったからであり、むしろ私たちがそれをを用いるためなのです。大切なことは、その名前や発音が何かということではなく、それを「みだりに(=むなしく)」用いないということ。逆に言えば、神様の御名を正しく生き生きと用いることなのです。

神のリアリティー

申命4:7、28:58、詩編75:2、イザヤ50:10、エレミヤ23:24、マタイ12:34、ヤコブ3:2-12、レビ24:11。

名は体を表すと言われますように、名前はその人全体を表すものです。たとえ本人がいなくとも、名前を聞いただけでポツと赤くなったり震え上ったりするのは、最たる例です。逆に、他人の名前

を冗談に使うのは、その人自身をおとしめていることにはなりません。つまり、「神の名」とは、神に属するすべてのこと・神の御存在そのものということです。そして、その御名を軽々しく口にするということは、要するに見えない神に対する畏れの欠如ということなのです。

それは、神のリアリティーの問題と言ってもよいでしょう。しかもそれは、礼拝といった特別な時や場所の問題なのではない。私たちが「唱える」という、極めて日常的な場面における私たちの心の姿勢の問題です。なぜなら、心にあふれていることを口は語るものだからです。口の罪ほど軽々しく犯されやすい罪はありません。この戒めに、あえて「罰せずにはおかれぬ」という威嚇の言葉が加えられているのは、そのためでしょう。

人が見ていない時、誰にも気づかれない場所で、私たちがなおも神の御前にいるとの信仰をもって歩むことができるか。そのことが問われています。

主の名を呼ぶ

ウ大112、創世4:26、詩編50:15、ヨエル3:5、マタイ1:21、使徒4:12/マタイ6:9、ヨブ1:21、ヨハネ16:24、詩編8:2、63:7、ヘブ13:15/申命6:13、使徒18:18/ウ大113、エフェソ5:4、マタイ5:16、7:21、10:32-33、ロマ1:16、黙示3:8、ヤコブ2:7。

ただ漠然と神がいるということ、名前のある神がおられるのでは、存在感が違います。他とは区別された二人としない特別な存在となります。さらに、そこに呼びかける者との人格的な関係も生まれます。「わたしはあなただけに名を明かした“あなたの神、主”なのだから、他の名を呼ぶな、わたしの名を呼べ！」とお命じになっているかのようです。

主の御名を呼び求めるのは、告白や賛美や祈りや誓約など、神の御臨在を特に喚起する必要がある場合。あるいはまた、真理や愛や正義や誠実さなど神の御性質を表す必要がある場合です。そうして、神の名と神に関わるすべてのことを、思い

や言葉や行いを通して、神の栄光のためと私たち自身や隣人の幸せのために用いるのです——

【告白】主の御名を告白することは、人類最初から、礼拝行為そのものでした。しかし私たちの主は、それだけでなく、「苦難の日にわたしを呼べ」とさえ言われました。それは、私たちが救われるため、悲しみから立ち上がるためです。私たちの主は、その名も“イエス（＝救う者）”と神によって命名された方です。私たちが救われるべき名は、天下にこの名のほかにはありません。すべて主の名を呼ぶ者、信仰を告白する者は救われるのです。

【賛美と祈り】「御名をあがめさせたまえ」と祈るように、主はお教えになりました。御名を賛美することが、人間の究極の姿であり幸いに他ならないからです。順境の時も逆境の時も、どんな時でも万事を益としてくださる主が共にいてくださることを信じればこそ、私たちは御名をあがめることができます。

さらに、主は、何事であれわたしの名によって祈れとも言われました。主イエスによって、私たちが神の子どもとされたからです。罪に汚れた私たちの祈りが、主の御名のゆえに、香りよき捧げ物として御父のもとへと届くのです。昼も夜も、御名によって願いまししょう。「そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる」。

【誓約】誓約自体を、聖書は必ずしも禁じていません。しかし、洗礼式であれ結婚式であれ、およそ“神と教会の前で”誓うことは、まさに神の御前で誓っているのだということを感じるべきです。つまり、誓約という行為は決してその場限りのことではなく、むしろその後の生活全体において、神の御前で生きる姿勢が問われるのです。

【生活】キリスト教の用語や儀式がギャグや冗談の種となることは、日本のような異教国でもよくあります。それらは往々にして、元々の性格をゆがめ、自分たちのレベルにまで神を引き下げる世俗主義の現われです。

他方で、御名を厳肅に唱えることが敬虔さの証になるわけでも親しく呼びかけることが不敬虔なわけでも、必ずしもないのです。私たちの神は、ユーモアを解さない方ではありません。要するに、主の御名をどう用いるかは、その人と神様との関係にかかっているのです。大切なことは、何が主

の御名をあがめ何が損なうことなのかをわきまえることでしょうか。

主の御名が「みだりに」用いられないために、必要なことが二つあります。主への愛と隣人への愛です。人々の前で御名を恥じない勇氣と、主の御名のゆえに敵をも愛する愛です。その時、主の御名は、私たちのみならず、多くの人々によってあがめられるようになるでしょう。

——私たちの日常は、しかし、それとは程遠く、御名を汚す自分の罪を日々露呈するばかりです。けれども、そのような時になお、いえ、そのような時にこそ、呼び求める名があることの幸いを覚えるのです。

名を呼んでくださる神

イザヤ43:1、ヨハネ10:3、黙示2:17、14:1。

ちょうど神の御名が神御自身を表したように、私たちの名前もまた私たち一人一人の存在を表すものです。名前が剥奪されたり忘れ去られたりすることは、その人の存在が消されるのと同じです。逆に、戦没者や被災者のメモリアルに一つ一つの名前が刻まれているのは、その人々の存在を想起するためです。

御自分の名を明らかにして私たちの主となってくださった方は、私たち一人一人の名前（存在）をも、心を込めて呼びかけてくださる羊飼いです。“ザアカイ”“シモン”“マリア”とお呼びになる主の御声の、何と愛情に満ちていたことか！

そのように私たちを呼んでくださる主は、今や永遠に消し去ることのできない名を刻んでくださいました。私たちには神の御子イエスの名が刻まれているのです。たとい、すべての人から忘れ去られたとしても、なおこの方には覚えられています。私たちは、生きるにしても死ぬにしても、永遠にこの方のものであり続けます。何と言う慰め！

ディスカッションのために：

- 1 「名前」にまつわる思いを分かち合う。
- 2 主の御名を用いる様々な場面について論じてみよう。礼拝において、日常生活において。

第6課 安息の日 (第四戒)

第四戒

「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。」

安息日と主の日

出31:13-17、ネハ13:17-18、イザヤ56:2-7、
マタイ12:8、使徒20:7、黙示1:10、ウ小59。

時の流れを七つの日に区切り、しかも七日毎に休むという習慣は、おそらく旧約聖書に端を発する人類最古の習慣の一つです。

安息日は、神とイスラエルとの関係を規定する、重要な契約のしるしでしたが、後に世俗主義と厳格主義の間を揺れ動き、本来の意図は失われていきました。そのような安息日理解を根本から問い直され、本来の意味を回復されたのが、主イエスでした。この方こそ「安息日の主」です。やがて、十字架と復活によって罪と死の力から解放して下さったイエスを救い主と仰ぐ人々は、イエスが出現された週の初めの日(＝日曜日)に誰からもなく集まっては礼拝をささげ、その日を「主(イエス・キリスト)の日」と呼ぶようになりました。それは掟によるのではなく、福音への応答の結果です。

キリスト教会の歴史において、その後、日曜日を「主の日」と理解する立場と「安息日」として理解する立場とが現れました。しかし、私たちにあって大切なことは、神が本来意図し、イエス・キリストによって回復された戒めの“心”を理解し、そして従うことです。

聖別せよ

創世2:1-3、ウ大120-121。

十戒は、この第四戒に至って初めて、私たちの神が創造者であることに言及します。六つの日にわたって天地万物を創造された主は、第七の日に安息なされ、こうして万物は完成されたと創世記は語ります。ここには、万物と時間をつかさどる神の主権が、明瞭に描かれています。

第四戒が教えるのは、何よりもまず、この神の主権です。すなわち、私たちの人生のすべての時間も、その中で与えられる労働も家族も仲間も財産も、一切は主のものだということです。それらをあたかも自分のものであるかのように錯覚する私たちが、安息日を聖別する(＝神のために捧げる)ことによって思い起こすのです。

別に言えば、六日の間は働くことを通して主の恵みを味わい、七日目は休むことを通して主の主権を仰ぐということでありましょう。本来、すべての日が主のものであるはずなのに、一日しか主張なさないことに主の慈しみを覚えます。

息子も、娘も、男女の奴隷も

申命5:15、出22:20、マタイ12:1-14、
ウ大118。

興味深いことに、第四戒にはもう一つ別の理由が申命記に記されています。

「あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るよう命じられたのである。」

これは、私たちが休むことの原因ではなく、男女の奴隷たちを休ませねばならないことの原因です。荒れ野での放浪生活とは違って、約束の地カナンに入れば戦利品としての奴隷の数は飛躍的に増加します。また、定住生活ともなれば当然食べて行くための農作業が欠かせません。そうした中で、何があっても丸一日を休むことの困難は、荒れ野時代と比較になりません。仮に自分は休ん

でも、女や子ども・奴隷たちを休ませることなど論外、というのが当時の感覚でしょう。ところが、私たちの主は、彼らをも休ませよとお命じになるのです。

なぜか。それは、あなたもかつては同じように奴隷であったのに、わたしが解放したゆえに今を生きているからだ、と主は言われます。つまり、主は創造者のみならず救済者としても、私たちの生に主権を持っておられるということです。男や女、大人や子ども、主人や奴隷、敵や味方といった、あらゆる区別は問題ではない。生きとし生けるものすべてを憐れみ、弱い者・苦しむ者をお救いになる方が私たちの主であられることを、謙遜になって思い起こす日なのです。

祝福の日・休みの日

創世2:1-3、詩編118:24、マルコ2:27、
出23:12、ロマ8:21。

このように安息日を有無を言わず守るようにお命じになるのは、主が私たちを祝福なさるために他なりません。主は、第七の日を祝福のためだけに費やされました。私たちの世界も人生も、神の祝福なしに成り立ち得ないことは、聖書に無数に出てくる“祝福”という言葉が指し示すとおりです。神の祝福とは、まさに万物が良きものとして存在し続けるための根拠です。ですから第七の日は、何かをすることによってではなく、極めて良い世界の中でただ憩うことによって喜ぶ日、祝福を味わう日なのです。

そこには弱い肉体を持つ私たちが疲れ果てないようにとの創造者の思いやりがあります。まして家畜や家畜並みに働かされる人々に休みを与えよとの命令は、万物の命を育む神の大切な御心です。神のエコロジーとでも言えましょうか。

それだけではありません。何より私たち人間が、人間として回復されるために休むことが必要です。この世の営みに流される中で、家庭や人生の意味を見失い、非人間化していくことのないように、休みが必要なのです。「主が休まれた」と言われるのは、私たちが休むためです。神は休む必要などありません。私たちが休むために神は自ら模範を示されたのです。主に倣う者は幸いです。

永遠の安息に至るまで

ヘブ4:1-11、60周年、マタイ11:28、
ハイデル103、ヨハネ5:17、黙示14:13、
ヘブライ10:24-25。

人の罪によって無に帰した神の祝福は、終わりの日に再び完全に回復されます。その日、私たちは地上の安息ではなく、永遠の安息・栄光の御国へと新しいヨシュア（＝イエス）によって導き入れられるのです。私たちが地上にあって、主の日ごとに集まるのは、この永遠の安息を先取りする言わば練習です。

この日、私たちは主を仰ぎます。私たちを造り、私たちを愛し、私たちを再び造り変えてくださる主を仰ぎます。私たちの人生の主（あるじ）が自分自身ではないことを思い起こし、すべてを主にゆだねて休むことを学びます。

この日、私たちはこの世の業から解放され、主のうちに憩う喜びと平安を味わいます。罪の世界で心傷つき、この世の重荷に倒れそうな私たちに「休ませてあげよう」と語りかける主の御言葉に慰められます。

この日、私たちは男も女も、大人も子どもも、奴隷も主人も、共に神の子としての自由を味わい、共に主に仕える喜びを味わうために礼拝に集い、主にある交わりを祝います。

こうして、私たちは再びこの世の六日間の働きへと押し出されて行きます。創造の業を休まれた主は、世の救いのために今もなお働き続けておられます。御父も御子もただ私たちのために働いておられるのです。どうして私たちだけがあぐらをかいていられましょう。

世にある限り、私たちは、この創造のリズム・主の救いのリズムを魂と体に刻み込んで生きるのです。労苦を解かれ、永遠に憩う安息の完成まで、互いに励まし合って歩み続けるのです。

ディスカッションのために：

- 1 自分にとって主の日はどのような意味を持っているか。平日との関係はどうか。
- 2 主の日は喜びとなっているか。そうでないとしたら、それを阻んでいる理由は何か。
- 3 私たちにとっての「安息」とは何か。

教案誌会計報告

○教案誌編集部より

中部中会教育委員会発行『教会学校教案誌』は、日本キリスト改革派教会中部中会の事業として、中部中会に会計報告をし、会計監査を受けています。けれども、収入の多くが教案誌の売り上げと自由募金であり、教案誌上において会計報告をすることが必要であると判断し、2006年度分より報告させていただくことにいたしました。2006年度の教案誌会計は以下の通りです。なお、内容は、中部中会2007年度第一回定期会において報告したものと同一です。

教案誌会計（2006年2月18日～2007年2月20日）

収入		支出	
中会財務より	200,000	出版費	1,748,775
売り上げ（※1）	1,341,700	送料	106,040
自由募金（※2）	354,263	謝礼	103,382
		庶務費	14,424
		会議費	12,400
		交通費	20,130
		座談会費用（※3）	23,040
小計	1,895,963	小計	2,028,191
繰越金	1,123,396	繰越金	991,168
合計	3,019,359	合計	3,019,359

※1 講読教会数（第24号時点）

改革派教会が58教会、他派が5教会、計63教会

個人購読6名

定期購読部数（第24号時点） 305部

※2 教案誌自由募金 37教会団体・2個人

団体分内訳

【改革派教会】

八事伝道所、関キリスト教会、高蔵寺教会、宝塚教会、山田教会、恵那教会、四日市教会、千里摂理教会、豊明教会、高松教会、津島教会、多治見教会、松山教会、巨理伝道所、横浜教会、金沢伝道所、坂戸教会、青葉台教会、江古田教会子どもの教会、大屋伝道所、神港教会、山梨栄光教会、滋賀摂理伝道所、湖北台教会、熊本伝道所、関キリスト教会教会学校、筑波みことば伝道所、船橋高根教会、名古屋岩の上伝道所、稲毛海岸教会、奈良伝道所、札幌伝道所、綱島教会、那加教会、南浦和教会、芸陽教会

【他教派】

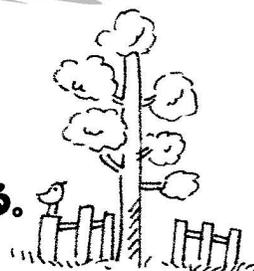
東京聖書学院

※3 2007年1月22日（月）に犬山教会で教育基本法改正に関する座談会を開催。教案誌第25号に掲載。

いのちのぱん

「わたしは命のぱんである。」

わたしは、天から降って来た生きたぱんである。



このぱんを食べるならば、その人は永遠に生きる。」

(ヨハネによる福音書 第6章48節・51節)

愛する日曜学校のお友達へ！

神さまのみ言葉、イエスさまのみことばは「命のぱん」です。毎日、食べてますか？

毎日、聖書を開いて、カテキスムを読んで、お祈りしたら、心は元気もいもりになるよ。

(聖書は、前と後ろのみ言葉もあわせて読むと、かんべきです。)

お母さんと一緒に読んでる友達、家族みんなで読んでるお友達…。

そしてお家で一人で読んでるお友達もたくさんいるよね。



君は、自分のことだけではなく、日曜学校のお友達のためにも、毎日、お祈りしていま

すか？「いのちのぱん」を使って、毎日お祈りしている全国のお友達のためにもお祈りして

くれるとうれしいな。そして…、君の日曜学校の先生のために、必ずお祈りしてほしい

な。だって…、あなたのために、先生も毎日、お祈りしているんだからね。

いっしょに、お祈りしてゆこうね！！

今週も、イエスさまの祝福が愛するお友達の上にゆたかにあいますように！

いのちのばん

<p>7月2日(月) 問7 ヨハネ4章24節 神は霊である</p> <p>目で見ることでも手で触ることでもできない、まことの神さまを知るには、信じるにはどうすればよいのでしょうか。お祈り、礼拝することです。目を閉じて、「天のお父さま」と呼んでください。ほら、心の目に映ってくるでしょう。今週も、毎日、家でも礼拝(お祈り)しようね。</p>	<p>7月5日(木) 問7 ヤコブ1章17節 御父には、移り変わりありません</p> <p>わたしたちの周りにあるものは、すべて古くなります。新しいおもちゃも、いつか壊れます。仲良く遊んでいたお友達と、いつか遊べなくなることもあるかもしれません。でも、神さまは、いつまでもあなたを愛し続けて変わりません。だから安心して、信じて行けますね。＼(^o^)／</p>
<p>7月3日(火) 問7 出エジ3章14節 わたしはあるという者だ</p> <p>君は今、たしかに、そこにいるよね。でも、神さまは、君がそこにいることよりもっと確かに君といっしょにいてくださいます。それだけではなく、今、〇〇ちゃんともいっしょにいてくださっています。神さまはすごいね。</p>	<p>7月6日(金) 問7 黙示録4章8節 かつておられ、今おられ、やがて～</p> <p>お祈りしているとき、神さまはわたしを包みこんで守ってくださることがわかります。神さまは霊だからです。昔も、今も、一緒にいてくださるイエスさまがこの地上に来てくださる日が近づいています。ですから、今日も、安心して、待っています。明るく過ごせます。</p>
<p>7月4日(水) 問7 詩編90章2節 世々としえに、あなたは神</p> <p>あなたにはお誕生日があるでしょ？でも、神さまにはありません。世界が造られる前、人が生まれる前から、そしてこれからもずっーとおられるのです。そして、神さまはあなたも永遠にして下さいます。</p>	<p>7月7日(土) 問7 ヘブライ13章8節 キリストはきのうも今日も、永遠に</p> <p>愛するイエスさま、私たちは、聖書を通して、すばらしいイエスさまのことを知りました。聖書に書かれているイエスさまが、今日も、変わらずにイエスさまであり続けてくださることを、ありがとうございます！私たちは、今日も、あの十字架の命がけの愛で愛されています。</p>



いのちのばん

7月9日(月) 問8 申命記6章4節
我らの神、主は唯一の主である

わたしたちの神さまは、ただお一人の真の神さまです。でも、お一人の神さまはひとりぼっちの神さまではありません。「唯一」というのは、一つだけという意味もありますが、「他のものとまったく比べることができない」という意味なのです。つまり、私たちの神さまだけが神さまなのです。

7月12日(木) 問9 出エジ20章3~5節
いかなる像も造ってはならない

自分のために手で触れ、目で見られるように造ったカミを偶像と言います。真の神さまよりえらくなって、自分の思うようにしたいからです。つまり、偶像を使って、自分を神さまにしてしまうことです。神さまがもっとも悲しまれ嫌われ悲しまれ憤られるのは、偶像をおがむことです。

7月10日(火) 問8 申命記6章5節
あなたの神、主を愛しなさい

神さまは、「唯一」です。だから、「心と魂と力」、あなたのすべてを尽くして、この神さまを愛しなさいと、聖書は教えています。他のカミを愛することはもちろん愚かなことです。唯一の神さまを「ちょっとだけ、ときどき」愛するのではなく、思いっきり愛することができますように！

7月13日(金) 問9 イザヤ44章9~22節
自分のための偶像を造り

天のお父さま、大勢の人たちが死んだ人を神さまとか仏さまとか言って拝んでいます。きつねやへびを拝む人もいます。太くて大きな木を拝む人もいます。どうか、多くの人たちがイエスさまを拝めるようにわたしを拜用してください。



7月11日(水) 問8 エレミヤ10章11節
主は真理の神、命の神、永遠を支配

わたしを愛し、喜ぶために命を与えてくださった命なる神さま。今日も、私たちに命があるのは、あなたのお恵みです。天のお父さま、今日もわたしの命を守り、喜んでくださるお恵みをありがとうございます。



7月14日(土) 問9 コリー8章4節
世の中に偶像の神などはなく

どうして多くの人たちは、星占いとか死んだ人の霊とか幽霊とかあたりなどを気にするのでしょうか。それは、唯一の神さまを知らず、愛さないからです。愛の神さまを知らない人は、明日のことが心配でたまらなくなり、怖くなってしまおうのです。誰がその人に伝えてあげるのでしょうか？

いのちのばん

7月16日（月）問10 マタイ28章19節
父と子と聖霊の名によって、洗礼を
 「天のお父さま」、今週は「三位一体」について学びます。神さまを正しく知ることができるように、「聖霊なる神さま」がわたしの心を照らしてください。「主イエス・キリスト」のお名前によってお祈りいたします。アーメン。



7月19日（木）問10 マタイ28章19節
父と子と聖霊の名によって、洗礼を
 まだ、洗礼を受けていないお友達も、イエスさまを信じお祈りしているなら、大丈夫！ あなたも、神さまの愛の中にいます。「聖霊なる神さま」は、今、あなたを祈れるようにして下さい、「イエスさま」は、あなたのお祈りをもっとすばらしくして、「天のお父さま」に届けて下さいます。

7月17日（火）問10 ヨハネ4章16節
神は愛です
 唯一の神さまは決してひとりぼっちの神さまではありません。父なる神さまと御子なる神さまーイエスさまと聖霊なる神さまは、いつも愛しあって離れることはありません。これが愛です。神さまは、あなたをこの「三位一体」の神さまの愛のまん中に入るとして招いておられます。

7月20日（金）問10 コリニ13章13節
キリストの恵み、神の愛、聖霊の
 人間の頭の中におさまってしまうようなカミは、ちっぽけな偶像でしかありません。でも、あなたが毎日「天のお父さま」に「イエスさまのお名前によって」お祈りしていると、だんだん聖霊なる神さまのおかげでまことの神さまが分かって来ます。お祈りしない人には分かりません。

7月18日（水）問10 マタイ28章19節
父と子と聖霊の名によって、洗礼を
 赤ちゃんのとき、洗礼を受けたお友達もいるでしょう。牧師先生は、あなたの額に「父と子と聖霊の御名によって」と宣言して、手のひらのお水を注ぎました。それによって、あなたは今日まで、父と子と聖霊の愛の中に入り、包み込まれて生きてきたのです。すごいね。すばらしいね。！（^^）！

7月21日（土）問10 ヨハネ10章30節
わたしと父とは一つである
 真の神さまが三位一体の神さまであることを教えてくださったのは、イエスさまです。イエスさまを信じると、神さまと仲良しになれるし、なりたくなります。また、お友達とも仲良くなれるし、なりたくなります。



いのちのばん

7月23日（月）問11 エフェソ1章4節
 てん ち そうぞう まえ かみ わたし あい
天地創造の前に、神は私たちを愛し

神さまは、あなたが生まれる前から、天と地をお造りになられる前から、教会に来てイエスさまを信じるようにちゃんとご準備しておられたのです。「偶然」なんかじゃありません。神さまは間違えたり、失敗されません。安心です。



7月26日（木）問11 ロマ11章36節
 えいこう かみ えいえん
栄光が神に永遠にありますように

神さまは、はじめから、世界を神の栄光のためにお造りになろうと決めておられました。ですから必ず宇宙の果てまで神さまの栄光は現されて行きます。人生の目的とは何ですか。私たちは喜び進んで神さまの栄光のために生きるのです。



7月24日（火）問11 コロサ1章16節
 おうざ しゅけん しはい けんい
王座も主権も、支配も権威も

見えるものも見えないものも、すべてのものは、イエスさまにおいて、イエスさまによって、イエスさまのために造られています。ですから、イエスさまこそ、世界で一番偉くて強いお方です。イエスさまを信じているあなたは、今日も、この力強い愛で守られています。

7月27日（金）問12 イザヤ52章10節
 ひと かみ すく あおぐ
すべての人が神の救いを仰ぐ

わたしたちの神さまを信じ、日曜学校に来ているお友達は、日本ではまだ少ないです。でも、わたしたちの神さまは神さまです。世界中の人たちが、そしてわたしたちの周りの人たちも、イエスさまの力を認める日が来るのです。そのときまで力をあわせてお祈りし、伝道に励みましょう。

7月25日（水）問11 ロマ11章36節
すべてのものは神から出て

あなたは宿題をいつも忘れずにきちんとできていますか？ 今日の日、計画通りにできましたか？ 神さまは、すべてのご計画を間違いなく、実行し、完成されるお方です。その中心は、あなたと世界を救うことです。

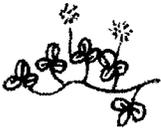


7月28日（土）問12 創世記1章1節
 はじ めに かみ てん ち そうぞう
初めに、神は天地を創造された

神さまのご計画は、天地の創造によって実現します。「光あれ」とみ言葉を語られて、ただちに光が注がれました。この造られた明るい世界は、わたしたちの遊び場、喜び楽しむ場所です。今日もみ言葉を聴いて元気に遊び勉強しよう。



いのちのばん

<p>7月30日（月） 問12 ヨハネ4章23節 神は光を見て、良しとされた</p> <p>わたしたちが何かを作るとき、失敗することがあります。でも、神さまが造られたものはすべて良いものばかりでした。しかもそれらは人間のためにプレゼントされたものなのです。ですから、空気も水も大切にしたいですね。</p> 	<p>8月2日（木） 問13 詩編103編19節 主権をもってすべてを統治される</p> <p>神さまによって造られたこの世界は、神さまによって今も治められているから存在しているのです。地球も太陽も、ひとりで勝手に動いているわけではないのです。神さまが生きて働いておられるから、すべてのものは守られているのです。今日も守ってくださることを感謝します！</p>
<p>7月31日（火） 問12 ヨハネ1章3節 万物は言によって成った</p> <p>「光あれ」と仰せになられたら、光が注がれました。神さまのみ言葉がすべてのものをおつくりになられたのです。神さまは今日もあなたに聖書のみ言葉を通して働きかけてくださいます。み言葉を信じれば、あなたの魂に力があたえられます。</p> 	<p>8月3日（金） 問13 ローマ8章28節 万事が益となるように共に働く</p> <p>わたしたちの神さまは生きておられる真の神さまです。たった今も、神さまは、あなたの上で、あなたの横で、あなたの心の中で、あなたに対するすばらしい愛のご計画、救いのご計画を進めてくださいます。あなたも体を乗り出して、神さまのお働きに加わらせていただきます！</p>
<p>8月1日（水） 問12 ヘブライ11章3節 世界が神の言葉によって創造され</p> <p>わたしたちが何かを作るとき、必ず「材料」を使います。神さまが世界を造られたのは、ただみ言葉だけでした。あなたを神さまの子どもにするためにも、ただみ言葉だけです。聖書の約束を信じる、それだけであなたも神さまのみ言葉のもので、神の子とされ、祝福されます。</p>	<p>8月4日（土） 問13 ヘブライ1章3節 御子は～万物を～支えておられ</p> <p>イエスさま、今日も力あるみ言葉によって世界とこの一日を支えておられるからわたしは、安心して過ごすことができます。明日、みんなが元気に教会に集って、み言葉を聞けるようにしてください。</p> 

いのちのばん

8月6日(月) 問13 マタイ10章30節
髪の毛までも一本残らず数えられ

天のお父さま、あなたのお許しがないければ、わたしの髪の毛一本までも落ちることはありません。どんなに苦しい病気も悲しいことも、すべてのことがわたしの信仰の役に立つようになって行くのです。今日も天のお父さまの善い力がわたしを支え守ってくださることを感謝します。

8月9日(木) 問14 ヨハネ16章33節
勇気を出しなさい。世に勝っている

天のお父さま、そうお呼びするだけで、独りぼっちでいても、こわくありません。お父さんよりお母さんより、他の誰より近くにいてくださり、敵と戦い、守ってください。守るのは神さまだからです。これ以上の幸せはどこにもありません。



8月7日(火) 問14 マタイ14章27節
安心しなさい。恐れることはない

夏になると、テレビなどで幽霊の話がでてきます。安心して下さい。イエスさまを信じているあなたには、幽霊なんか出てきません。イエスさまのお名前をお呼びする人は、幽霊だとかたたりだとか……だまされません。



8月10日(金) 問15 創世記1章27節
神はご自分にかたどって人を創造

神さまは人間を神さまに「かたどって」創造されました。神さまとお話できるものという意味です。ですから、お祈りする人こそ当たり前の人です。お祈りしない人を神さまはどれほど悲しんでおられることでしょう。



8月8日(水) 問14 出エジ20章4節
いかなる像も造ってはならない

星占いや手相占い、生まれる前のこと……。ぜーんぶ、でたらめです。どうして大勢のお友達は気にするのでしょう。天のお父さまの愛と善いお力を知らないから、何か悪いことが起こるかもと不安になるのです。イエスさまを信じるわたしたちは、安心です！ 伝えてあげようね。

8月11日(土) 問15 創世記1章27節
男と女とに創造された

三位一体の神さまは、いつもお互いに愛しあっておられます。その神さまに似るようにと、人間をお互いに愛し合い、仲良くしあうものとして造られました。友達、兄弟、家族と仲良く生きる人こそまことの人間です。兄弟げんかからお守り下さい。明日いっしょに教会に行けますように。

いのちのばん

8月13日（月） 問15 創世記2章7節
土のちりで人を形づくり
 人の体の元素は土の元素と同じなの
 だそうです。人は造られたものなの
 です。どんなにえらい人間も、神さま
 になれるわけがあ
 りません。人がそ
 れを忘れるなら、
 神さまに厳しく裁
 かれます。



8月16日（木） 問15 ガラテ3章12節
その定めによって生きる
 最初の人は、神さまのご命令を守る
 ことができるように最高の傑作とし
 て完璧に創造されました。その定めを
 守ることによって、
 永遠の命と祝福が与
 えられていました。
 罪は神さまの責任で
 はありません。



8月14日（火） 問15 創世記1章27節
その鼻に命の息を吹き入れられた
 人間が真の人間になったのは、神
 さまの命を吹き入れられたからです。
 今、神さまの顔（口）に向かってあな
 たの顔（鼻）は向けられていますか。
 向きあうことが礼拝で
 す。神さまの息、聖霊
 さまはあなたに豊かに
 注がれています。

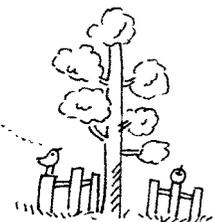


8月17日（金） 問16 創世記2章17節
決して食べてはならない
 すばらしく造られた人間は、自分
 の自由な決断で「食べてはならない」
 とのご命令を守れたはずですが。ところが、「善悪を知る木」の実を食べてし
 まいました。人間は、自分の都合のよ
 いように「善いこと悪いこと」を決め
 てはいけません。神さまのみ言葉にそ
 むくことが悪であり罪なのです。

8月15日（水） 問15 詩編8編5節
あなたが御心に留めてくださる
 今日は敗戦記念日です。神にかたど
 られた人間がお互いを殺しあう戦争
 ほど、恐ろしい神さまへの罪はありま
 せん。平和の神さま、世界中の戦争を
 止めさせてください。
 日本と世界に平和を作
 りだすために私たちが
 用いて下さい。



8月18日（土） 問16 創世記3章6節
女は実を取って食べ～彼も食べた
 エバさんは悪いことを自分ひとり
 でしないで、アダムさんを誘いまし
 ました。一緒に神さまに
 罪を犯しました。僕
 たち私たちは、一緒
 になって神さまに喜
 ばれる善いことをし
 たいですね。



いのちのばん

<p>8月20日（月）問17 マルコ10章21節 あなたに欠けているものが一つ</p> <p>十戒をきちんと守れたら罪人ではありませんが、その一つだけでも守れなければ罪人なのです。イエスさまのところにやってきたまじめな金持ちは、自分が罪人であることを教えていただきました。離れ去る必要なんかありません。「イエスさま、ごめんなさい」と言えばよいのです。</p>	<p>8月23日（木）問18 ローマ3章11節 神を捜し求める者もない</p> <p>罪とは「的外れ」のことです。「人生の目的」である神さまの栄光をあらわすことからはずれて、自分の栄光を求めます。イエスさまを信じれば、あなたは「的」に向かって進んで行けます。自己中心から神中心へ！</p> 
<p>8月21日（火）問17 ヨハネ3章23節 掟とは～互いに愛し合うことです</p> <p>互いに愛し合うことが、神さまが望んでおられるもっとも大切なこと、ご命令です。罪とは、してはならないことをするだけではなく、しなければならぬことをしないことです。わたしたちは罪人です。</p> 	<p>8月24日（金）問20 エフェソ2章3節 生まれながら神の怒りを受ける</p> <p>最初の人々が罪を犯したせいで、すべての人間は生まれたときから罪の性質を持ち、教えられてもいないのに罪を犯し、悪いことをしてしまいます。神さまの怒りと裁きは、生きていても死んだ後にも、永遠におよびます。神さまを喜ぶことができないようにされるのです。</p>
<p>8月22日（水）問18 ローマ7章15節 自分のしていることが分かりません</p> <p>罪を犯している人間は、すでに神さまの怒りとさばきを受けています。心がいじけて、自分中心になって、けんか、嘘、盗み……どんどん悪いことをして、止められなくなるのです。イエスさまに近づき、おそろしい罪から離れよう。</p> 	<p>8月25日（土）問19 ローマ5章12節 すべての人が罪を犯したからです</p> <p>天のお父さま、罪人なのは他の人のことではなく、このわたしのことです。わたしこそ神さまの怒りを受けなければならぬのです。それなのに、イエスさまが身代わりになってくださいました。心からありがとうございます！</p> 

いのちのばん

8月27日（月） 問21 ローマ5章9節
神の怒りから救われる
 わたしたちは、ボールが坂道をころがり落ちてゆくように、ほうっておくと神さまのほうではなく、罪のほうへと転がりおちてゆきます。それが罪のちからです。でも、イエスさまが私たちを止めてくださいます。反対に、天のお父さまのほうへと転がし、天国へと昇らせて下さるのです。

8月30日（木） 問21 ローマ3章24節
イエスによる贖いの業を通して
 天のお父さま、なぜ、イエスさまを十字架につけてしまうような恐ろしい罪を犯す人間のために、ひとり子のイエスさまを与えてくださったのですか。わたしの罪を赦す方法は他にはないのですか。贖いの業に感謝します！



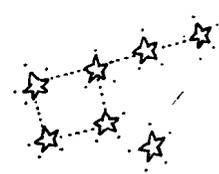
8月28日（火） 問21 マタイ27章46節
わが神、なぜわたしをお見捨てに
 罪人のわたしたちは、神さまに見捨てられて当たり前です。ところが、わたしたちは決して神さまに見捨てられることはないのです。なぜなら、御子イエスさまが十字架の上で神さまに見捨てられたからです。そのおかげで、私たちは神さまの子どもにしていたいたのです！ ハレルヤ！

8月31日（金） 問21 エフェソ2章5節
救われたのは恵みによるのです
 あなたが救われて、神さまの子どもにされたのは、なぜですか。教会に休まずに通っているから？ まじめな子だから？ よい子だから？ 素直な子だから？ 頭が良いから？ 優しい子だから？ 勇気のある子だから？ 元気な子だから……？ 全部違います。神さまの一方的な愛、恵みによるのです。

8月29日（水） 問21 エフェソ1章4節
キリストにおいてお選びになり
 天のお父さま、日曜学校で「生まれる前から神さまに愛されてきた〇〇ちゃんの誕生日です。おめでとう。」と歌うたびに、とても不思議に思います。でも、聖書に書いてあるので、本当のことです。これからも愛し続けてください。



9月1日（土） 問22 テモテニ2章5節
神と人との間の仲介者
 聖なる神さまと私たちの間に立つて、その間をとりもって、正しい関係を新しく結んでくださるお方、つまり「仲介者」は、人となられた御子イエスさまだけです。だから、「唯一の主」とお呼びして、賛美するのです。



いのちのばん

9月3日（月） 問22 コロサイ2章9節
キリストの内に～満ち溢れる神性

あなたを贖うイエスさまは、真の神さまでなければなりません。神の御子でなければ、あなたを神の子ども（養子）にすることはできません。まったく罪を犯さず、罪に勝利することがおできになるのは、神さまだけです。



9月6日（木） 問23 マタイ1章21節
その子をイエスと名付けなさい

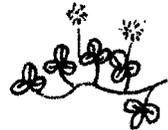
神の御子が人となられたとき、わたしたちと同じように名前がつけられました。その意味は「罪からの救い主」です。神さまがおつけになられたお名前なのです。ですから、本当にイエスさまは私たちを罪からお救いくださったのです。「イエスさま」と心新たにお名前をお呼びしましょう。

9月4日（火） 問22 ガラテヤ4章4節
御子を女から～生まれた者として

あなたを贖うイエスさまは、真の人間でなければなりません。体をもつ人間の罪を償い、身代わりに死なれるためには、正真正銘の人間でなければなりません。イエスさまは、永遠に真の神（神性）であり真の人（人性）であり続けてくださるのです。「二性一人格」の神さまと言います。

9月7日（金） 問23 ルカ3章22節
あなたはわたしの愛する子

イエスさまのことをキリストとお呼びするのは、天のお父さまから「油（聖霊）を注がれ」て、神さまのお働きをなさるお方となられたからです。イエスさまは昔も今も「預言者・祭司・王」としてわたしたちを救うために働いておられます。



9月5日（水） 問22 ローマ9章5節
肉によればキリストも彼らから出

イエスさまは、あるときは神さま、あるときは人間に変化するのではありません。永遠の神の独り子は、今から2000年前のクリスマスの日にお母さんのマリアさんから肉体をもって生まれてくださいました。その目的は、あなたの友達となり、あなたを救い、神さまの子どもとするためでした。

9月8日（土） 問23 ヨハネ20章28節
「わたしの主、わたしの神よ」

トマスさんは、この目で見て、手で触ってみなければ決して信じないと言いました。イエスさまはトマスさんに、釘の傷跡が残る御手を差し出されました。トマスさんと一緒に申し上げましょう。イエスさまはわたしの主、わたしの神さま。



いのちのばん

9月10日（月）問24 ローマ3章24節
イエスによる贖いの業を通して

主イエスさま、わたしは自分の罪によって神さまから罰せられて当たり前なのに、わたしを神さまの子どもとして取り戻すために、その尊いお命をわたしのために十字架で支払ってくださいました。心から感謝します。



9月13日（木）問24 ヨハネ11章25節
わたしを信じる者は、死んでも生きる

イエスさまは、死んだラザロを生き返らせてくださいました。それはイエスさまが復活され、体が死んでもそれで終わりにならない真の命を持っておられることをお示しになるためです。今はラザロのような経験をすることはできませんが、イエスさまを信じる人は死んでも生きるのです。

9月11日（火）問24 マタイ20章28節
身代金として自分の命を献げるため

イエスさまはあなたを、神さまとお話のできない真っ暗な地獄から、いつも神さまとお話のできる光の国、天国へと取り戻してくださいました。あなたと引き換えになって、地獄にまで行かれました。でも、イエスさまはお甦りになられ、今、天のお父さまの隣におられます。＼（^o^）／

9月14日（金）問25 ヘブライ1章2節
御子によってわたしたちに語られ

復活されたイエスさまは天に昇られ、そこで今も教会のために働きつづけておられます。天のお父さまは、イエスさまによってみ言葉を語ってくださいました。イエスさまのみ言葉を聴くことは、神さまの語りかけを聴くことです。



9月12日（水）問24 コリー15章54節
死は勝利に飲み込まれた

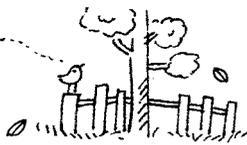
イエスさまは、十字架で死なれました。どんなに強い人も、死に勝てる人はいません。でもたった一人、イエスさまだけは死に打ち勝たれ三日目に甦りになりました。イエスさまこそ勝利者です。また、イエスさまを信じて一つに結ばれている私たちも勝利者としていただけます。

9月15日（土）問25 ヨハネ15章15節
父から聞いたことを～知らせた

イエスさま、わたしのことを友だちと呼んでくださることをありがとうございます。イエスさまが天の神さまのことをぜんぶ教えてくださいましたからです。もっと深い友達になれるようにもっと教えてください。



いのちのばん

<p>9月17日（月）問25 ローマ10章17節 信仰は～聞くことによって始まる</p> <p>天のお父さま、今日も聖書を通して キリストのみ言葉を、聖霊なる神さま のみ声を聴かせてくださりありが とうございます。ですから、このよう にお祈りできるのです。どうぞわたしの 学校のお友達にも神さまのみ言葉を 聞かせてあげてください。今週もわた しを用いてください。</p>	<p>9月20日（木）問26 ローマ8章34節 わたしたちのために執り成して</p> <p>わたしたちが今お祈りできるのは、 天のお父さまの右でイエスさまがわ たしたちのためにお祈りしていてく ださるからです。愛するイエスさま、 これからもわ たしたちのためにお祈りし てください。</p> 
<p>9月18日（火）問26 ヘブライ2章17節 イエスは～憐れみ深い、忠実な大祭司</p> <p>旧約聖書の時代、神殿で神さまと人 間の間に立って、その関係を取り持つ 仕事をしていたのが祭司です。イエス さまは最後の最大の祭司となるため に真の人間とされました。十字架の 上で神さまとわたしたちの間に立っ て、その関係をまったくよいものに してくださったのです。</p>	<p>9月21日（金）問27 イザヤ33章22節 主は我らの王となって～救われる</p> <p>復活されたイエスさま は、今、わたしたちの王 さまとなって弱いわたし たちを悪魔から守ってく ださい。悪魔と一緒に に滅びの道へと落ちてゆ かないように、わたしたちに代わって 戦ってくださっています。</p> 
<p>9月19日（水）問26 ヘブライ9章14節 ご自身を～神に捧げられたキリスト</p> <p>祭司は罪を犯した人の罪を赦して いただくために神殿で動物を神さま に捧げていました。ところが、大祭司 のイエスさまは、十字架の上でご自分 を神さまに捧げてくださいました。こ うして、わたしたちは神さまに完全に 赦されました。ですから、もう二度と 動物を捧げる必要はなくなりました。</p>	<p>9月22日（土）問27 マタイ28章18節 天と地の一切の権能を授かっている</p> <p>これまでどれだけ多くの王さまが 人々の上に立って支配してきたこと でしょう。家来は王さまのために死ぬ ことまで求められました。ところが、 天地を支配する真の王さまは命をか けて、わたしたち、家来を守って下 さったのです。ですから、わたしたち は喜んでイエスさまに従います。</p>

いのちのばん

9月24日（月）問27 コロサイ1章16節
王座も主権も、支配も権威も
 天にあるものも地にあるものも、目に見えるものも見えないものも……、世界にあるすべては、天のお父さまが、イエスさまにおいて、イエスさまによって、イエスさまのためにつくられたのです。つまり、世界で一番偉いのは、イエスさまなのです！ このイエスさまがわたしたちの王さまです。

9月27日（木）問29 ヨハネ15章16節
わたしがあなたがたを選んだ
 わたしたちは教会に来てイエスさまのお話を聞くのが好きになり、イエスさまを信じるようになりました。それは、わたしたちがイエスさまを選んだのではなく、イエスさまに選んでいただいたからなのです。それを間違えずに実行に移されたのは、聖霊なる神さまのおかげです。

9月25日（火）問28 ローマ4章5節
働きがなくても、その信仰が義と
 天のお父さま、わたしは救われるために何もしていません。何もできません。それなのに神さまの子としていただきました。イエスさまの十字架をただ信じたからです。



9月28日（金）問29 ヨハネ16章8節
その方が来れば～明らかにする
 聖霊なる神さまがわたしたちに働いてくださるとき、聖書のみ言葉、礼拝のお話、イエスさまのことがよくわかって来ます。わたしたちが神さまをどれほど悲しませる罪人であるのか、神さまはどれほどわたしのことを愛しておられるのかも分かってきます。もっと分からせてください。

9月26日（水）問28 ローマ9章16節
人の意志や努力ではなく、神の憐れみ
 神さま、どうしてぼくのお友達はまだ教会に来ていないのに、僕だけイエスさまを信じ教会に来れるようになったのですか。「その理由はあなたにはありません。ただ、わたしの憐れみによるのです。」



9月29日（土）問29 エフェソ1章6節
輝かしい恵みを～たたえるため
 どうして、なぜ、こんな罪深いわたしがイエスさまを信じる神さまの子になれたのか……？ その理由は神さまだけがご存知です。でも、はっきり教えられていることは、神さまの恵みをたたえるために選ばれ、救われたということです。明日は日曜学校。おもいきり感謝と賛美をささげようね。

2007年10～12月カリキュラム（第27号）

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句	対 応 表
	単 元 の 目 標			
10月7日	復活の主イエスとペトロ	ヨハネ21:15-19	イザヤ55:11	
	ペトロを立ち上がらせる主イエスの慰めの力を知り、この主に従おう			
10月14日	主イエスの昇天	使徒1:6-11	使徒1:8a	50 69
	わたしたちの救いのために天に上げられた主イエスの御姿を仰ぎ見よう			
10月21日	聖霊の降臨	使徒2:1-13	使徒2:4	51 70
	上げられたキリストの霊を注がれて、神の国が進展する。聖霊を祈り求めよう			
10月28日 宗教改革記念	ペトロの説教	使徒2:14-42	使徒1:8a	51 70
	聖霊によって福音を力強く語るペトロ。聖霊を受けて、福音に仕えよう			
11月4日	「美しい門」でのいやし	使徒3:1-10	ヨハネ16:33b	53
	聖霊を注がれ、キリストの名によって生かされる者の幸いを知ろう			
11月11日	アナニアとサフィラ	使徒5:1-11	ヨハネー3:20b	54
	聖霊をあざむくことの恐ろしさに目を留める。真実に神と教会に仕えよう			
11月18日	ステファノの殉教	使徒7:54-60	ローマ5:2	(55)
	神のみわざを人間のわざでとどめることはできない。神の御力を仰ごう			
11月25日	サウロの回心	使徒9:1-19a	テモテ1:15	52, 57 74
	神に逆らう者をも福音の器に造りかえる神の御力を知ろう			
12月2日 アドベント	待降節・義の太陽	マラキ3:19-24	マラキ3:20	78
	義の太陽として来られる救い主を待ち望もう			
12月9日 アドベント	待降節・マリアへの告知	ルカ1:26-38	イザヤ7:14	1
	神の御言葉の力に自らをゆだねたマリア。マリアの信仰の姿に学ぼう			
12月16日 アドベント	待降節・マリアの賛歌	ルカ1:39-56	イザヤ55:9	
	小さな者、へりくだる者を高めてくださる救い主である神をほめたたえよう			
12月23日 クリスマス	降誕祭・主イエスの誕生	ルカ2:1-20	ルカ2:11	2
	まことの救い主イエスがお生まれになった。神のみわざを喜び祝おう			
12月30日 年末	ペトロに示された幻	使徒10:9-33	使徒10:34	58 72
	先入観を打ち破り、人間の壁を突き破って進められる神のみわざを知ろう			

※「対応表」欄の上段は、『教会学校教師指導書（旧約編・新約編）』（日本基督改革派教会大会教育委員会発行）の該当する単元を示しています。「対応表」欄の下段は、『神の救いの歴史』（日本基督改革派教会教育委員会発行、1999年）の該当する単元を示しています。

2007年度 年間カリキュラム

(2007年4月～2008年3月)

二年サイクルの聖書物語（救済史）と教会暦の併用カリキュラム

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所
2007年 25号	4月1日	受難週・進級式	キリストの受難	ルカ23:13－25
	4月8日	復活祭	復活のキリスト	ルカ24:36－49
	4月15日		ヨルダン川を渡る	ヨシュア3章
	4月22日		エリコの攻略	ヨシュア6章
	4月29日		ギデオンの精鋭	士師記7章
	5月6日		サムソン	士師記16章
	5月13日	母の日	ナオミとルツ	ルツ記1章
	5月20日		ルツとボアズ	ルツ記2章（～4章）
	5月27日	聖霊降臨祭	新約の教会の誕生	使徒言行録2:1－13
	6月3日		ダビデとゴリアト	サムエル上17章
	6月10日	花の日	ダビデとヨナタン	サムエル上20章
	6月17日	父の日	ダビデへの契約	サムエル下7章
	6月24日		ソロモンの神殿建築と祈り	列王記上8:22－53
26号	7月1日		王国の分裂	列王記上12章
	7月8日		バアルとの対決	列王記上18章
	7月15日		残りの者	列王記上19:1－18
	7月22日		裁きの預言	エゼキエル6章
	7月29日		回復の預言	エゼキエル34章
	8月5日		燃え盛る炉	ダニエル3:1－30
	8月12日	(平和)	ライオンの洞窟	ダニエル6章
	8月19日		城壁再建	ネヘミヤ2章
	8月26日		主を喜び祝う	ネヘミヤ8:1－12
	9月2日		役人の息子のいやし	ヨハネ4:43－54
	9月9日		ベトザタの池でのいやし	ヨハネ5:1－18
	9月16日	(17敬老の日)	生まれつきの盲人のいやし	ヨハネ9:1－12
	9月23日		ラザロを生き返らせる	ヨハネ11:1－44
9月30日		キリストの十字架	ヨハネ19:28－30	

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所
2007年 27号	10月7日		復活の主イエスとペトロ	ヨハネ21:15－19
	10月14日		主イエスの昇天	使徒1:6－11
	10月21日		聖霊の降臨	使徒2:1－13
	10月28日	宗教改革記念日	ペトロの説教	使徒2:14－42
	11月4日		美しの門でのいやし	使徒3:1－10
	11月11日		アナニアとサフィラ	使徒5:1－11
	11月18日		ステファノの殉教	使徒7:54－60
	11月25日		サウロの回心	使徒9:1－19a
	12月2日	アドベント	待降節・義の太陽	マラキ3:19－24
	12月9日	アドベント	待降節・マリアへの告知	ルカ1:26－38
	12月16日	アドベント	待降節・マリアの賛歌	ルカ1:39－56
	12月23日	クリスマス	降誕祭・主イエスの誕生	ルカ2:1－20
	12月30日		ペトロに示された幻	使徒10:9－33
2008年 28号	1月6日	新年	エルサレム会議	使徒15:1－21
	1月13日		異邦人への伝道	使徒16:6－15
	1月20日		看守の救い	使徒16:16－34
	1月27日		アレオパゴス説教	使徒17:16－34
	2月3日		土の器なれど	コリント二4:1－15
	2月10日	レント (信教の自由)	競争を走り抜くパウロ	フィリピ3:12－21
	2月17日	レント	喜びへと励ますペトロ	ペトロ一1:3－9
	2月24日	レント	天上のキリスト	黙示録1:9－20
	3月2日	レント	天上の礼拝	黙示録4章
	3月9日	レント	新しい天と新しい地	黙示録21:1－8
	3月16日	受難週	受難・十字架のキリスト	マタイ27:45－56
	3月23日	復活祭	復活祭・復活のキリスト	マタイ28:1－10
	3月30日		再臨を待ち望む	黙示録22:6－21

〈執筆よりひとこと〉

- 幼稚科の話の難しさを実感しました。みなさんの教会学校と共に主の恵みがありますように（関キリスト教会教会学校教師会）。
- 教案誌に助けられ日頃の奉仕をしている者が執筆の立場に回り、多くの戸惑いを覚えつつも、教師会のメンバーみんなで分担して仕上げました。小学科下級の割にはどれも難しくなりましたが、読者が咀嚼して参考にしてくださいますならば幸いです（神港教会聖書学校教師会）。
- まとまった量の聖書研究をさせていただきよい経験でした（富井篤）。
- この夏が信仰の成長の時となりますように、お祈りしています（岡本告）。
- 「いのばん」を用いて、毎日お祈りできるように、どうぞ励ましてください（相馬伸郎）。
- 子供たちの隠れた悩み、叫びに寄り添う者でありたいと願っています（梶浦和城）。

〈あとがき〉

- まもなく夏を迎えます。それぞれの教会・伝導所で、また中会でも、夏のキャンプや修養会が行われることと思います。信仰の学びと交わりのよい機会です。一つひとつの営みが祝福されるよう、お祈りしています。
- 日曜学校の働きは、教師会が中心になって担い

ますが、教会の働きです。教会全体の力を集めなければなりません。そこで要になるのは、やはり教師（牧師）です。教師が、日曜学校教師たちとともに力を合わせてこの尊い奉仕にあずかれますように。日曜学校教師方も、どうぞ、積極的に、謙虚に牧師の（加えて、お互いの）指導を求めてください。

- 弊誌は、創刊以来、日曜学校教師方の執筆奉仕によって担われてまいりました。どうぞ、教師の皆様の声（文章）をお寄せください。
- 分級展開例の執筆者が、与えられますようお願いください。購読利用者、即、執筆奉仕者とお考えいただけませんか。また、編集部のために祈りのご支援をよろしくお願い申し上げます。皆様とともに、少しずつでも、充実した誌面となるように励んでまいりたいと思います。

〈購読の申し込み〉

- 『教会学校教案誌』をぜひご購読ください。また、別冊『子どもカテキズム』（300円）をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第20号までは一部500円で販売しています（品切れの号もあり）。

名古屋岩の上传道所 相馬伸郎まで

〒458-0021 名古屋市緑区滝の水2-2012

Tel/Fax. 052-895-6701

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき	分級展開例
長田詠喜 (高松東教会牧師)	幼稚科
巻頭説教	関キリスト教会教会学校教師会
山下朋彦 (平和の君伝道所宣教教師)	小学科下級
教会学校・日曜学校訪問	神港教会聖書学校教師会
岡本恵 (湖北台教会牧師)	小学科上級
特別寄稿	富井篤 (宝塚教会長老、教会学校教師)
吉田謙 (千里摂理教会牧師)	中学科
聖書研究	岡本告 (秩父教会牧師)
貫洞賢次 (札幌伝道所宣教教師)	成人科
牧野信成 (神戸改革派神学校神学牧師)	吉田隆 (仙台教会牧師)
小野田雄二 (上野緑ヶ丘教会牧師)	いのちのパン (子ども聖書日課)
山村貴司 (南与力町教会牧師)	相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)
櫻井良一 (東川口伝道所協力教師)	相馬直子 (名古屋岩の上伝道所日曜学校校長)
佐々木弘至 (奈良伝道所代理宣教教師)	表紙イラスト
説教展開例	吉田恵美子 (千里摂理教会)
三川栄二 (稲毛海岸教会牧師)	本文イラスト
小野静雄 (多治見教会牧師)	新海敬造 (名古屋岩の上伝道所)
辻幸宏 (大垣伝道所協力牧師)	相馬直子 (名古屋岩の上伝道所日曜学校校長)
木下裕也 (名古屋教会牧師)	
相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)	
望月信 (高蔵寺教会牧師)	

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上伝道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
望月 信	高蔵寺教会牧師
梶浦和城	豊明教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』
2007年7・8・9月号 (季刊)
第26号
2007年5月27日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 教育委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上伝道所 宣教教師 相馬伸郎 〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012 Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ 〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F
頒価	900円 (本体価格)
